

すべきものとして、前書には馬可傳等あり、後者には約翰傳の言多し。羅馬のクレメンス(九五年死)の書翰といふは多數傳はり居れど、其中にて『哥林多第一書』は十六世紀中アレキサンデリアにて發見したる寫本と、一八七五年コンスタンチノポリスのフェルナリ圖書館にて發見したる寫本とありて、學者の確にクレメンスの文書とするものなるが、馬太傳馬可傳路加傳より自由に引用し居れり。

是等の古文書は新約聖書の正純を證明するものたる勿論なるが、之を直接に耶穌基督の史的實在を證明するものと見ても甚だ有力なり。特に『十二使徒の教訓』の如き、又羅馬のクレメンス文書の如き、第一世紀の末第二世紀の初に當り、基督のことを語り、其の教訓や生涯を記すものなれば、新約聖書文書其自身と殆ど同等の價值あるものなり。此等の文書に記されて、然も其の中心の人格となれる耶穌を豈歴史より抹殺することを得んや。是等のみを見ても、耶穌は確に其等の言ふ所の時に、其等の言ふが如く生き、語りしとせざるを得ざる也。

然れども茲には以上を取て福音書の正純の確なる證明の材料とすべし。福音書は四つとも既に存在して、信すべき基督の事跡の記録として、有力なる師父等に奉せられ、

一般の信徒に讀まれ居たる記事存し、或ものは一世紀末に然りしを見る。是れ外部の文書の證明に由て知り得る所なり。既に聖書の文書が使徒時代のものに屬し、一般の基督信徒の承認を受け居りしとせば、其の中に傳へられたる耶穌の史上の存在者たりしは論ずるまでもなきことなり。福音書記者は一定の目的を有して著作せし故に、多少自己等主觀に着色せられたる傳記を書きたることはあらんも、無を有とし、又は針小を棒大とすること能はざりしなり。彼等の記述の對象たり中心たりし耶穌基督は確に存在したりしなり。

且又福音書の内部を精密に究むれば、いよゝ其の信すべき一代記なるを見るなり、試に之を『アポクリファ』(聖書偽典)の基督傳と比較し見よ。後者には荒唐不稽の事充滿し、誇張虚飾を事として、而して其の傳する耶穌の人格に至ては、却て茫然漠然如何にしても歴史の人物と見え、唯だ空想の人、虚構の事實との外感せられざるに、福音書は全然之と趣を異にし、一個の歴史の面目抹すべからざるなり。福音書の筆は質朴なり。約翰傳に於て時代の思想に彩られたる事跡の記録を見、馬可傳に於て詩的の描寫を見ると雖も、然も偽文書の贅美なると同日の譚に非ず、佛教の經文の絢爛に

して却つて冗長漫散なると比しても、史的のものたる面目は著しく異なるなり。且又書中に後の大使徒の事を記する所と雖も、毫も斟酌繙縫せず、有りし事を有りしまゝに記せり。而も其の功を録し過を傳ふるに當りても、後の僞典のやうに、決して或弟子を揚げ、或弟子を貶する如き故意なる目的を含めること少しも見えず、極めて無邪氣に又公平に之を表はせり。書中の人物の中にて、ピラトの如き、ヘロデ・アンテパスの如き、ヘロデ・ピリポの如き、洗禮のヨハネの如き、祭司長カヤバの如き、アンナスの如き、羅馬及び猶太の史家の文書と共通し、其の性格また明劃に現はれて、互に一致し居れり。時代の風俗習慣など、其の微細にして人の注意に留まるべからざる點も一致せり。羅馬行政の状態や、猶太宗教政治の状態や、即ち方伯、軍隊の制度、徴税の法、サンヘドリン（衆議所）神殿税等は皆當時のものなり。パリサイ黨とサドカイ黨の状態、其の主義、相互の關係の微細點また當時のものなり。土地の名、人の名、みな作爲的に非ず。虚構の地名人名としては、餘りに當時のものに合ひ、又餘りに小さく、又不用のもの、數多し。福音書思想も全く時代の思想なり。即ち「メシア」思想にして、未來記的に其の天より再來するを信する如き、(約翰傳の如きも然り、之を第一世

紀をおくるゝこと多き時代の思想とは見るべからず。思想既に猶太人のものなるに、文章また猶太的なり。福音書の國語は當時の世界語たりし希臘語なれども、希臘人の文章に非ず、他國人が希臘語にて書きしこと明白なるほど、各語句も短く、又特異なり。且つ其の用語には希伯來獨特の意味を含ませ、又は猶太人ならではの言ひ顯はし方あり。ハルナックなどは、福音書の説明の形式は極めて短き一時代の基督教文學のものにて獨特の面目を有し、僅に二三十年後にもはや之を再作し難く、一たび希臘語にて現はるゝや、其の内容は希伯來語に復譯し難きものなりきと言へり。又其の各節の多くは確に實見し又は實見者より確聞したる力を有し、叙述の中心も常に一個の人格耶穌を指す。約翰傳のみは大いに趣を異にする所あれど然も時代文學の面目は歴然顯然たり。まして約翰傳を除きて考ふれば、耶穌の人格は割つべからずして、生命躍如たる明白なる歴史的人物を現はせり。此等を合はせて考ふる時、之を信すべき初代の基督傳と見ずして將た何と見るべきか。

然れども福音書は四ありて、其の内容に多少の變化あり。基督に付て傳ふる所、同じき所と異なる所とあり。時として區々に渉る所あり。特に馬太馬可路加の三福音書と、

約翰福音書とは、基督に付て傳ふる所著しく異れり。何れを史實とすべきか。此に於て福音書相互關係の問題起る。此の問題を考へたる人は古より存せしなり。

第三世紀の初にアレキサンデリアのクレメンスは、福音書中初に成りしは、耶穌の系圖を有する馬太路加兩傳ならんと言ひ、第五世紀の初アウグスチヌスは馬可傳は馬太傳より省畧したる者ならんと言へり。されど福音書の成立に對して根本的研究を試むるものはなかりしが、十八世紀の終に近づきて一七八三年グリースバッハ J. J. Griesbach は説を立て、福音書中先づ成りしは、馬太傳なり、而も傳へらるゝ如く希伯來語の馬太傳ならず、希臘語のものなり、路加傳は之に據りて書かれ、馬可傳は此の兩書によりて書かれしなりと唱へ、聖書批評に一時期を作る。レッシング G. E. Lessing は一七八四年グリースバッハと異なる見方を表はしエウセビウス其他の古代文書に言ふ所の福音書は、今の福音書ならで更に原始的の記録なりしならん、之を改訂して同觀福音書が其れゝ作られしならん、而して此の原始的福音書は希伯來人のものなりしなるべしと論じ、福音書研究に大いなる暗示を與へたり。

其より人々は盛んに思ひ付きに由て假定説を立て、福音書相互の一致と矛盾とを解

釋せんとせり。斯くて先づ矛盾のために研究の故障となる故を以て、福音書群より隔離せられたるは第四福音書即ち約翰傳なり。他の福音書は内容何れも大同小異なるに、約翰傳のみは著しく異なる所あれば、古より他の福音書をば同觀福音書と稱し、約翰傳をば之より區別せしが、聖書批評の勃興は、之を史的ならすとなし、基督傳として信じ難しとなすものを生じぬ。エヴァンソン Edward Evanson は一七九七年福音書の矛盾に關する書を著はし、約翰傳をば第二世紀後半のプラトール派哲學者の著作なりとなし、ライマールス H. S. Reimarus も其前に『耶穌と其弟子の目的』に於て、既に約翰傳の記事をば無視して觀察を立てたり。其後獨逸唯理派の人々は、約翰傳に奇蹟の記事最も少く、且つ記事の年月的順序の調へるあるより、此の福音書を重んじ、ハーゼ H. A. Hase の如き、シュライエナマッケン F. E. D. Schleiermacher の如きは、重に之によりて耶穌傳を著はし、デウチェッラ W. M. L. de Wette も他の福音書よりは約翰傳は正純なりと言ひしが、ストラウス D. F. Strauss 出でて、約翰傳は著しく或る學說に捉はれ居りて、他の福音書に存する傾向の一層發展せる趣の歴然たるを、其の内容によりて指摘し、其の神學的辨證的傾向の多きは、史料として同觀福音書に劣れるを論じ、ウッ

イセ C. H. Weisse 又ストラウスを繼で之を主張し、バウル F. O. Paul、フライデレル O. Pfeiderer は約翰傳を第二世紀のものとし、最近にてはホルマン O. Holzmann シュニーケン O. Schmiedel、フーリャクマ、A. Fülcher、ウヰルマン P. Wemle、ウーデー W. Wede 及び佛蘭西のロアシー A. Loisy、シヤン・レヰイユ Jean Réville など、約翰傳を史的ならすとせり。されど又他方には、之を使徒ヨハネの著作なりと主張し、従來の傳説の信すべき理由を證明せる學者も依然として多し。最近の大いなる名を擧ぐれば、獨逸にてはツォーン F. Zahn あり、ベルナルド・ウマニス Bernhard Weiss あり、バイシュラッハ W. Benschlag あり。英國にはウエストコット B. F. Westcott あり、サンデー W. Sanday あり、ドラモンド J. Drummond あり。其他マックリメント、プラムマー、グローク、ミリガン、サルモン、ドッツ、ライトフット (McClymont, Plummer, Gloag, Milligan, Salmon, Dodds, Lightfoot.) 瑞西のゴーター Godef. 獨逸のルータート、エワルド、マイエル、ヘングステンベルヒ (Luthart, Ewald, Meyer, Hengstenberg) 等今ある人又は三十年程前まで在りし人々にして使徒ヨハネ著作説を固守する人多し。されば約翰傳に付ては研究は未だ結論を成すまでに至らずと謂ふべし。

同觀福音書に關しては、今や議論は大約一所に落着せる觀あり。先に記せるレンソングの説は、十九世紀に入りて(二八〇四年)アイヒホルン J. G. Eichhorn によりて訂正祖述せられ、諸福音書の原書たるものは、當時のバレステナの俗語アラム語にて書かれしものならずして、希臘語の者なるべく、而して洗禮のヨハネの施洗に始まり、復活に終る物語なりしならん。之を同觀福音書著者は共通に用ひしが故に、四十四箇所の一致ありと言へり。然るに此の假定と異りて又説を立つるものあり。即ち耶穌の事跡に關しては、もと口傳行はれ、之が次より次へ移され行く内に、自づから一定の形を成すに至りたるを、後福音書著者が之を取りて福音書を編纂したるものならん。山上の垂訓の如きは其にして、少くも主の祈の如きは其ならんと言ふなり。此の説は一七九七年ヘルデン J. G. von Herder 既に此の傾向の思想を示し、ギーゼン J. K. L. Gieseler 一八一八年之を明にせり。後英國のウエストコット B. F. Westcott、ライト A. Wright 等また之を唱ふ。

斯くの如き研究憶測の混亂動搖の中に、學者の思想は漸くにして一の方向を指して合し、今や殆ど學者間の定説といふべきもの成り立てり。勿論之を絶對的に權威とす

べきにあらず、尙多くの異説あり、將來或は新らしき方面に發展するやも圖るべからずと雖も、然も今より甚だしく異りたる結論には達せざるべしと信ず。其の定説ともいふべきものに謂へらく、先づ注意すべきは、同觀福音書を讀みて、馬可傳に在ることは殆ど馬太路加兩傳に見出ださるゝことなり。馬可傳のみにありて他に無き部分は極めて僅少にすぎず。而して馬太傳も路加傳も、耶穌一代の經歷の大綱は馬可傳の順序を追ひて進み、馬可傳に在る事件の間に、之に無き教訓や事件が挿入せられあり。之を以て觀れば馬可傳は最古の基督一代記にして、馬太傳路加傳は之より材料を取りしと思ふ事を得べし。此れ實に千八百三十八年にクリスチアン・ヘルマン・ウァイセ Christian Hermann Weisse 及びウァンケ C. G. Wilke が殆ど同時に唱へ出でし所にして、其後は此の説を取る人最も多し。されど之に付てもハインリヒ・ホルツマン Heinrich Holzmann の如きは、一時今の馬可傳の前に原始馬可傳ありしと唱へ、スピッター Spitta などは馬可傳は初版二版三版ありたりと唱へ、サンデー W. Sanday も今の馬可傳は改訂を受け居れりと言へり。然れども馬可傳はおほよそ今の如きものにて初より存し、最も早く出でたる福音書なりしが如し。第二世紀前半の人バピアスの文書に

も、マルコ(マコ)はペテロより聞きし所を記憶に従ひ正確に書き列ねたりといひある也。此の馬可傳の外にも勿論基督の事跡に關する文書早くより存在せしは疑ふべからず。路加傳一章二節を見れば、著者が路加傳を編纂する時には、既に多くの人々基督に付て傳へられたる事を記載せんと材料を手に取りりとあり。以て基督に關する幾何の記録ありしを知るべし。馬太傳と路加傳とは馬可傳を材料としたると共に、馬可傳以外の記録及び口傳をも材料として編纂したるものなり。而して此の馬可傳以外の材料は決して唯一のものに非ざりしこと又明なり。何となれば若し唯一なりしならんには、馬太傳と路加傳とは全く相同じかるべきなり。然るに同じ事件を記する間にさへ相互の相異なるのみならず、一に在りて他に無きものも少からず。茲を以て馬可傳以外の材料は多數ありしを見るべし。思ふに基督に關する文書口傳斷片的に所々に在り、移し寫されて傳はり讀まれ居しものならん。其を馬太傳著者は自己の手に入る限りの材料によりて基督傳を書き、路加傳著者は又自己の手に入る限りの材料によりて基督傳を書きしものなるべく、而して兩者のともに仰ぎたる材料にして、幸にも其のまま兩書と並び傳はりしが馬可傳なるべく、馬太路加が共通して仰ぎたる材料にはあ

りながら、其の原本は遺佚して永く世界より失はれたるものもあり、馬太傳のみに取られたる材料もあり、路加傳のみに取られたる材料もありしなり。馬太傳と路加傳の關係は如何。甲は乙より取る所あるか。之には學者の意見區々にて、路加は馬太をも材料としたりと言ふあり、否馬太は路加より取る所ありと言ふもあり。又兩者は各々獨立して互に取る所なしと言ふあり。余の考ふる所にては、兩者は獨立せり。何となれば同事件を記する所に於ても、兩者は各々異なり、基督の教訓なども馬太にては同時同所に在りしことなれるものが、路加傳にては所々の説話の中に斷れつゝに入れられあるなどのことあり。されば兩書の著者は何れも相知らずして著作せしものなるべし。エワルド、ロイス、ウァイス、ホルツマン、ワイツゼッケル、マイエル、アデネー (Ewald, Reuss, B. Weiss, H. Holtzmann, Weizsäcker, Meyer, Adeney) 等みな之を認む。然らば馬可傳以外の多くの材料は何なりしか今日より一も知るべきものなきか。勿論明白に之を知り難しと雖も、思ふに使徒マタイの『ロギア』(訓話録)は其の一なりしならんか。マタイが基督に關する記録を作りしことは、二世紀の前半の小亞細亞イエラポリスの監督バピラス (紀元一三〇年) の文書の斷片に出づ。曰くマタイは希

伯來語にて『ロギア』を編纂し、凡ての人は其の能力に従つて之を翻譯せりと。二世紀後半のイレナヨスの文書にも、またマタイが希伯來語にて福音書を書きしことを記せり。さればマタイの『ロギア』は早き頃に存在したるものなるべし。之も福音書編纂に當りて有力なる材料として取られしは勿論なり。然れどもマタイの『ロギア』は如何なる程度に於て馬太傳路加傳の中に入れるやは明にすべからず。現今の馬太傳はマタイの『ロギア』にはあらず、『ロギア』のみに由て編纂したるものにもあらざるなり。現行馬太傳と『ロギア』との關係如何。ツァーン Zahn は現行馬太傳は單に希伯來語『ロギア』の希臘譯のみといへど、現行馬太傳は明に初より希臘語にて書かれしものにて翻譯の跡なし。されど最もよく『ロギア』を表はせるものならんとハルナック A. Harnack は言へり。

斯くの如く福音書の史的問題は、細末點に於ては諸説區々なれども、大體に於ては殆ど一定したりと謂ふべし。同觀福音書は確に使徒同時代人の産物なり。約翰傳は紀元九十年頃のものと言ふ人多ければ、最も遅く見て百十年までには成り居しなり。而して此等の福音書に依れば、耶穌はナザレにて成長し、洗禮のヨハネより洗禮を受

け、パレスチナにて新宗教を説き、終に十字架にかけられ、殺されて三日目に甦り、終に天に昇りたりといふなり。此は四福音書ともに一致する所なり。約翰傳は其のまに耶穌の事跡の細末點を報じたるものならずとしても、其の記事は最も早き傳説によるや疑なく、従つて耶穌の活動が三年に亘りし事の如きは、他の福音書に見えずとしても、大抵信すべき事實ならん。

此等の研究の結果を見ると、尙耶穌の史的實在を疑ひ得るか。耶穌は確に存在したり。福音書の相互の多少の相異は、却つて其の録する所の源より出でずして數多の源より出でたるを示し、耶穌の事實の確なるを證するものなり。約翰傳は細末點が事實そのまゝならずとしても、同觀福音書の耶穌ありとすれば、數十年の後に此の人物を傳するに當りては、其の言ひし所、行ひし所は、まさに約翰傳に在るが如くに在りしと思はるゝに至ること當然なり。著者は久しく基督を信じ、基督の活ける精神に養はれたり。顧みて曾て在りし耶穌の言行を見て、現在の自己の精神を以て之を解釋するは信徒必然の事なり。もし事實を乾燥的に傳へたるもの残り居らば、其の出所却つて怪しむべきなり。

以上、一には紀元の初の百年百五十年に至るまでの歴史を究め、又其後の二千年の文明の本となれるものを考へて、茲に一個の人格基督の存在を確め、二には聖書文書を細かに調査研究したる所を見て、直接に人格耶穌の史上に存在したるを確め、斯くて基督の史的實在は如何にしても疑ふべからざるものなるを思ふ。

四、耶穌一代の内容

基督の史的實在確實ならば、更に進みて基督は如何に教へ、如何に行ひ、如何に意識し、如何なる品性の人なりしかを問はざるを得ず。即ち基督傳の内容を明にせざるべからず。之に付て材料とすべきは重に福音書なるが、福音書の中にて先づ論すべきは約翰傳なり。約翰傳の著作は、使徒時代か遅くも使徒次代に屬すれば、此れは確に信すべき書物なり。然れども約翰傳は十分に一定の目的を以て書かれたるものなり。即ち耶穌を神の「ロゴス」(言、顯現)なりと信じ、之を明にせんとせるものなり。著者は自ら確實深奥なる此の信仰を有せり。著者は基督を信するに由て自ら更生を経験し、神人合一を意識し居れり。此の信仰經驗を以て既に五十年乃至七八十年前の基督存世

中の事を録す、基督の一言一行も彼には皆なこの深き意味を含みて語られ行はれしと回想せられ、其の回想のまゝを記せりと覺ゆ。されば約翰傳の基督は回想の基督、即ち追懷の思想に由て、著者の理想の衣裳を纏はせたる基督にして、其の事跡の細末點は文字通りに之を取るべからざる點少からざらん。其の教訓の如きも、基督の教訓を著者の解釋したるものなるも多からん。然れども其等の衣裳の下に在る人格は同じ基督なり。同觀福音書の基督と異なるなし。されば此の基督まで洞觀するときは、約翰傳も取るべき一個の史料なり。言ひ換ふれば、約翰傳の基督は著者回想の鏡に映じたる基督なれども、鏡象は眞體の影なれば、之に由て眞體を知るべきなり。然かのみならず、約翰傳の出所頗る確なりとすれば、其中には直接に史料として取るべき節も必ず存す。初代より教會の間に知られ居りしことにて、他の福音書の傳へざる所が、此の書に留めらるゝ所あるや明なり。之を傳説とするも最も古き傳説ゆゑ信すべき理由十分なり。例へば耶穌の活動の期間は他の福音書にては知るべからず。一年のこと、見ゆるを以て或學者は耶穌の活動は一年間なりしと考ふれど、其は歴史上に起りし影響に比して餘りに短し。然るに約翰傳に由りて耶穌の活動は三年に亘れることを知る。約翰

傳成立の時に斯く傳へられ居りしとすれば、此は信すべきことに非ずや。又他の福音書にては耶穌の活動は殆どパレスチナ北部に限られ、東部南部に於てせしは僅に其の終焉に近づきてのことなり。然れども南部に於ける耶穌の敵の反對非常に強く、耶穌また一毫も之に譲らずして其の主義を貫ぬいて深く殺されし跡を見れば、南部に於ける短期活動のみにて斯くなるべしとは思はれず。否最後に南部に出づる前極北の地に既に終焉の近づけるを自覺し預言したりといふことさへあれば此は解し難きこと、なるなり。然るに約翰傳によれば、耶穌は屢々南部に出でて活動したりとあり。即ち前の謎を解くものに非ずや。されば約翰傳は早き時代に信せられ居りし事を録したるものにして、亦耶穌の事跡の正しき記録たる所少からざるものなりと思はるゝなり。同觀福音書の記事は皆な以て耶穌傳の材料とせざるべからず。所謂馬可傳假定説を取る人々は、馬可傳を以て最古の福音となし、専ら材料を之に仰ぎ、他をば殆ど顧みざる風あり。故に其の見解は全く一方に偏し了れり。馬可福音書のみを據りて基督を論せば、其はマルコのみ見たる基督を論するなり。換言すればマルコを論するなり。馬可傳は現行の福音書中たどひ最初に成りしものとしても、之のみが信すべくして他

は信すべからずとすべからず。他の福音書は他の材料にも據りしものにて、或者は馬可傳を補ふ心もありて書かれたるべければ、他をも同じく取らざるべからず。福音書は第一には著者の性格に條件せらる。己の心に從つて基督一代の事跡の輕重大小を思ひ、自らの重しとする所を記して輕しとする所を畧くことあるべし。第二には時代に條件せらる。若し迫害の激しき時ならば、之に耐ふるを教ふる未來記思想の如きものは、耶穌の教訓行動の中に就て最も力強く思ひ出だされ書き残さるべし。之に反して平和の時ならば凡てが喜樂の色に彩らるべし。第三には讀者に條件せらる。讀者が猶太人か異邦人か、順境者か逆境者か、著者は之に應じて福音書を書きたるべし。されば多くの福音書を併せ覽て、茲に均衡的に耶穌の一代を知り得べきなり。我等は同觀福音書を併せ用ひて考へざるべからざるなり。

斯く言へばとて福音書の一言一句悉く事實の傳達なりといふには非ず。福音書は一定の目的を以て書きたるものなり。著者の主觀の色に染めらるゝ所あれば、多少事實の修飾もあるべし、其他誤聞もあるべし、迷信もあるべし、或は後人の挿入もあるべし。故に正確に耶穌の一代記を今日再作せんなどは能ふべきに非ず。然れども福音書

は大體に於て調和あり統一あり。其の表面の美醜様々なる衣裳覆面の下に、史的耶穌の人格と事業と確然として存在せるを見る。史眼あり大體に通ずる鑑識あるものは決して之を見誤らざるなり。奇蹟の如き事を囃々するは思はざるの甚だしきものなり。耶穌傳が今日書かれたるものならば、之に奇蹟の記事あるは即ち其の叙述の不確實虚偽の證とすべし。されど耶穌傳は殆ど二千年前の書なり。當時は奇蹟に關する信仰は普通なり。特に救主に奇蹟あるは當然のこととせられ居たり。奇蹟の記事なかりしならば却つて其の傳怪しむべき也。且又奇蹟果して有り得べからざる事かは疑問なり。ハルナックも『本質』中によく之を論せり。現今の心靈研究などに徴すれば、奇蹟も有り得べきかと思ふ。特に古代に於ては人類は未だ應用科學を知らず、人類は必要上自らの内に有する力にて種々不思議なる事を行ひ居りしは明なり。人知進みて人工にて種々の事を行ふに至り其等の力不用となり、世に現はれざるに至りしを以て、今は不思議の事少くなりしも亦明なる事實なり。此の心を以て福音書を見るべきなり。斯くして福音書を見るとき、如何なる人格の姿が吾人の眼に映じ來るか、福音書に就き、之を大體より觀て、吾人に明なる所に由れば、耶穌は大工ヨセフと其妻マリア

の子にして、バレステナの北部ガリラヤのナザレより出で、羅馬皇帝テベリオの治世に於て、『バプテスマ』のヨハネが民に悔改を説けるとき、之に至りて『バプテスマ』を受け、幾何かの時の後、自ら出でて福音を宣べたり。其の福音はヨハネの聲と同じかりしも、其の内容に於て著しく異り、ヨハネをも時代の宗教をも超脱し、全く新しきものにして新しき力を有し居たり。彼は精神的の神の國は來れりと言ひ、神が人の心を支配し人が神に従ひ神の心を心として生くるの精神的状態を神の國と稱し、是が自己に依て現出せるを自覺し之を宣傳したり。而して此の神の國の治者たる神は愛を其の人格の中心とせるものにして天の父なりと言ひ、従つて神の國に入るには、心を罪より轉じて神に向ひ、神を仰ぎ全く之に依り頼み、専ら其の國を求め、心を盡し精神を盡し意を盡して神を愛すればよし。之がためには基督に従ひ、如何なる苦痛をも忍び、生命をも吝まざるべし。神は天の父なれば、斯の如き意志を有する者を赦して、之を子として愛し永遠の幸福を與へ給ふ。此れ神に對するの道なり。然れども神は天の父なり。神は世界の中に在り。神は人道を造り、人道の中に活動せり。故に神を拜しさへすれば、他は顧みずして可なりといふものに非ず。人を愛せざるべからず。最

小なる者の一人を愛するは即ち神を愛するなり。故に己れの如く隣を愛すべし。而して隣といふは單に親近の間のみに限らず、同人種のものに限らず、血縁のなきもの、外國の者も又其なり。是等を愛し、敵をまで愛すべしと教へたり。單に教を説きしのみならず、彼は此の新宗教を其の實行に於て現はし、其の生活は全く其の教の活現たり。茲を以て彼の宗教は彼の人格の表現に外ならざりき。耶穌は此の宗教を宣傳し實現し、之がためにバレステナ、特にガリラヤは精神上に大いなる動搖を起し、ペロイヤにも波瀾のありしこと見え、一時は多くの人々耶穌に従ひしが、耶穌は其の中より十二人を選びて使徒とし、之を福音宣傳に従はしめ、又自己の宗教を體得すべく訓練したり。然るに猶太教徒は此の運動に對して平ならず。耶穌の活動の盛なるに従つて敵對は漸く激しく、特に時代の治者階級にありし宗教家どもは之を憎むこと一方ならず。次第に耶穌に向て國民の敵對心を馴致し、終に最後の年の春、三四月の交、人の精神最も狂ひ易き候に於て、例年の國民的大祝節行はれ、猶太人國內國外より都に集合する時に當りて、無意識的に群衆心理を利用し、時の羅馬代官ピラトに迫り、何等の罪狀なき耶穌を無理無體に十字架につけ終りたり。

此れ耶穌の一生の大體なり。此れだけは如何にしても否定すべからず。既に此の大體を許せば、其の大體を充たす所の詳細點また信せざるべからざるものあり。即ち耶穌の愛神愛人の新教義は、何を材料とし、又如何に發展し適用せらるゝか。福音書の内部にある種々の教訓は一々之に當り、耶穌の教としてふさはしからぬものなく、必ず耶穌の口より出づべきものたり。然かのみならず其等の教訓が活力を有し、新宗教の内容として世界に活動するに至りしものは、耶穌の人格より直接に發せしに由らざるべからず。又耶穌傳の大體を許せば、耶穌が南船北馬常に道を傳へ、又人民の實生活に携はりて之を動かして休まず、其の身に爲し得る限りの善をなして人民を助けしことや、弟子等を愛育誘掖して、之を匹夫匹婦より聖者となせしことなどをば、如何にしても之を否定する能はざるなり。

然れども耶穌一代に解し難き點なきに非ず。即ち其の多くの奇跡なり。然れども此は前にも言へる如く、古代の文書を強て現代の心を以て解せんとするが故に難解なるものにて、其時代の文書には却て此等の記事あるは當然なり。之あるが故に文書を信じ難しとすべからず、耶穌の一代不明なりともすべからず。何となれば其時代には神よ

り遣はされたる者には必ず不思議の事件ふとせられ、其等の奇跡も確實に信せられたればなり。今日我國にても我等の知る所を以てしても、或る人物に奇跡の伴ふと傳へられ、目證者として之を證する者もあるほどなり。耶穌の弟子等は確に耶穌に於て奇跡を見たるものとすべし。其の奇跡とせし所のものの中には、或は普通自然の事を奇跡と誤解せしものもあるべく、或は他より誤聞せし者もあるべし。特に耶穌の誕生前後の事、其の幼年の事の如きは、公に世に知られしことに非ず、之を信すべき人より出でし傳説としても、極めて狭き範圍の少數の人の經驗せし所なり。或は之をストラウスの謂ふ所の意味の神話とも見るべし。されど事實奇跡なりしものありしやも知るべからず。今日何人か奇跡は有るべからずと斷言し得る者ぞ。人知進みて人間の能力案外に隠れたる所まで及ぶこと發見せられ得る今日、吾人は耶穌の如き偉大なる人格に奇跡の伴ひしといふことを全然否定するの勇氣を有する能はざるなり。然れども奇跡の如きは基督教の末のことなり。之を悉く肯定せずんば耶穌の觀念成り立たざるの理は何所にも無し。奇跡に蹟く者は蟻垤に蹟いて平原を通過するを知らざる者なり。

唯だ最も大なる謎は耶穌の死後復活の事なり。福音書は勿論、使徒行傳、パウロの

書翰、其他の文書みな之を記す。而して復活後昇天せしことも、馬太傳及び約翰傳には無けれども、他には皆な記され、其の信仰は十分確なりしこと明白なり。復活の信仰も今日の我等より見れば、基督教宗教の中心眼目に位するものに非ず、之がありしとしても無かりしとしても、基督教宗教の圓滿完成の上に何等影響する所なし。後に言ふ如く、基督は殺されたれど、其の人格は消滅せず、又深く天に閉ぢこもらず、弟子の間に在て活動し、永遠界に入りて神と偕に存在すといふが復活の信仰の精神なれば、此の信仰さへあらば其にて可なり。されば基督が實に復活せしや否やは、我等には生死の問題ならず。さればとて基督の復活は史上の事實ならざりしと否定し得るか。我等は之を否定して、多くの人の信仰の累を除きたく思ふ。然れども眞に研究の精神ある者には、此の問題は然かく造作なきものに非ず。復活の信仰は如何にしても最初の基督信徒の確信なりしなり。パウロは基督もし甦らざりしならば、我等の宣ぶる所空しく、汝等の信仰も徒然ならんと言ひ(哥林多前書十五ノ十四)其他其の書翰の到る所に復活の基督を説き、基督復活して凡て死ぬる者の復活の首となれりと言ひ、基督の復活せるに由りて、信徒は之を信じ復活せる基督と結合して救はると言へり。使徒等は基督が

「メシア」たることの大なる證明として、其の復活を高調せり。彼等は之がために猶太人には迫害せられたり。特に權力あるサドカイ黨の祭司名門よりは其の教義に反する故を以て惡まれたり。又希臘人には此の故に迷信を傳ふるものとせられたり。使徒行傳を見れば此は全篇に於て分明なり。然も彼等は之を意こせずして復活を宣傳したり。此等の確信と其の勇氣とは何所より來りしか。當時の人々は形體なき靈をば之を幽靈として非常に恐れたり。靈は必ず形體を有すと信せられたり。パウロの如き人と雖も決して此の外に出でざりしなり。故に基督の肉體復活を高調し、之なくば己が信仰は空しと言ひしなり。斯くの如き思想の時代人が、基督は復活せりと信じ、此の確信を傳へて死を辭せざりしは、吾人をして確に復活といふ事實ありしと思はしむ。當時は實に斯の如き復活ありしに非ずんば、基督の死後存在し、弟子等と偕に在りて活動し、永遠界に入りしといふ確信、弟子等の心に抱かるべからざりしなり。昇天は復活せる基督が五官の感覺の世界より引き去りたるものなるが、其の現實なりし肉體の如何にして五官の感覺の外に引き去りしかは、吾人が推測を下し、理窟を考ふるはご愚なり。吾人は之を不可決の問題として留め置くべきなり。

然り復活昇天は疑問なりと雖も、弟子等が此の經驗に由て捉へたる眞理は千古不易なり。即ち基督は殺されたれど、其の人格は儼として存在し、基督信徒と交通し、之を動かすといふことなり。使徒等は基督の復活に由て此の眞理を信じ、實際經驗に之を味ふを得たるが、吾人は基督の復活の如何に拘はらず、他の經驗よりして此の眞理を十分捕捉し、之を實際經驗に味ふことを得るなり。

耶穌基督は實に史上に存在し、新宗教の開祖たり。其の一代の物語は確に之を信ずることを得るものなり。彼は福音書に在る如き生活をなしたる實人格なりしなり。

第一 久存の基督

吾人は歴史的耶穌について聊か研究したり。耶穌は確に史上に實在し、其の人格事業は、大凡福音書及び其他の文書に傳へらるゝ如きものなりしことも考へたり。然らば直ちに此の史的耶穌に依て、基督の人格と事業とを觀、基督觀念を結びて可なるかといふに、然らず。史的耶穌は基督論の材料として重大なり。史的耶穌なくば基督觀念は出で來らざりしなり。ストラウスが『耶穌傳』序言に、基督教信仰の本質は、自己の

批評的研究の結果に由て左右せらるゝことなし。基督の超自然的誕生、其の奇蹟、其の復活及び昇天は、歴史的事實として其の實在が如何程疑はれても、依然として永遠の眞理なりと言ひ、又今の學者等が歴史の耶穌と思想の耶穌とを區別し、歴史の耶穌は不明なり、されど思想の耶穌は眞理なり、歴史の耶穌は實在せずとも、思想の耶穌あるを以て増減する所なしと言へるは、一面に於ては眞理たるを失はずと雖も、然も史的耶穌の事實なくしては、思想の耶穌、言ひ換ふれば耶穌の思想は決して此の世界に起ることあらざりしなり。神子肉生の思想も、復活の信仰も、三位一體の教義も、皆な史的耶穌の事實ありて、此の事實の解釋もしくは此の事實よりの推論として此の世界に入りしものなり。

然れども史的耶穌の研究は困難にして、また史的耶穌の事實は決して基督教の凡てに非ず。先づ研究の困難なることを言へば、見よ時代すでに遼遠なり。たとひ基督の事跡を寸分違はず有のまゝに傳へたる詳細の傳記ありとせよ、吾人は尙耶穌を有のまゝに知り難し。著者と吾人とは二千年の間隙を挟みたる別世界に在り。其の言ふ所果して吾人の思ふ如き意義を以て言はるゝや疑はざるべからず。確に兩者の思想の間

には互に了解すべからざるものあらん。僅に五十年三十年を隔て、も、先輩と後進、前代と現代とは互に理解する能はざるに非ずや。然かのみならず、基督自身と傳記者と果して意氣全く調和密着せりやもまた疑はし。凡て人の傳に於ては其の人を有のままに現はすこと難し。著者自らの品性思想目的に由て、其の偉人の面目彩らるゝを免れざれば也。特に基督の如き、千古不磨、萬世無二の人格を傳するには、著者の筆到底之を其の有るが如くに描き得べくもあらざればなり。基督傳の文籍完備せりと想像してさへ然り。然るに基督傳の文籍は至て不完全なり。余は前に耶穌實在の歴史的證明を挙げたり。他の人物の史的實在の證明を擧ぐるも、之より確なるものは稀なるべしと雖も、然も此の證明とても否定の餘地なしといふものには非ず。若しタキトスやカッシウスやの中の記事を後人の挿入偽作とし、ブリニオスの文書の確實等を疑はば、其は自由に疑ひ得べし。何となれば此の種の疑は全く無制限なれば、疑はんとすれば心のまゝなればなり。ナポレオンの史的實在とても疑ひ得る餘地あればなり。文學的證明に至ても亦疑ふの餘地あり。聖書文書の外證といふも、若し否定の態度を以て臨まば、決して之を有力なる證明とすべからず。確實に其の證明として有力なるも

の無きに非ずと雖も、其は果して幾何ぞ。聖書文書の内證といふも、又疑はば疑ひ得べし。或は最も巧みにして用意周到なる偽作とするとも得ん。或は矛盾や不理を指摘して、信すべからざる文書とするとも得ん。斯くて基督の實在と聖書文書に對して否定の態度を取ることを得べし。更に進みて耶穌は史的に實在したり、聖書の出所は正しとしても、耶穌傳には實と莖とあるべし。之を別ちて實を取らざるべからず。然るに何所までが實にして、何所よりが莖なるか、此れ又容易に定め得べき所に非ず。否到底定め得べからざる事なり。尙一段進みて基督一代の物語の各條は、何れが先にして何れが後なるか。其の相似て而して條件の幾分異なるものは一事が異りて傳へられたるものか、將た事實異りて起りしものか、此も不明なり。尙進みて基督の意識の問題とならば如何。基督は『メシア』即ち救主と自覺せしや否や、救主ならば此世に王國を建てんとせし救主と思ひしか、未來の世の終に現はるゝ救主なりと思ひしか。此れまた吾人の斷定を以て確に其の何れと定むべからず。或は又同じ自覺の問題にして、基督の内部には發展ありしか、又た初より終りまで同一なりしか。此れまた定むべからざる問題なり。又他の方面の問題に移りて、基督の品性は如何。彼は完全なる人格な

りしか。罪なかりしや否や。此れまた定め難き問題なり。此等の問題については、聖書の文字すでに不明にして何れにも決すべからず。時として一方に指し、時として他方に指せばなり。よし又聖書の文字が何れとあるも、果して終局まで然るや否や、必ずしも之を絶対的の據り所ともすべからず。斯くの如く考へ來らば史的耶穌は輪廓の極めて朦朧たるものとなるべし。否史的耶穌は決して然かく朦朧たらずと雖も、然も近代の懷疑的史學派の傾ける如く、絲筋ほどの罅隙に楔を入れて打ち破らば、斯くの如く破れ了らぬにもあらぬなり。

されば史的耶穌の真相を披くは之を困難といふべきなるが、然かのみならず、史的耶穌は基督教の凡てに非ず。アルベルト・シュワイツェル Albert Schweitzer は其のライマールスよりウレーデまでの史的耶穌の研究を評論したる結論に於て論じて曰く、耶穌傳の研究は奇異なる歴史を有せり。此の研究は史的耶穌の問題を以て始まり、是れが耶穌を見出だしたる時には、之を教師及び救主として一直線に現代に拉し來り得たりと信じたり。此の研究は幾世紀間、耶穌を教會の教義の岩の上に釘付けしたる束縛より放ち、生命と運動とが再び體に入り來り、史的の耶穌之に合はんとて進むを見

て喜びたり。然れども斯くして現はれたる耶穌は其のまゝ其所に停まらざりき。彼は現代を通過し去て、彼自身の時代に歸りたり。過去四十年の神學は、牽強なる解釋、及び勝手なる解釋の限りを盡くせしに拘はらず、彼を現代に引き留むる能はず、却て之を行き去らしめたるを見て、大いに驚愕し且つ憂苦せり。彼は自らの時代に歸りたり。其は何等歴史的機巧の適用に由るに非ず、振子の手を放すとき其がもとの地位に復すると同じ必然の理に由りてなり。唯理派や自由派や近代神學の築き上げたる基督教の史的基礎はもはや存在せざるなり。されど斯く言へばとて基督教が其の史的基礎を失ひたりといふには非ず。史的神學が自ら勉めざるべからざる務と思ひし所、又斯くなして殆ど其の成らんとするに當りて瓦解せし所のものは、實は眞の不易なる史的基礎の煉瓦外圍にすぎず。此は何等史的確認又は是認と別物なり。耶穌が現代の社會に對して意味を有する點は、彼より一の宏大なる靈的勢力流れ出で、現代をも貫流せることなり。此の事實は史的の發見如何に由て動かされもせず、確認もせられず。此れ基督教の堅固なる基礎なり。耶穌が我等の如き人として現代に入らば、現代に多くの意味ある者とならんと思ふは誤なり。此れ不可能なり。何となれば一には斯かる耶

三二二

蘇は存在せざりき。第二には史的知識は現存の靈的生活を分明にすること大なりと雖も、靈的生活を創造し得ざればなり。歴史は現在を破毀し、現在を過去と調和し、又或程度までは現在を過去に變態し得れども、現在を造るには何等の貢獻をなすことを許されざるなり。耶穌傳の研究の價値は過大視せらるべからず。現代神學者は餘りに史的研究法を誇り、餘りに自己の史的耶穌に付て誇り、餘りに史學の世に齎らす靈的寶賜を信じ過ぎたり。史的知識を増加して、之に由て新らしく活力盛なる基督教を築き上げ、新らしき靈的知識を開放せんといふ思想は、一の定説の如く思はるれども、熟視すれば我等が打ちかゝれる此の事業、幾分成し遂げたる此の事業は、單に大なる宗教的課業の一の知力的豫備にすぎず。我等はパウロと同じ事を経験しつゝあり。我等は前人よりも一層史的基督に接近し、我等の手を伸ばして彼を現代の中に引き入れんとせる間に當りて、我等は此の試みを抛ち、我等の失敗を承認し、『我等肉に従つて基督を知りしかども、今より後彼を知るまじ』と言ふの已むなきに至れり。更に進みて耶穌の人格と生活の史的知識は、宗教に取りては助とならず、却つて躓となるを見出ださざるを得ざらんとす。さはいへ眞を言へば、現代に意義あり、現代の助とな

三二三

る所のものは、史的に知られざる耶穌に非ず、靈的に人々の間に甦りたる耶穌なり。世界を征服する者は、史的耶穌に非ず、耶穌より發出し、人々の靈の中にて新感化を與へ、新支配を得んとて歴しかゝる所の精神なり。(A. Schweitzer, Von Reinhardt zu Wrede) 此れシュワイツェルの言ふ所の大意なるが、シュワイツェルは史的耶穌の事實は、殆ど之を正確に考定し難しといふ持論の人なれば、其の言や極端に陥れども、兎も角も史的耶穌のこのみを基礎として、基督教を論ずべからず、又基督をさへ論ずべからず、耶穌より發したる無限大の精神をも見て、之に由て基督を知り基督教を知らざるべからざるは明なり。單に史的の耶穌のみを以て基督教の基督とせば、一には其の人格生活の確に今の人を知る如く知り難きに由り、二には知らるゝ對象の餘りに有限的なるに由り、終に基督教を解すべからず、或は不信仰に陥り果つべく、若し耶穌の史的事實が否定せられもせば、基督教は茲に全く其の基礎を失ひたることなるべし。斯く史的耶穌の事實が其の確實の程度と廣袤とを定かにせざるより見ても、之を唯一の基督觀念材料とすべからず、又耶穌を知るには唯だ其の歴史的一幕に在りし耶穌を知るに止むべからず。耶穌の面目は其の以外に知らるべきものあり。従つて基督を

論するには史的耶穌以外にも材料を求めざるべからず。何をか史的耶穌以外の耶穌といふ。曰く久存の基督これ也。

久存の基督とは、歴史上二年三年存在せし耶穌ならず、其より後現はれて人類の内に活動し、個人に經驗せらるゝ耶穌基督を云ふ。耶穌は史的の人なれども、其の人格は歴史の舞臺上のみにては種子たり蓄たりしのみ、種子は種子の用をなしたり。蓄は蓄の用をなしたり。然れども種子は萌芽せざれば其の面目を現はさず。蓄は開かざれば其の美を盡くさず。花は開きたるものに由て評價すべし。耶穌は歴史の舞臺より退きて後其の人格の内容は他の靈魂に入りて茲に反應を起したり。耶穌の人格の内容を受けしものは、之によりて改まり、其の内容を敷衍し適用して、盛に基督の人格を人類の生活の端々にまで實現し行きたり。されば此の變化せる生活の廣く且つ多種なる端々は基督の人格の敷衍にして、之を還元すれば其所に基督の人格を見ることとなる。言ひ換ふれば此の變化せる人間生活は耶穌の人格を反映せるものなり。之を以て耶穌を見、之に由て耶穌を觀念せざるべからず。然かのみならず次に基督信徒の經驗に生くる耶穌あり。此の耶穌は決して突如として一信者の胸中に湧き出でし物に非ず。信

者が自ら創造せし自己の思想の影に非ず。彼が想像する前より在りて、彼に變化を起さしめ、思想を起さしめたる者にして、即ち史的の耶穌より綿々として寸分の斷絶なく繼續せる一大精神なり。基督信徒は曾て世に存在して其儘少しも滅せしとなき人格耶穌が、自己と共に在り、自己の内部に活動し、自己を救へることを經驗す。此の經驗が個人の宗教の最重大要素をなし、又世界の歴史を造れり。此の耶穌の人格をも知り、之を觀て基督を論せざるべからず。此の二面の耶穌の人格、之を久存の基督といふ。之を久遠の基督といふは最も言語の慣用に合ふことなるべし。然れども久遠といふは佛者の語なり。佛教語と雖も用ひて差支なく、又吾人は甚だ多く用ひつゝありと雖も、余は斯くの如き佛教語を用ふることは、何となく基督教を舊き草囊に盛るが如き心地して、基督教の生氣發洩たる精神を包むにふさはしからぬを思ふと共に、近頃久遠といふ語をば永遠若くは永恒といふ語と同一意義となし居る人少からざるを見るものから、故ら茲に久存の耶穌とせしなり。

されば久存の耶穌は所謂永遠の基督とは義を異にせり。永遠の基督とは、無限の前より存在し、無限の後まで存在する基督の意なれば、基督が其の世に生るゝ前神と

共に存在せしことを含むが故に、之を信ずるは思辯に由て歸着したる信仰となれども、久存の基督は然らず。世に生れし前のことは其の間ふ所に非ず、曾て世に在りて活動し、後に世を去りしかども尙消滅せず、人類の中に在て活動せる耶穌の人格を指すものなり。從來基督教の神學者は、史的の耶穌と永遠の基督とのみを考へしが、余は永遠の基督のことは別問題として、我等は史的の耶穌と久存の耶穌とを考へざるべからずと思ふ。久存の耶穌は永遠の基督の如く、思辯の結果の存在に非ずして、事實に存在する耶穌なれば、此は如何にしても知らざるべからず、之を觀て其の人格事業の全體を論せざるべからざるなり。

久存の耶穌は史的耶穌の繼續なり發展なり顯彰なり、久存の耶穌は史的耶穌よりは廣袤を擴げ居れりと雖も、然も史的耶穌の同一人格なり。深山に於て旅人が無限に巨大なる怪物の如く現はるゝ自己の影に驚くが如く、空中に假現せる人格の影に非ず、耶穌の人格の蓄の開きたるもの、種子の萌えたるもの、即ち實なるものなり。故に假令巧妙に耶穌の人格について書き、たとひ偉大に耶穌の精神として現はすとも、其が全く史的耶穌と連絡なく、史的の耶穌より發源せず、生命の系統續き居らずば、之を

久存の耶穌の内容とすべからず。従つて之を取りて耶穌の人格事業を論ずべからず。よじ又史的耶穌より一縷の生命の流を引き居るとしても、其が全く傍路に迷ひ行き、あらゆる方に敷衍せられ、史的耶穌に照して縁の甚だ遠きものなるを表はすときは、之を耶穌の人格の正系の發展顯彰とすること能はざるが故に、耶穌を知り耶穌を觀念する材料としては頗る價少しとせざるべからず。此等は凡て史的基督に照し、其の遠近本末を見て、其の價值を判すべきものに屬す。

其一、世界に發現せる耶穌

耶穌の人格は人類を感化せり。感化とは其人の人格の内容が他の人の人格に入りて其の内容となることなり。されば感化せられたるもの的人格と、彼等が其後なす所の從來と異なる思想行動とは、即ち感化せし人の人格の寫本、又其の思想行動にして、是がいよゝゝ發展分化して、種々の性質に應じ、種々の事情に應じ、時代に應じ、種々なる人格となり、思想行動となり行かば、是また最初感化を與へし人格の開展として視、之を還元して先の人格を知ること、鏡の影を質して影の主を知るよりも、更にゝ

密にして實なるや論なきなり。何となれば鏡の影は單に光の反射なれども、以上の如くして知る人格は、もと其の實なる内容を他に與へしものなればなり。耶穌を見るは實に斯くの如くせざるべからず。ハルナックは基督教の本質を究むるに當りて、之が材料として取るべきものは何なるかといへば、其答は單にして而して凡てを盡くせり。曰く耶穌基督と其福音なり。されど此れ固より我等の研究の出發點にして、又重に研究すべき材料たりといへ、之と共に我等は單に耶穌基督の像と、其の福音の概觀とを示して以て満足すべからざるも亦明なり。決して茲に止まるべきに非ず、何となれば凡ての偉大有力なる人格は、之より感化せらるゝ人々が目にて見つゝある間には、唯だ其の一部分を現彰するに過ぎず、否其の人の有する人格が有力なれば有力なるほど、又其人が他人の内的生活に入れば入るほど、其人の眞面目は、其人自身の言ひ又行へる所のみによては知らるゝこと少しとなすなり。我等は彼が下に從ひし者共の上に彼が生じたる反映及び結果を見ざるべからず。此故に我等は耶穌基督と其の福音とを見ると共に、初代の弟子等に就き、其の生活の上に耶穌の與へたる影響に付て、彼等が語る所を見るを要す。否又之に盡きず、基督教は唯だ或る特殊の一時代に活けるのみな

らざる大活力の一標本たり。大いなる勢力は此の内に在り又之に依りて一度ならず許多たび發動せしからには、我等はまた其の精神の後代の所産をも觀ざるべからずと言へり。(Harnack, *Wesen des Christenthums*)。確に史的耶穌を明にしたればとて、是が基督の人格の真相を語り盡くすものとすべきに非ず。史傳既に不完全なり。時代すでに遠し。然かのみならず耶穌が人に知られしことは眞に微なり。よしや親近の弟子が其の師の生活進退を綿密に注意し、一舉一動の細節をまで洩らさず傳へたりとしても、其にて耶穌の人格を知り盡くすべからず。何となれば元來凡ての人格には自己さへ意識せぬ所あり。此の方が却つて廣く深しといふ心理學者の説は確に眞なるべし。されば他人之に付て知る所のものは、其の人格の實に一部にして、唯だ其の皮相その表面のみ。更に又考ふれば耶穌の弟子等は其の心未だ十分發達せず、其の師の人格に付て理解すること困難なりしも明なり。基督と弟子等との間には、精神の調子に於て確に幾段の懸隔あり。未だ其鳴を起すまで進み居ざりしなり。更に一步進みて考ふれば、基督の公生涯は一年乃至三年にすぎず。此の間基督いかに目の廻るほど活動することも、其の人格の凡ての方面が隅々まで開披活現せんこと有り得べくもあらず。早世の英才さ

へ十分己れを發揮せざりしとて惜まるゝなれば、耶穌に於ては二年三年の活動は唯だ序幕か閃光に譬ふべきのみ。されば史上の耶穌は基督の人格の唯だ一端を示せるのみ。基督の人格の大部分は歴史の裏にあり。宛かも密雲の間に大いなる龍の角のみを現はしたるが如く、又大洋の中に大なる岩の頭のみを潮干に現はして、忽ち水面下に没したるが如し。吾人は基督を見るには、單に其史面に現はれたる所のみを見ず、此を實在の一端として、其所より辿りて奥深く入り行き、裏面に無限の根柢を張れる人格を見、又船の龍骨に觸れ、或は魚の群集せるに由て、巨岩の確に潜在せるを知るが如く、史上の多くの結果に由て、其根柢に在る基督の人格を知り、之を明にせざるべからず。茲に於て吾人は基督觀念の第二の材料として、世界に現はれたる基督の人格を取れるなり。耶穌の人格は實に世界に働き出だせり。約翰傳の「ロゴス」(言)は、出でて活動して世界を造り、世界に入り、人の良心智慧ともなれりとあるが、此は世界の初と基督との關係を説明する思辯として當れると否とは兎に角、基督以後の事實を説明するには、眞實に合へる教義なり。基督の人格は「ロゴス」として出でて自らの世界を造り、世界の中に入り、人の靈の中にも入りて、此に自己を再現し、神を實現せり。さ

れば基督の人格より分化發展せる其等の世界の現象を綜合し、又基督の人格を反映せる諸の人格を還元するときは、其の綜合の結着點、其の還元の燒點には、鮮に耶穌基督の人格現はれ來るを見るなり。此の人格は史的の耶穌と同一人格に相異なしと雖も、然も史的の耶穌よりは範圍大いなり。水面下まで見られたる岩なり、雲の彼方まで見えたる龍なり。何となれば史面に現はれたる、耶穌の人格の更に發展したる所より集結したる人格なればなり。

何をか耶穌の人格の分化發展したる現象とはなす。狭くしては基督に由て救はれたる人格なり。廣くしては教會の歴史なり。更に廣くしては基督教文明の世界全體なり。之より基督的のもの、即ち基督に發端し、聖書に發端し、代々の聖徒教會に發端せる所の要素を集めて還元せんか、大基督の人格は千古の芙蓉峰の姿が玲瓏として蒼空を摩するが如く、茲に千載の岩として永遠界に聳ゆるを見るべし。

基督は第一に其の弟子の精神に與へたる彼の印象影響より還元して知らるべし。先づ彼に直接したる弟子等を見よ。ペテロの如き、ヨハネの如き人格の反映せる基督は如何なる人格なるか。此等の弟子も吾人の直接に知ること能はざる人格なり。されど聖

書に記さるる人格として之を見るも可なり。何となれば聖書の中に傳ふる其等の最初の弟子の人格は、有のまゝに傳へられたる者なるべけれど、よし有のまゝならずとも非常に早き傳説によるものたるは明に、又最小限度としても基督と時代尙遠からざる聖書記者其人の人格の影たるは事實なればなり。斯く見たる最初の弟子は如何なる印象を其の人格に有するか。又パウロの如き人格は如何なる耶穌の影を映せるか。乞ふ基督に付ての彼等の見解思想如何を問ふこと勿れ。此れ後の問題なり。茲にては唯だ彼等初代信徒の精神に與へたる耶穌の印象のみを見よ。即ち彼等の思想行爲となれる品性を見よ。彼等は確に生來のまゝにしては彼等たる能はざりき。彼等を新に造りしものは實に基督なりき。此は彼等の十分自覺したる所なり。パウロ曰く、もはや我れ生けるに非ず、基督我に在て生けるなりと。パウロの文書や、ヨハネの文書や、其他の文書に由て直接に著者の人格を見、又福音書、使徒行傳、書翰の或部分に於て間接に最初の弟子等の人格を見れば、此には如何にしても彼等を新に造りし工人としての人格なかるべからざるを見ると共に、彼等の精神に印象を留め居れる手の跡指の跡を見ては、此の靈的大工師の人格の崇高聖大なるを認めずんば在る能はざるなり。

基督の人格に印象せられたるもの、否基督の人格に由て透化せられたる者は、固より初代の弟子に限らず。耶穌より靈的の一大河流れ出でて、此の見えざる靈界を貫流せり。ペテロを化し、ヨハネを化し、パウロを化したる生命の流は、大いなる最強壓力の電流の如く、恐るべき勢を以て荷も之に接し之を受くる靈の上に落ち來り、馬觸るれば馬を倒し、人觸るれば人を倒すといふが如き状態を以て、其等の靈を透徹し、之を根本より顛覆して、直ちに其の中に充溢し、茲に何千萬燭光よりも明らけき聖徳の光を輝かし、愛の熱を燃し來れり。代々の基督教徒の靈を窺ひ見よ、其の高き城の中の深き井戸の底なる静けき水の面の如き心奥に映せる清き顔は、實に耶穌基督の其なり。彼等の高く清き行爲を一つ一つ究め見よ、其の中には一々耶穌基督の心包まれあり。其等の行爲を剖きて此基督の心を取り出だすは最も容易のとなり。若し又彼等の品性を骨により筋によりて分解し行かば、勿論彼等自らの分子も存すとは雖も、耶穌基督の主義原理によりて組み立てられ、其の養分によりて成り立てるを發見することまた容易なり。基督の人格は此等の品性行爲の燒點なり。今日の社會は頗る調子低しと雖も、また其の中に基督の人格の分化發展せる人格あり。吾人は萬朶の花に由りて本木の生

命の性質を知るが如く、是等の人格の花によりて、其の生命たる基督を知るなり。

第二には基督教會によりて基督の人格を知るなり。教會は基督の精神を經緯として成り立てる社會なり。基督の生命を湛へて流るゝ大河なり。個人は如何に偉大完全なるとも、基督の人格を圓滿に再現する能はず。若し個人より個人に傳はるのみならば、基督の人格は極めて偏して發展し、小さきものとなりて極まるべし。教會は多くの個人の集合して、而して一の生ける有機的系體を成せる基督教社會にして、茲にて基督の人格は圓滿に發現せるなり。教會の理想とする所實に此に在り。教會は個人信徒が相集まり、相補ひ、相償ひ、相加へ、相削りて此に一團の全體的生命を成し、茲に基督の人格を現はさんことを理想とせるものなり。故に斯く理想して成りたる教會には基督宿り、基督活動し、之に接する時その人格を見るを得しむ。最も外形的なる教會の制度組織の中にも幾分基督の人格を見るを得ん。牧師や役員の職責や精神や、之に對する會員の態度等の如きも、基督の精神に依りて立てられたるや明なり。儀式の中にも神を敬ひ畏るゝ心は十分に現はれ居れり。教義に至ては基督の精神より出でたる宗教の發表なり。內的のことに入りて、教會員が兄弟姉妹として相愛し、緩急相助け、

苦樂共に味ふに至ては、此れ全く基督の人格の活動にして、基督の精神の火は尙茲にて燃えつゝあるなり。更に又教會が其の闊外に向つて活動し、世界の暗黒に迷へる靈魂を引き來つて其の内に入れ、之を一の生命の中に繋ぐことも、亦大なる基督の人格の活動に因れり。外國傳道の如きは、此の精神の花にして、基督は茲に生きて動けるを見る。又教會は古より今に至るまで連續せる一個の生命として、此の中に常に神を充たし來れり。神を愛する心は此の中に燃え、神の愛も此の中にて動けり。此の靈的生命の流れは發して不斷の基督教を成せると共に、時として大いに激して宗教の大振興となり、道德の大高昇となり、凡ての不信を壓倒し、凡ての惡を掃蕩し、世界の生命を新にし來れり。教會の此の宗教道德の生命は、實に耶穌基督の人格の經緯發展に外ならず。されば茲に耶穌基督の人格を見、其の内性を知ることを得るなり。教會には固より缺點あり罪惡ありき。教會は基督の名に於て由來多くの惡をなしぬ。彼等は正義を壓へ、人道を蹂躪し、人を殺したり。彼等は互に争ひ、權力を貪り、私利を計りたり。今の教會尙盛に不義を逞うし、心ある者をして浩嘆大息せしめ、無形的に屠らるゝ義人の血は今尙地より叫びつゝあり。然れども此れ決して教會の眞發展に非ず。

唯だ其の中に混入せる非基督的要素の誤つて時を得る故のみ。是等を還元したりとて聖書に在る基督と同一人格なる基督には歸着せず。されど教會正式の發展を源に溯れば、茲に耶穌基督の人格に歸り行くべく、又教會現在の活動を究むれば、茲に基督の活きて現はれ居れるを見る。

第三には廣く世界の光明なる側面に據りて、基督の人格を知るなり。世界は眞に不完全なり。之を譬ふれば暗黒なる大洋の如し。然るに耶穌基督より温かき一條の生命の潮流出でて、傘の如く俄に展開し、世界の半面を光輝燦々たらしめ、多くの靈を引き入れ多くの事物を引き入れ、滔々たる勢をなして之を天まで齎らし行きつゝあり。基督の前と基督の後とは、如何にも世界の面目一新せり。基督は世界の全面にパテスマを施したり。猶太教の猶太世界と、古典的希臘世界と、古代羅馬とを見て、更に基督教の希臘羅馬の世界を見れば、基督教世界の精神化は尙甚だ不完全にして、滓屑汚穢到る所に附着せりと雖も、然も其にても彼は夜の如く是は晝の如し。彼は精神死止し是は活躍せり。爾後二十世紀の文明は、實に多くの缺點を包みつゝ然も常に美はしき靈的勢力に由て導かれ、其の調子低落し來るときは、復た此の靈的勢力に由

て噴き上げられ、所謂靈戰をなしつゝ進み來れり。此の進歩の中、戦争の中には、實に耶穌基督の人格の盛に立ち働きて、流汗淋漓たるを見るなり。二千年の歴史を負ふて現はれ居れる今日の社會に於ても、其の光明なる所を掘れば、何所にも耶穌基督の人格の潜み居て、直ちに泉の如く湧き出づるを見る。前にも言へる如く、乞ふ多くの慈善事業に就て考へ見よ、平和の努力について考へ見よ、人類博愛の事業に就て考へ見よ、或は圓滿なる家庭について考へ見よ、或は美はしき政治について考へ見よ、或は意味深く思想高き教育に就て考へ見よ、清き文學について考へ見よ、美術について考へ見よ、此等の凡てのもの、下には、何處にも唯だ一つの同じ精神横たはり、人格存在せるを見るならずや。此れ言ふまでもなく耶穌基督なり。たとひ如何に基督教を厭ふ人と雖も、之を基督以外の人格に歸する能はざるべく、基督以外の何物にも歸する能はざるべし。耶穌基督を取り去らば此等の現象は全く基礎を失ひて空中の蜃氣樓となる。是等を綜合し、是等を還元すれば、茲に耶穌基督を見るのみならず、又彼の人格の内容に付て知り得る所少からざるなり。

以上の如く、吾人は基督に直接せし弟子、若くは最も近かりし弟子に及ぼせる基督

の印象影響に據り、又基督より出で之に依りて生じ之に依りて造られたる教會に據り、又全世界に與へたる感化活動に據り、之が源たり、之が動力たり、之が原型たり、又現に之を作成しつゝある耶穌基督を知り、其の人格の内容を知ることを得るなり。基督教文明は靈なる基督が創作しつゝある藝術なり、基督の靈は其の心に文明の理想の姿を描きつゝ、苦心慘憺として此の藝術を進捗させつゝあり。故に吾人は史的耶穌を明にし之に據ると共に、また此の世界に現はれたる基督を考へ、之に據りて基督觀念を立てざるべからず。

其二、實際經驗の基督

史的耶穌と世界に現はれたる耶穌とは、共に吾人が客觀的に見たる耶穌なり。耶穌の人格は確に客觀的事實なり。彼は決して架空の憶想の畫に非ず、眞の人なり、力なり。然れども苟も人格なるものは、他人に對して單に客觀の實在として止まるものに非ざるなり。必ず他人と交渉を始め、其の主觀に入り行くものなり。即ち一人格の力は發して、他人の精神を動かし、知らずくの間之に之を感化し、終に感化せられたる

もの、意識となり、此に自己に歸るものなり。感化せられたるものが意識して感化せしもの、人格を思ふとき、此の人格は必ずしも之を思ふもの、創造とすべからず。確に其だけの實在たるは疑ふべからず。耶穌基督の事は即ち此の大いなるものなり。史的の基督はパウロの言ふ如く肉によりて弟子等に知られしが、然も弟子等は斯くして基督を知りしに止まらず、基督が肉の世界より引き去りたる後も、依然として彼等の靈に残る基督あり、即ち彼等が靈によりて知る基督あり、拭はんとして拭ふべからず。此の基督は徐々に其の局面を展開し、徐々に自己の靈の内部の方に其の歩を進め、終に自己靈魂の最奥に入りたり、基督信徒は『もはや我れ生けるに非ず基督我に在て生けるなり』と叫ぶに至れり。此の基督は史的耶穌より異なる別人格には非ず。されど史的耶穌の更に發展したるものなり。史的耶穌に於て尙充分なる基督の人格の展開を見る能はざりし基督信徒は、此の内部の基督に於て之を見るを得たるなり。耶穌の在世の間は、勿論自己を充分顯現せざると共に、弟子等また其の顯現せる所をさへ理解する能はざりしが、耶穌が此の内部の基督となりて、其の面目は次第に鮮かに披瀝せられ、弟子等の心の鏡また次第に明になりて、之を映すに堪ふるに至れり。此れ即ち實

際經驗の基督なり。

此の實際經驗の基督は基督教に於て重大の地位を占む。又占めざるべからず。基督觀念に於て特に然り。初代の弟子等の拜したる基督は史的耶穌よりは寧ろ其の經驗せる基督なり。同觀福音書の傳ふる基督すでに純然たる史的の耶穌に非ず。況や約翰傳の基督をや。パウロ書翰の基督をや。彼等は經驗の基督あるが故に、史的耶穌をば却つてさほど重大視せず(此はシュワイツェルも言へり)、耶穌の事跡の細末點に付ては、其の實否を正確に定めざるべからずとも思はず、時としては經驗の基督に合はさんとして、史的耶穌の事跡の細末の傳説を修飾したる所もあるが如し。基督教の基礎たるものは、勿論史的耶穌なれども、又基督教はこの經驗の基督の上より建設せられたる所少からざるは事實なり。史的耶穌と經驗の基督が別人格ならぬ故、かくても基督教の基礎は安固にして動かすべからざるのみ。斯く基督教が經驗の基督を基礎とせる所多きのみならず、基督教は此の經驗の基督を拜し、史的耶穌の行に倣ひ言に聽くと共に、此の經驗の基督、即ち信徒の靈魂に内在する所の基督の精神に導かれ、其の命令に動かされて、基督教生活をなし、基督教歴史を進め來り進めつゝあり。經驗の基督は基督教

に於て重大の地位を占む。

されば基督を解するには、外部に現はれたる其の事跡と影響とを材料とすべきと共に、また内部に經驗せられたる此の基督を材料とせざるべからず。史的の基督のみを見るときは基督は客觀に在り、基督の人格は吾人の模範たるに止まり、其の教訓は死着せる條目たるに留まるなり。多くの宗教道德は開祖に於て唯だ客觀的の人格を見、其の教訓に於て唯だ客觀的の條目を見たる故に甚だ力なきなり。斯くの如きものは一時代乃至數時代を動かすべし、されど時代は移り、事情は變遷す。故に曾て一定の時代の一定の事情の中に存在したる人格、又其の中に與へられたる教訓は、漸くにして適用し難きに至り、終に全く不隨に歸す。如何に保守的努力を逞うしても、此は終に如何ともすべからず、又強て之を不易ならしめんとすれば、移り行く世界の進行を押し止めざるべからず、斯くて無理なる手段を用ひて歴史上の大悲劇を演出するなり。史的耶穌も唯だ歴史上に在りしのみならば、直ちに古人となり、其の教訓も直ちに古教となるべし。然るに耶穌は歴史に固着せず、各人の經驗に入り、各人の中に生きて存せり。故に何れの所、何れの時代にも、常に現在の人格として活動す。事情異れば其

の異なる事情の下に自己を發揮して少しも一所に凝滞せざるなり。約翰傳の中に基督の言として傳ふる者に、我尙汝等に多く語るべきとあれども、今汝等曉るを得ず、然れど彼れ即ち真理の靈の來らん時、汝等を導きて凡ての真理を知らしむべし、といふがあり。此の真理の靈といふは、一名聖靈にして聖書の中にては、神の靈といはれ、又基督の靈とも同一視せらる。基督教に於ては、基督存世中弟子等が一時に有らん限りの真理を示され、之を會得したりとは信せざるなり。又或る教訓が固定せる信條として設立せられざるなり。真理の開示は徐々にして漸進的なり。神の靈、基督の靈、又聖靈は、先づ個人の舊き精神の統一を打ち破りて之を新たにし、新たにしたる者が初に受け得べき限りの真理を示し、更に復た其の統一を打ち破りて心を廣大にし、廣大になりたる心の受け得べきだけの真理を示し、漸次斯の如くして靈界の奧義、神人の關係を示し進むなり。故に基督の人格も、其の教訓も、史的耶穌のみにては十分ならず、經驗の基督に於て十分に吾人に理會せられ體得せらるゝなり。然かのみならず、馬太傳などにも人汝等をわたさば如何に何を言はんと思ひ煩ふ勿れ、其の時言ふべき事は汝等に賜はるべし、是れ汝等自ら言ふに非ず、汝等の父の靈汝等の衷に在り

て言ふなりと云ふ基督の言あり。之を推し擴げて考へらるゝ如く、基督教は固定せる箇條の宗教に非ず、基督は其の存世中に、一々世の中の事情を擧げ、未來に起るべき事件を擧げ、此の時には斯くすべし、かの時には斯くすべしと教へ置かざりしなり。基督教は聖靈の宗教なり。信徒は其の内部に聖靈を與へられ居れるが故に、凡ての事件の起る毎に聖靈に依て之に處し、凡ての異なる事情の中に、聖靈を以て之に當るが故に、生活毫も凝滞せず、宗教常に活潑なり。故に基督の精神は時代の進むに従ひ、其の事情に洗はれて、愈よ其の内含せる力を發揮し、其の包藏せる内容を現露し來りて、其の面目明なるに至る。此の經驗の基督なくしては、基督は終に知らるべからざるべし。且つ又經驗の基督は基督觀念の確實なる材料なり。夫れ宗教は内部の事實なり。世の中には外部に大いなる善果を結びつゝ、而も内質の何なるや明ならざるものあるべし。然るときは其の大いなる善果は果して其の物の結果なるや疑はれざるを得ず。善果を結ぶべき素質あること明にして、其の善果は之と關係せることを信すべきのみ。基督教は唯だ其の結果影響が至大なるのみには非ず、根底に人格あり。基督教の個人の宗教は外に向つて種々なる言行となれるのみならず、精神の奥底に更生あり、基督の人

格こゝに宿れり。此の経験の事實は凡百の結果よりも確實にして、基督教を論じ基督を思ふときには、之を観ることを忘るべからず。世には又論理は眞に美はしく、其の思想の樓閣實に壯麗なるものあり。然れども之を煎じつむれば根底に何等の事實もなく、唯だ屋氣樓の巍峩たるを見る如きものあり。暗の夜に鳴かぬ鳥の聲きけば、生れぬ先の親ぞ戀しきといふ歌は、開悟を教ふる目的のものなれど、之を適用して考へらるゝ如く、巧に言語理論を操縦し、暗の夜や烏や親など現はれ來れど、深く考へ見れば何もものなく、唯だ無きものが有るか如く現はれ居れるのみなるが、宗教や哲學にも斯かる種類のもの少しとせず。唯だ論理のみ徒らに複雑高妙にして、深く究め見れば根底に何もものなし。人生には没交渉にして、有るも無きも別つ所なし。然るに基督教は個人の経験に入れり。事實に於て個人を動かし、之を更生せり。之を促がして甚大なる大發展大活動をなさしめ居れり。而して此の感化、更生、發展、活動の中には、常に耶穌基督の手の觸れ居れるあり。基督の人格の茲に大音響を發して廻轉しつゝあるあり。されば基督教の最深最確の結果たる個人の経験の中にある基督は、如何にしても之を輕んずることを得ず、之を観て基督觀念を立てざるべからざるなり。

此を以て初代の弟子等より経験に依て基督を見たり。テール Dico の言ひし如く、約翰傳の基督は生ける基督なり。約翰傳著者が多年基督を信せし経験により、彼の衷に次第に多く活動し、次第に面目を開展し、次第に人格の廣袤を加へたる基督なり。著者は曰く、我等その榮を見るに、眞に神の生み給へる獨子の榮にして、恩寵と眞理にて充てり。我等みな彼の盈滿より受けて恵に恵を加へらる。此れ経験の基督に非ずして何ぞ。著者には基督は神の永遠の「言」、途、眞、命なりき。彼れ之を具さに経験せしが故に、其の傳へし基督は、一行一言の端まで此の内性を流露し居れり。パウロの基督も経験の基督なりき。パウロは史的の基督には接せざりしが如し。されど彼は物質的に直接せし如く基督と親しかりき。此れ経験に於てなり。曰く基督はペテロに現はれ、後多くの人に所々にて現はれ、最後に月足らぬ者の如き我にも現はれたり。曰く基督我を執へ給へり。曰くもはや我れ生くるに非ず、基督我に在りて生くるなり。見よパウロや約翰傳著者は、決して史的の基督のみを其の信仰の對象とせず、信仰の材料とせず、十字架の死を超え、昇天を超えて、駭々として己が靈魂に入り來りて活動し、其所に姿を現はせる基督を信じ、此の経験に由て基督の己れに取りて何者なる

や、人類に取りて何者なるやを思想したるなり。

其より後代々の基督信徒は、決して基督を史的の人物とのみなさず、唯だ其の教訓を遙けき後世に實行することを勉めず、曾て使徒の靈魂を動かし、之を占領したる如く己れ等を動かし又占領し、曾て聖書の中に其の精神を記さるゝ如く、己れ等の靈魂に其の心を示し、曾て弟子等と共に歩みし如く己れ等と共に歩み、曾て弟子等を慰めし如く己れ等を慰むる基督を見、決して聖書の文字の中に基督の指導を求めず、過去の歴史の上に基督の模範を追はず、自己に近く、自己と共に在り、自己の内在る基督と直接し、基督と一體となりて、基督の歩むものとして此の世の中を歩み、基督の行くとして此の世の途を行きつゝあるなり。基督教會及び其の文學の不思議なる一の點は、基督が常に現在の人格として見られ、經驗せられ在ることなり。例へば天主教會が早くより聖晚餐に於て其の材料の中に基督の現在せるを信じ、之を其心にて守り、ルーテルまた其の眞理を容れて、聖晚餐には基督は材料となりて現在せざるも、材料と共に在りと信せしが如きは、此の信仰を儀式又は教義に表したるものなり。其他神秘的の傾ある者どもに至ては、此の思想極端に偏したるだけ、其だけ基督教會の此の經

驗を明白に示し居れるものあり。紀元三百年頃メトディオスが基督は靈的に我等各自の衷に生まれざるべからずと言ひし如き、中世の聖者クレアボのペルナルが、基督の中に入ることを其最大目的とし基督と共に苦むに由て之を達せんとし、只管基督を情人として愛するに由て之を得んとせし如き、其他アシシのフランチェスコ、マイスター・エツカート、トマス・アケンピス、ヤコブ・ペーメの如き、女にてはテレサの如き、マダム・ギオンの如き、擧げ來らば決して其人少からず。此等は皆な其の時代若くは其の性情の人の中に漂ふ經驗を一身に吸収し、其の宗教を特色あるものとなしたる人々なり。斯くの如く極端に走らざるにせよ、基督の現在を自ら經驗するは、基督の歴史に絶えざる自覺なりとす。されば代々の信徒の内在る基督は、生ける基督にして、吾人は之を見て基督を考へざるべからず。

今日の吾人基督信徒また昔の如く基督を經驗す。基督は吾人を新に造り、吾人の内に在り、吾人と共に歩み、吾人を慰め又勵ます。吾人が知る所の基督は史的の基督に非ずして、寧ろ吾人自らが經驗せる基督なり。史的の基督のみにあらざるなり。正確に史的の基督を知り得たりと思ひたりとて其は必ず誤りなり。今日の吾人が如何に細

心なる注意をなせばとて、史的の基督を有りのまゝに知り得ん理はなきなり。其の教訓をすら徹底的に基督の思ひたる所に寸分違はざる意味に於て解せん筈なきなり。されど吾人は自己の基督を知れり。確實に之を知れり。たとひ史的の耶穌は如何になるとも、此の經驗の基督は變ることなく實在す。歴史の研究は確實のやうにて不確實なり。今日より豊千九百餘年前の猶太の人物事情を確實に知り得んや。故に歴史的の耶穌が聖書にあるまゝ分釐異なる所なしと云ふことの不確なるが如く、歴史的の耶穌は無かりしといひ、若くは聖書の其とは異れりと云ふことは妄論なり。されど吾人の經驗せる基督のみは確實に實在せり。彼は吾人を一變し、神に對して全然新しき關係に立たせ、人に對して全然新しき精神を抱かしむ。此れ事實なり。十九世紀に入りてより耶穌傳は瀕々として大家によりて著はされ、何れも研究を發表したるものなるが、然も何れも著者經驗の基督なり。史的耶穌の眞面目を披露せんとしたるものと雖も、また自己の主觀により、己が哲學主義若くは歴史觀察に適合したる基督傳を書き、基督一生の傳説を自己の見に従つて取舍添削したるものなれば、之に由て現はれたる基督が著者自身の影となりて甚だ小さき形となりたるまでにして、また其人の經驗の基督たるを失

はざるなり。况や信仰あり誠實ありて著はしたる基督傳に至りては、實に其人が自ら經驗し、自らの心鏡に鮮に映れる基督の形に外ならぬなり。然れども此れまた生ける基督なり。生ける鏡に映れる現在の基督なり。此の現在の基督は確に基督を觀するに當りて材料たらざるを得ざるなり。

基督は生く。時間を超えて、常に基督信徒の精神内部に活動し經驗せらる。基督教其に由て發展する以上は、之を基督の人格の顯現開發とすべく、此の生ける基督を見て基督の人格を考へざるべからず。

余は基督に付ての吾人の見解を定むるためには先づ基督を知らざるべからず、而して基督を知るには第一には史的耶穌を見ざるべからず、第二には世界に現はれたる基督を見ざるべからず、第三には代々の聖徒及び吾人自らの經驗せる基督を見ざるべからざることを論ぜり。此の項あまりに長かりき。されど此れ今の批評の時代、懷疑の時代に於て已むを得ざる所なり。之を明にしたる上は、進みて此の諸方面より知識せる基督の如何を見ざるべからず。次で斯くして見たる時、彼は吾人の前に抑も如何なることをなし、吾人の眼に何者として其の姿を現はすかを考へざるべからず。

第二章 基督の人格

二二〇

基督の人格と事業を見るの途——人物と其價值——人格とは何ぞや——基督教と基督の人格

第一、基督は人也——史的耶穌は人久存の耶穌亦人——基督は人ならざるべからず——基督の人性の埋没——傳説に由る埋没——教義に由る埋没——早き時代の教義——中世の諸説——近世の迷信——近代の謬れる基督論の例——聖書に現はれたる耶穌は人なり——經驗の基督も人なり——甲、自然の人耶穌——自然的な一生——外部より受けし感化印象——自然及人生に對する興味と同情——他人に對する態度——彼は自然の發達をなせり——基督は凡ての因習先入見より自由なり——基督教は代々人性の自然の發展を主義としたリ——乙、靈の人耶穌——人は自然以上なり——靈と自然の衝突——衝突を和ぐる途——靈と自然との調和——大人物——耶穌基督は調和の人——耶穌基督は靈の人なり——宗教の耶穌——道德の耶穌——耶穌に於ける智慧——美を感じる能力——教訓及び生活の靈的而目——基督教は世々靈界に活動す——物質の事と基督教——耶穌の人性の總評——一、耶穌は正則の人——二、耶穌は完全の人——耶穌の無罪の問題——無罪の意識は推定し得べし——久存の耶穌の完全——三、耶穌は理想の人——撮要

第二、耶穌の人格は神の内性を顯示す——耶穌は人を顯彰し其の生活は理想人の顯現——耶穌は神に對する人の道を完うしたり——耶穌には此以上あり——甲、耶穌は神に付て顯示す——耶穌は神に付て無比の知識經驗を有したり——其一、教に於て神を顯示す——天父の教——耶穌は絶對に劃定を與へたり——神性の形

式耶穌に由て明となる——耶穌は神性の内容を顯示す——天父の内性に關する教訓——其二、耶穌は實行に於て神を顯示す——耶穌の行爲は神性的なり——耶穌は神に對する態度に於て神を顯示す——其三、耶穌は品性に於て神を顯示す——行爲教訓の神性的なるより品性の神性的を見る——感化の無比絶大なるは神品性の故——乙、神は耶穌に於て顯現せり——神は顯現す——間接顯現——自然界と其歴史に於ける顯現——靈と其歴史に於ける顯現——直接顯現——之を超自然の顯現とも言はん——何を直接顯現といふ——此れ神の顯現の完成歸結——一、耶穌の人格は間接顯現の至極——耶穌の人性は即神性——此顯現は耶穌の事實に於て見る——聖書記者等の認識——基督自身の意識——二、耶穌の人格は神の直接顯現の完全なるもの——此顯現は當然の理——此顯現は必要——神は太古より直接顯現せり——神は耶穌に直接自己を示す——神は耶穌の人格の中に入れり——神の思想耶穌の人格に入る——神は耶穌に於て活動す——如何にして此顯現あり得るか——人格の透化——潜在意識——サンデーの説明は當らず——神は耶穌の内面に透徹せり——此れ直接顯現なり——弟子等の認識——耶穌の自覺——『メシア』の自覺問題——『メシア』の意義——舊約全書の『メシア』思想——耶穌の時代の『メシア』思想——『メシア』の自覺は耶穌の價を下せず——『メシア』自覺の問題は熱情を以て論すべき性質の者に非ず——耶穌は神の顯現を自覺したるべし——事實に於て耶穌は神の顯現なり——括要

以上の研究に由り、基督を觀るには、單に世界歴史の短時日の表面に現はれたる其の見ゆべき一生を根據とすべきに非ざるを明にせり。されば基督の人格の如何を觀る

にも、殆んど二千年程前に世に生き、弟子等の前に活動せし基督のみに據らず、其の世界の歴史を動かし、吾人自らに働ける彼に由て之を論せざるべからず。又基督の事業を観察論評するに當りても、三年の救世事業のみを取らず、歴史の全面に波動し、吾人の全生活に透徹せる其の影響を取て材とせざるべからず。斯くして鮮明に現はれ來る姿が基督の人格と其の事業なり。斯くの如くして先づ如何なる基督の人格と事業とを見出たすか。

基督を論するに當りて何故其の人格と事業とを観るか、又之を以て基督論盡きたりとなすか。曰く此れ吾人人類に取りて唯一の價值あることなればなり。抑も耶穌基督が吾人に取り、基督教に取り、又世界に取りて至大の價值ある所以は、彼が單に歴史に存在せしといふ故に非ず。世の初より存在せし人類の數は無限ならんが、其の中に吾人が確に之を知り、之に付て吾人の見解を定め、態度を整ふを要するもの果して幾何ぞ。無名無爲にして、朝の露の如く、また蟬蛸の如く、生じては滅したる最大多數者は問はずとしても、世に明に其の跡を残したるものとても、抑も之に付て熱心に研究し論評する要何所にありや。亞弗利加の金字塔は世界の最大事業の一なり。其の

中に保存せられたる王の名は萬世に傳はるべし。其の歴史的實在は何人も疑を挿む餘地なかるべし。或は木乃伊によりて其の容貌の概觀を今日にまで示す者もあるべし。然れども吾人は之に對して何程の興味を有するや。勿論歴史を知るは面白し。曾て世界に在りし事實を明にするは吾人の大いなる樂の一なり。然れども吾人は此の研究に由て吾人の生死の問題が左右せらるゝことを思はず、吾人の靈魂が何等の影響を受けんことを思はざるなり。大いなる人格が吾人の注意を引くこと強きは、其の吾人に對する交渉影響の大いなるによれり。大人といひ小人といふは皆な此の標準に依りて評定せらる。古今の人物の吾人に對する遠近も、決して時代の間隔によらず此の交渉影響の如何に由りて言はるゝなり。如何に世界に鮮かなる跡を印したりとて金字塔の建設者の如きに止まらば大人格には非ず。如何に吾人に近き時代に居たればとて、乃木大將の前後に先帝に殉すと稱して自殺せし者どもの如きのみにては、何の取るべき所もなし。されば吾人は古今の人物に對し、他の多くの點を見るを要せず、如何に多くの事情や地位や目前の事業が、厖然雜然として磨集し居るとも、其等に目もくれず、直ちに其の人物の人類に於ける交渉と影響に着目し、之に由て其の人物を評價すべきなり。

耶穌基督の事また然り。基督は吾人に交渉あり吾人を影響せること最大至極なる故に吾人に價あり。彼は二千年前の人なり。彼は最小の劣敗國猶太の人なり。若し歴史にのみ目くるまば、彼は全く吾人に興味なき人物なり。然れども事實人類に交渉し影響し來り、吾人また彼と交渉し其影響を受け居れる故に、其の人格至大にして至近なり。されば他の點は第二流の問題とし、茲には人類に對し至大至近の交渉影響ある基督の人格と其の事業とを考へて、基督觀を作らんことす。先づ此章に於ては基督の人格に關する觀念を立てん。

茲に謂ふ所の人格とは或人が特に其人たる所以のものなり。即ち其人の品性なり、性格なり、個性なり。人格といふ語は時として形式を意味し時として内容を意味す。即ち嬰兒を虐待する者あるとき、是は人の人格を無視したる者なりと言て責むるは、人格の形式を思ひたるなり。人すでに人として生るれば、此は侵害すべからざる一個の人格なり。此の意味の人格は萬人同價値なり。嬰兒も英雄も罪人も聖者も人格たるに於ては同じ。然れども人格は決して空虚なるものに非ず、必ず内容を有す。小兒に於ては未だ現はれざる芽の如きも、其内に將來を胚胎せり。長ずれば人格は各々異なる

内容を有す。既に一個の人格として立てば、其は必ず何等かの内容を有する人格なり。茲に於て人格には大小あり高下あり。萬人皆異なる面の相異なるが如し。耶穌基督も一個の人格なり。之には内容あり。此の内容が基督をして基督たらしむるなり。耶穌基督が史上の大人物たり、基督教の中心たり、吾人の靈的生命たる所以は、凡て其の人格の内にあり。人格なき所より何もかも發せず。特に宗教の如きは、人格が内部に經驗し、人格に於て實現したるものならずんば人の世に生きて用くべからず。人格の中になくして、外にのみ手品の工の如く現はれたるものは、一時世を目前めかすことあるも決して永續すべからず。我國の多くの信徒牧師などは、此の點に思ひ到らざるが如く、切りに其の手煉や計畧に由て宗教を傳へ、教會を盛にせんとしつゝ、あ

其の人格との聯絡とを尋ね見よ。此の聯絡の鍵とは存せず、事業は人格の外に在りて空中に浮べり。彼れ品性高潔なるか。彼れ眞理を理會する學才あるか。彼れ世の中の紛々たる事情を處する思慮分別あるか。彼れ眞に神を畏れ神に事ふるの誠實あるか。彼れ宗教の深き經驗あるか。神と靈々相通する活宗教あるか。彼れ人を愛して己を棄

つるの徳あるか。凡て否らす。唯だ彼は自己を張り、利福を追ひ、權力を求め、之に熱中して傍若無人、神を畏れず、人を敬はず、其の手煉を用ひ、其の策畧を用ひ、斯くて教會を築き上げたるなり。斯くの如くならば一生の中に確に一個二個十個二十個の教會は造り上げらるべきこと當然なり。然れども此れ他の事業と何の異なる所ありや。斯くの如き成功者は決して牧師に非ず、教師に非ず、長老に非ず。實に教會師なり。教會師といふは相場師、講談師、卜筮師、香具師と相並びて數へらるべきもの、意なり。西洋に於ても古來眞に基督の代宰たるべき人物少くして、教會師たるもの多く、本人自ら之を覺らず、天晴れ神の國の大いなる者となりたりと思ひて世を終り、時人後人また之に思ひ到らずして、彼等を景仰すべき人格なりしかの如く信仰するは嘆くべきことなり。讀者もし余の此の言を意に留めて、現在の人物を見、過去の人物を見れば、其の價值或は顛倒するに至るやも知るべからず。彼等淺薄なる事業家のなせし所は、一時世を動かすことあり、彼等の強壓的政策に由て、鹿を馬と言はせ、馬を鹿といはせ、一時世人を率ふることあらんも、豈夫れ久しきを保ち得んや。天定まれば人に勝つ。精力衰へ、勢力減する時か、遅くも其の死ぬる時となれば、均勢は忽ち破れて、鹿

は鹿に、馬は馬に歸らざるを得ず。其時手を揉み涕を流して悲むも何の詮かあらんよし又、表面上外形上には幾分長く世に残ることありとも、然も一寸にても物界より入りて靈界の方に移れば、其所には少しも其の印象なく影響なし。或は人を教會其他の節度に従はせ、表面上教義に服せしむることはなし得んも、人の精神は常に彼等の捕捉より離れ、他の深き人格の感化を受け、精神上には之に支配せられつゝあるなり。然るに耶穌基督の事に至ては凡てが人格より發せり。基督の宗教發見、即ち神の天父なることを明に見て、其の愛を確に經驗したるも其の人格の中のことなり。其の道徳の至高にして、神を愛し、人を愛して極まれるも人格の中の事なり。其の人を動かし、人を感化し、之を更生せしめ、之を養ひて大人物となすも其の人格の中より發する力なり。其の教も、其の行も、其の人格の發動に外ならず。されば基督に由て起れる此の世界の大廻轉の心軸は、實に一個の耶穌基督の人格なることを思はざるべからず。耶穌基督の人格は斯くの如く吾人に取りて至大の價值あり。然らば其の人格は如何なるものなりしか。

第一 基督は人なり

二四八

史的の基督は一個の純然たる人なりき。福音書は皆な耶穌が神より特派せられたる『メシア』たりし事を證明せんために書かれたるものなれども、然も彼を一個の人として書きあり。著者等が或は親しく接し、或は近く傳聞したる耶穌は、其の地上の生活に於て彼等と種類に於て何の異なる所もなき一個の人たりし也。史的の基督すでに人なるが故に、久存の基督、即ち歴史を通して活き、各信者の精神の中に活ける基督は、また同じく人なり。史的の基督が人なるに、久存の基督が一變して人間以外のものとなるの理あるべからず。若し然らば其は他の基督なり。人格の一致なるものを失ひて、二つの基督あることゝなるなり。初代の弟子等の經驗せし基督は前後同一人にして、即ち初め人たりし如く終まで人なりき。彼等は其の爛熟せる信仰經驗を抱きて、基督を神の右に座せる神の子なりと信するに至りし後も、彼に於て其の曾て地上にて接せし人格より以外の人格を見出ださず、唯だ曾て足この土を踏みし人格が其まゝ榮光化せられ無限化せられしを見、靈を以て之に接せしのみ。吾人の接する基督また人より以

外のものに非ざる也。否吾人は如何に想像を弄ぶも、人間より以外の基督を思ふ能はず、却つて人間たる基督を見るに由て、無限の神の我等に對する容子を知識するを得るを感ずるなり。即ち神の人に對して存する内性は、人たる耶穌基督に見らるゝものと同質一體なることを知り、神の其の以外の實相の如何にあることは全く知る能はずして、而して之を天父なりと信するなり。實に基督は人なり。

又基督は人ならざるべからず。基督人なるが故に吾人に價值あり吾人の生命に關係あり。人類の間に徹底的に作用する力は『人』の力のみ。『人』より以外の力は如何に大なりとも人類と調和せざる罅隙を生じ、茲に人類と軋轢を感じ、其の微妙の點にまで透入する能はざるや必せり。若し基督が吾人と質を異にせる存在物ならんか。如何に密に交渉し來りても必ず隔靴搔痒の憾あり。其の精神は十分に交感する能はず、其意志は徹底的に合一する能はざるなり。若し質を異にせば一方に在るものが他方になくも當然のことゝせざるを得ず。一方に起ることが他方に起らざるも亦怪むに足らず。萬事一を以て他に推し、一を以て他を律すべからず。基督もし獨り天上の存在にして吾人と異なるならば、彼と我等との間には呼べども答へぬものあり。宛がら竹取物語の戀耶姫

二四九

が人間の情に對して何等の反應なかりしが如けんのみ。然るに基督と吾人との間には何等かゝる淵なし。基督は『我等の和なり、二者をひとなし、隔の籬を毀ち、敵怨即ち律法の中に命ずる所の法を其肉體にて廢せり』(以弗所書 二ノ十四)。彼は人と人との間に在りて、凡てを一つの調子となせり。『彼は我等の如く凡ての事に誘はれたれど罪を犯さざりき』(希伯來書 四ノ十五)。彼は人として天地間に暴露せられ、凡て人の受くべき力には接觸したるなり。此の人たる事が基督と吾人との凡ての關係の楔子なり。此の一點より凡ての交渉は入り来るなり。即ち一には共に同質の人なればこそ、相互の同情も存するなれ。吾人は犬や猫よりも優れたる生物なれども、犬や猫に十分なる同情を寄せ能ふとは思はず。又勿論彼等より十分同情せられんことをも期せず。種を異にし質を異にすれば事に就て全く同じ心を抱くことを期すべからず。基督が出所不明の天使ならざりしこそ、我等に密なる交渉を有し、心の底までも徹底せる同情を有する所以なれ。従つて二には基督の感化といふことも徹底す。基督が人の間に在り、而して同じく人なるが故に、其の感化は波紋の如く周圍に傳播するなり。若し種を異にせば、基督の感化の凡ての光線が、悉く波動して他人の心を印象し、他人の内部まで其の波動を繼續すること能は

ざるべし。又三には基督が吾人の理想とせらるゝも其の人なるが故なり。若し種を異にせる者ならば、如何に美はしくとも之を倣はんとする心起らず、之を以て自己の理想とせん筈はなし。然るに基督の人格は人なり。茲に於てか舜も人なり我も人なりといふが如く、己れ茲に達し得べきを思ひ、又達すべきものなるを思ひ、基督に於て自己の理想の姿の現はれたるを認め、精神の方針を定むるなり。故に人の救といふことは、基督の人なるに由て全うせられしなり。神は人を救はんために人となりたりといふ信仰は、確に此の理に基づくものにて、人ならずしては人を救ふ能はざるは眞なり。然かのみならず、四には基督が神と人は靈に於て父子なりといふ眞理を事實に示し、人を神に一致せしめたるも其の人なりしに由れり。基督が自ら紛ふ方なき一個の人に於て、而して能く神を示し、神の愛を實現し、神茲に生くることを顯はしたればこそ、神人は靈に於て同質のものたること明なれ。若し基督が人ならずんば、如何に美はしく神を現はすとも、其の神は人と質の異なるものなれば、人は之に近づくべからず、之と一致する能はず、即ち神は人の父に非ざるなり。従つて人が神に合ふといふ靈界の極慶事は終に實現の途なかるべきなり。何となれば基督が人に非ざるならば基督に現

はれたる神はまた人と質を異にせり。人如何に努力するも其の自ら人たる限りは、此の神と一に合ふこと到底望むべきことにあらねばなり。

されば基督が吾人の靈と交渉ある所以、吾人に神を示し、吾人を救ひて神と合一せしむる所以は、實に其の人たる所にあることを思はざるべからず。

然るに基督の人性は其の徒の謬見に由て甚だしく埋没せられたり。由來史上の偉人、特に宗教の教祖たるものは、其の人格の非凡なると、其の功績の驚くべきと、其の信徒に經驗せらるゝことの不思議なるに由りて、常に人間以上のものとせらるゝなり。然り彼等は確に人間以上なり。然れども人間を離れて人間と異なる存在にはあらざるなり。然るに其の歴史は間もなく想像化せられ、群小の心を以て濃かに色彩せられて、其の人格の人たる面目は深く掩ひ隠され、一種奇怪なる存在物として傳へられ崇拜せらるゝなり。基督は其の偉大無比なりしだけ、又此の禍を蒙ること大なりき。彼は常に其の真相を隠され、世に現はるゝ姿は基督自身ならず、却て常に小人の妄想迷信の影たる場合多く、是がため人を救ふ其の大能力は遮られて、あらぬ方に眞の救は解せられ、あらぬ方面に其の精神は敷衍せられ、斯くて信するものは、基督を慕ふこといよ

いよ切にして、基督を距ることいよ遠く、何時まで追ひ廻りても終に之に合ふ能はず、全く幹に繋がらざる枝の如く、枯れて生命なくして已むもの少からぬなり。

基督の人格に關しては、永遠の基督を人間以外のものとするは勿論、史的耶穌をも全く人間以外の者とせんとする傾向常に甚だ強かりき。基督教會及び其の周圍には、初代より此の傾向の傳説簇出し、又此の傾向の思索雲集したり。先づ傳説について言へば、基督の幼時に於て奇怪なる事ども多く現はれ、基督には不可思議の能力あり、其の知識は又人間の匹を絶し居たりとて、其の逸事多く傳へられて、漸く確信せられ後には『トマスの耶穌幼時福音書』、『アラビヤ人の耶穌幼時福音書』などいふ非正典の文書現はれたり。耶穌を人間種ならぬと信する餘り、耶穌の母マリアをも罪ある人間の一人とはなすを得ざるに至り、『マリアの昇天』などいふ文書も出でたり。此も傳説の凝集したるものたるや明なり。斯くの如き信仰は天主教の中には尙強く残り居れり傳説かくの如く基督の人性の面を塗抹すると共に、他方には又知力優れしもの、其の心意の活動を縦まゝにし、基督の性格について徒らに思索し、基督の事實をば材料とすることを忘れ、全く飛び離れたる空想の世界に自己の想像論理の樓閣を築き、之

を基督の真相なるかの如く論じ、普通の平民を惑はして此の自己の影を拜ましむること甚だし。古來基督信徒は眞個の基督を見る能はずして、此等空論者の空想を眺め、之に跪きたること少からず。初代基督教が希臘學問の盛なりし世界に入り行きし時は、此の變化は忽ち其の上に来りたり。東方の教會にては、ハルナックが其の『教義史』に言へる如く、殆ど基督の福音をば忘れ果てたるかの如く(Adolf Harnack, Dogmengeschichte)。唯だ基督の神性人性の關係の問題に思を惱まし、議論を闘はし、敵も味方も基督の真相をば全く人間以外のものとなし、基督を吾人人類との密なる一致より引き離したり。例へば紀元二世紀の前半に盛なりし知識グノシス論争の如き、彼等グノシス派は、一般に舊約の神と絶對の神とを各別のものとし、絶對の神は言以て言ふべからざるものなり、之よりデミウルゴス(造化者)出で來り、この造化者萬物を創造す、猶太教の神はこれなりと説きしものなるが、サツルニヌス等は、絶對の神はアイオン(神徳)の一つたるヌース(理性)を世に送り、此の理性は假の形を取りて救主として現はれ、靈界の者どもサタン(惡魔)とデミウルゴス(造化神)と其の群との中より拯ひ出だせりと唱へ、マルキオンはデミウルゴスは自らの像に従つて人を造り、之に肉體を

與へ、之を惡慾に委し、自らを其の撰べる猶太民族に顯現し、外形的の律法と道德とを興へ、『メシア』を降して異邦人を審判せんと約束したり、されど善なる神は此の殘酷なる宣言の實行を欲せず、俄にテベリオ皇帝の第十五年に假の體を以てカバルナウムに降り、自ら『メシア』と稱し、デミウルゴスの律法を廢棄せしかば、デミウルゴスは之を十字架の死を受くるに至らせたり、されど彼の死は外面のことにて、デミウルゴスは欺かれて其の勢力を亡ぼされたり、此の善き神耶穌は冥府に下りしもまたデミウルゴスの前に現はれ、無罪の者を殺せし罪を責めたり、神と一致することを肯んせざる者は此のデミウルゴスの統治下に束縛せらるゝ者なりと唱へたり。其他此派の人の説きし所は大抵此の類なり。此等知識説の人々は種々の妄説謬説を逞うせし中に、基督を神が假りに人の體にて現はれたる者として、其の人たる實なきを説きしは其の最も甚だしき所なり。知識説に對しては當時の教會の師父等猛烈に反對し、基督教の眞義を發揚するに勉めしが、然も古代は何人と雖も幾分基督に付て誤れる見解を抱き、之を眞の人間に非ざるが如く考へたるは事實なり。故に三世紀前半に至りてサベリウスは、所謂顯現様式説を唱へ、神は一の統一體なり、されど此の本體は多様な顯現

をなす、父と子と聖靈といふ順序にて、戯曲の幕の如く現はれたり、この三位は決して各々獨立せるものに非ず、一の神なり、天地創造者又立法者として現はれたるが父、同じ神が救贖をなすために現はれたるが子、更生と聖別を與ふるために現はれたるが聖靈、かくて此の自己發展終ればまた舊の單元に歸るなりと言へり。此説はサベリウスの前より既に存在し、一名を父神受苦説ペトリウス説といふ、即ち十字架にかゝりしは父なる神自身なりといふより來る。此れ實に基督の人格を人間外のものとする以上、之に關する思索の結果として、到達せざるを得ざる所なり。更に三世紀後半に降れば、小亞細亞ラオデキアの監督アポリナリウスあり。プラトンの人間三性説に基し、人間は肉體と生物魂と理靈とよりなるものにて、理靈は他の二性を支配すべきものなるに、罪のゆるるに却て此の下等性のために壓抑せらるゝを以て、神の『ロゴス』(言)は肉體となりて生じたり、基督は肉體と生物魂とに於て人なれども、其の理靈は無くして、神の『ロゴス』之に代つて茲に在るなり、基督にもし人の理靈あらば、即ち基督の中に神の子二人ある理にて不道理なりと説きたり。此は神人兩性が基督の中に在りといふ當時の正統説を維持せんとして其の缺陷を補ふ心より唱へたるものなれども、斯くして

基督の人格をば全く不可解のものとなし了れり。マリアより生れし人たる基督に肉體と生物魂とがあつて理靈がなかりしとすれば、此は決して人に非ず、動物若くは其他のものなり。何となれば動物は肉體と生物魂のみを具へて理靈を有せざるものなればなり。人の人たる所は其の理靈にあり。之なくば人の形ありとも人に非ず。基督之を缺陷し居たらんには人に非ざりしなり。然もアポリナリウスは斯く考へたり。

此等のグノシス説や、サベリウス説や、アポリナリウス説は、當時の教會の多數決に由り、何れも異端として斥けられしものにて、基督教會は初より基督の人たりし事を主張するに頗る力を注ぎしは事實なるが、然も其等の正統説として一輸一贏せし諸説と雖も、尙基督の人たることに付ては、見解頗る曖昧にして、信仰極めて脆弱なり。例へば紀元三百二十五年のニカヤ會議に於て勝利を占めしアタナシオス説は如何といふに、基督は神の子にして無始なるものなり、神の本質より出で、神と同一實體 *homoousios* なり。子は父なくしては子たり得ぬ如く、父は子なくしては父たり得ず、基督は本性上神の子なり、神の意志に由て生じたる子には非ず、といふなり。之に反對なりしアリオスは基督は『ロゴス』なり神の獨り子なり、故に神と稱するも可なりと雖も、然も、

厳密なる意味に於ては神に非ず、彼は永遠に生れ居れるものに非ず、彼には始ありき彼は造られし物の最先最高のものにて、時間てふものゝ在る前に神の意志の作用により、無の中より創造せられし者なりと唱へぬ。此は神の統一を考へしより到達せし思想なり。此等は何れも高遠の議論たるを失はねど、餘りに思辯の末に馳せ、もはや歴史をも事實をも打ち忘れ、是に基を置かぬ論理を立てしものに外ならず。此等の論理の中にては、基督はもはや地上より浮揚し、其の人たる面目を失ひ居れり。更に紀元四百三十一年のエベソ會議にて勝利を得しアレキサンドリアのクリロスの基督論を見れば、彼は基督に於て神性と人性とが結合一致して一人格となれるを唱へたり。彼は謂へらく神は人となれり、斯くて神人 (Dei personae) といふ一人格となりしなり、もはや兩性なし、神にあらず人にあらず兩者の一となれるものなり、肉體は凡て其の屬性を以て『ロゴス』の屬性となり、『ロゴス』は少しも其の神性を失ふことなしと。ナジアンズムのグレゴリオスが基督の中にては神性は人性に對して猶太陽の群星に對するが如し、人性は全く光を滅せしにはあらねど、見る能はざる程に薄くなれりと言ひ、ヌツサのグレゴリオスが基督の人性は其の絶大の神性の海の中に融け入り、一滴の醋が大

洋の中に滅するが如くなれりと言ひ、クリロス派の極端論者エウツケスが基督は其の肉生後（インカーネーション）唯一性ありしのみ、基督の肉體は人間の肉體と同質の者に非ざりきと論せし如きは、此單性論と同じたるものなり。之に反してネストリオス等の兩性論者は、基督に於ては神と人と合一せしも、其は本質の全く一となれるに非ず、神性と人性とは並び存して、共に働けり。神なる『ロゴス』は人なる耶穌に宿り、兩種の屬性こゝに具はり、共同の目的のために協動したり。されど兩種屬性が全然無區別混一せしにはあらず、基督の十字架の苦に於ては『ロゴス』は與かり苦むことなかりしなりと唱へたり。此等は多少史的基督をも觀て其の性質を論じたるもの、基督の人たることを拒否せしに非ずと雖も、然もかくの如く觀られたる基督の人格は餘りに人間を離れ居れり。然れど彼等は基督を斯くの如く全く思索の影となし了りて其の非を悟らざりしなり。中世の基督信徒の基督觀また之と異なるなし。天主教會も希臘教會も、基督をば徒らに人間を離れたる神とのみ信じ、之を禮拜することのみを考へ、其の吾人と同じく人なりしことを殆ど全く忘れたるが如く、よし之を思ふも極めて重大ならざる思想として取り扱ひ、基督が知らざりし事あり、能はざりし事ありといふ如き思想をば、非常な

る不虔褻瀆の事として懼れ忌みたるなり。基督の母マリアを神の母とし人間以上のものとし、之を禮拜せしを見ても、如何に基督の真相が誤られたるかを知らざるに足るべし。十六世紀宗教改革は多くの衣裳偽誤を披脱して基督教を其の生命の源頭に歸らしめたりと雖も、然も基督に關する觀念は殆ど古代のまゝに残れり。彼は實に偶像教の神の一人と殆ど異なる所なく拜まれつゝあり。改革後ルーテル派もカルヴィン派も古の希臘神學者の誤りを襲ひ、ルーテル派は基督に於て神人兩性は合一し、其の在世中は神性の意識を有したり、基督に於ては神人の性は別なりしも、神人の屬性は混一したりと唱へ、カルヴィン派は兩性は嚴に並立し、神性人性交互に現はると言へり。其他サベリオス説はシュライエルマッヘル Schleiermacher やブッシュネル Bushnell に於て近代化せられて復活し、エウツケス説はクリプシス説となりて再現し、更に甚だしきは基督の一代記をさへ非正典福音書風の一代と見んとするさへあり。ヘンリ・ヴァン・ダイク氏が『懷疑時代の福音』に近代に於ける謬れる基督論の適例として引ける者二三を其のまゝ茲に轉引せんに、デ・リュゴ De Lugo は、基督は其の肉體の關係せる範圍内にては成長の條件に支配せられしにせよ、其の靈と知力とに關しては、最初よ

り全生涯の間、祝福充つる幻を十分に享受したり、表面にては旅人たり門外漢たりしも、内部にては全く洞知者なりき、使徒行傳には彼を神の僕と稱へあれど、嚴密に然いふべからず、基督は晩餐禮の設立に於て、自己の神格に對して自ら犠牲を献ぐと信せらるゝなりと言へり。『カノン』(今は監督)ゴール Canon Gore は之を非難し、此れ新約聖書の示す所の基督と相異すと言へり。次にウィルバールフォス (Wilberforce) は其の『神の肉生』The Incarnation に於て、基督の肉體は、病に罹る憂なく、動物を意に従はしむる力あり、死なざるべからざる必至なく、他人に生命を與ふる内合力あり、基督は全知を具へし故に、自ら知らざる所ありといひしとするは、經驗もせざる所を虚言せしとすることなるを以て、吾人は次の如く結論せざるを得ず、曰く基督が人として人と共に有せし所は、實の無知に非ず、人類に屬する眞理に到達するの手段を有せざりしとのみと。更に博士ダブルユー・ジー・ター・シエットの『教義神學』W. G. F. Shedd, Dogmatic Theology には曰く、神人の人格たる基督は神性と人性とより成らざるべからず。其の神性は普通人格の心意の如く、神性に合へる經驗を有す。其の人性は普通人の肉體の如く、人性に合へる經驗を有す、神性の經驗と人性の經驗との相異

るは、人の心意の經驗と肉體の經驗との相異なるが如し、されど此等兩種の經驗の主觀我たる者は唯だ一個の人格也、基督がサマリアの井の傍にて疲勞と渴きを意識せし時には、彼は又之と共に自ら永遠なる神の獨子、三位に於ける第二位たることを意識し居たり、此はサマリアの女に對して、我が與ふる水を飲む者は復た渴くとなし、我が與ふる水は其の衷にて泉となり、湧き出でて永生に到るべし、汝と語る我は『メシア』なりと言ひしに由て明なり、最初に於ける疲勞と渴の意識は彼に於ける人性に由て來り、次の全能と至上の意識は其人格に於ける神性に由て來る、人性なくば前の意識なく、神性なくば後の意識なかるべし、彼は一人格に兩性を有せしが故に、兩方の意識を有し得しなりと。エチ・ビー・リッドンも『我等の主の神性』H. P. Liddon, The Divinity of our Lord and Saviour Jesus Christ の中に基督の人たることは、其自身獨立せる個性的の存在に非ず、人格の本座中心に非ず、永遠の『言』が、肉體となることに於て、之を存在に至らしめ、之を獨立に至らしめし行爲を離れては、決して存在すべくも思はれざるなり、人性は『言』が其の人格の周圍に襲ねし衣裳なり、彼が自己を人と交渉する所に置き、之に由て人間に向つて活動するための道具たるなりと言へり。(Henry

Van Dyke, The Gospel for an Age of Doubt) 此等は實に基督を崇むるの餘り、基督を人間以外に押し上げ、終に基督の眞面目を塗抹し、其の力を人間界より萎微せしむる信仰なり。而して此等の觀念を非難し、之を謬れる基督論とするヴァン・ダイクは米國著名の牧師にして、一般の基督信徒に人望あり、其書は七八版を重ね居れる人、ゴールは英國々教會の有力なる監督にして、其書また最も汎く讀まれ且つ推稱せらるゝ人なりと共に、彼等が認れる基督論の主張者とする英國々教會のウィルバークスと云ひ、同じくリッドンと云ひ、共に學識信仰卓越せし人。シェッドは米國の大神學者にして、其の書は今尙用ひられつゝある人なり。然も尙かくの如し。以て普通信徒に基督の人格の解せられざるや推すべきなり。

然れども此れ明に基督信徒の主觀に由て虚空に造られたる基督にして、眞個の基督の姿にはあらざるなり。基督は歴史に入り來れり。歴史の基督は實の基督にして決して假相幻象に非ず。既に實なるが故に又全然人なり。聖書に印せられたる基督の跡は紛ふべうもあらぬ人の跡なり。勿論聖書の中に既に以上の如き傳説や教義の基督と同じ姿に見せしめんとする描寫なきに非ず。聖書記者の隠さぬ心の底を叩きたらんには

基督の『メシア』たることを宣傳したさの餘り、其の事跡に及ぶ限り神性の要素を發見せんとし、斯く見ゆる點を高調せんとしたる所もなきにあらざるべし。従つて基督の一代の傳説の中に、神話的の分子も容易に混入し、極めて早き時代より確信せられたる者もあるべし。誕生前の事、幼時の事の中には幾分此の種の者もとせざるを得ず。唯だ其の部分が極めて謹慎して記され、而して聖書自身の基督觀念の主要地位を占め居らざるのみ。然れども聖書の耶穌は明に人也。聖書の耶穌は決して人間以外の存在とは見え、又聖書記者は耶穌を人間外の者とせんとして勉めたる跡見えざる也。

福音書の耶穌、即ち史的の耶穌が何所までも人として示されあるのみならず、歴史より過ぎ去つて經驗入れる基督もまた全く人なり。勿論經驗の基督は榮光の主、神の獨り子とせらるれども、其の久存の基督は何等人より異れる種類の存在に非ず、曾て世に在りし時と同じ性質にして、神に對し人に對しまた同じ關係なり。基督信徒の見る久存の基督は何所までも人性を圓滿に具へ、人との間に隙もなく不調和もなく、一を打てば他に響くといふ密なる關係の間柄に在るものなり。

斯くの如く聖書に於て傳へられ、經驗に於て生ける基督を見るに、彼は純然たる人なるが、其の人たるや、第一には自然的の人なり、第二には靈的の人なり。

甲、自然の人耶穌　人は肉と靈とが不思議に結合したる存在物なり。肉と靈とが一物なるや別物なるやは何れとしても、兎に角この二つが併存し居らざれば現實の人に非ず、曾て此世に存在したりと謂ふべからず。靈がなければ人は人たらざると共に、初より肉なくばまた人間以外のものなり。而して靈は特別の其自身の原則に依て生じ其自身の原則に依て存在すと雖も、肉は自然界の裡に在り、自然界の法則に支配せらる。其の生ずるも、其の保つも、又其の解散するも、皆な自然界普汎の法則に依れり。故に人は肉の方面に於ては自然界に屬し、禽獸と同じ要求を感じ、禽獸と同じ發展をなす。唯だ是が自然界の冠として進化し居れるだけに、又禽獸よりも進歩せる所あるのみ。人にして若し此の方面を有せずば人に非ず、又其の此世に在る間は、如何にしても此の原則より脱却する能はざるなり。故に人は自己が自然界に屬することを看過する能はず、之を計算の中に入れて生活の方針を立つべきものなり。之を全然忘却して、唯だ靈のみの者の如く生きんとしたりとて得べからず。現實は直ちに其人を壓

迫して、全く失望せしめ終るべし。

基督を観るに一個の人なるが故に、彼には此の自然的の方面完全に具はれり。彼れは凡て肉體に於て自然の法則に支配せられたり。彼は自然界の法則に従つて生れ、自然界の法則に従つて發達し、自然界の法則より來る要求を感じ、自然界の法則に従つて死したり。然り其の死は一面より言へば不自然の死なれども、然も十字架につけられて殺されし時は、其の死すべきは自然なりし也。基督を無意味に神とせんとしたる運動は、基督より及ぶ限り自然的の要素を抜き去り蔽ひ隠さんと企てしも凡て無益なりき。若し彼れ自然的の人たる事が不都合なりしならんには、猶太人の想像し居たる如く、天より榮光の雲に乗りて、天災地異の間に俄然として地に墮ち來るべかりしなり。然るに基督の生涯は凡て此等の空想に反し、彼等の失望の材料となりしが如く、彼は萬事自然的なりき。先づ同觀福音書の傳ふる所を以て見ても、又經驗と教義とのため幾分彩られたる約翰傳に依て見ても、彼は一個の女より生れたり。彼は幼時伶俐なりしも而も何等怪異の事なく、『智慧も身長もいやまさり』行きたり(路加傳二、一五二)。決して妄想者の考へし如く生れながらにして神たる全能全知を包み居しに非ず。彼は成

長の法則に由て發達したり。彼は事實上全知に非ざりき。若し全知なりしならんには其の生活は必ず異なる趣ありしなるべし。自らも知らぬことあるを公言せしこと聖書に残れり。世の終末の何時來るか天の使も子も之を知るものなしと言へり(馬可傳十、三三)。彼はまた自ら能くせぬ所あるを言ひしことも明なり。ゼベダイの妻がヤコブ、ヨハネ二子を携へ來りて、基督の王國立たば、此の二子を左右の位に座せしめよと求めし時は、我が左右に坐する事は我が賜ふべきに非ず、唯だ我父に備へられたる者は賜はるべしといへり(馬太傳二十、二十一、二十三)。約翰傳の中には我を遣はし、父もし引かざれば人よく我に來るなしと言へる所あり(四四)。彼はベタニヤよりエルサレムへ通ふ朝、甚だしく飢ゑて路傍の無花果樹に果を探したり(馬太傳二十一、十八)。約翰傳四章には傳道旅行して、飢ゑ渴き疲れ果て、サマリヤの一部落近き所の井の傍に休み、弟子等をば食物を買ふために邑に遣はし、自らは残りて水汲むために來合はせたる一人の女に水を求めし光景を書きあり。同じ本には十字架にかゝりし時、我れ渴くと言て、兵卒より醋を受けたる記事あり(十九、二九)。彼は疲れては孤舟の中に怒濤の狂ひ弄ぶをも覺えずして熟睡したり(馬太傳八、二三、二六)。彼は繁忙なる活動の間には休息を要し、祈禱を要し、安眠を

要し、飲食を要したり(馬可傳一ノ三五、全六ノ三一、三三)。彼は大きいなる人物たるに相應せる曠野の大誘惑にも遭ひぬ(馬太四ノ一十一、馬可一ノ十二、十三、路加四ノ一十三)。其他生活の端々に無數の誘惑に遭ひしことは明なり。彼は傳道の着々成功するに喜悅滿胸なりき(路加十ノ二)。ペテロが汝は生ける神の子キリストなりと告白せし時には、ヨナの子シモン汝は福なりと祝せり(馬太十六ノ一七)。されど又悲みもしたり。洗禮のヨハネが悪虐のヘロデ・アンテバスの手に死にし事を聞きては、無限の悲愁に打たれ、船に乗りて淋しき所に行きて哀みたり(馬太十四ノ十三)。彼は最後に近づける一夜、橄欖山より月下のエルサレムを望みて、噫、エルサレムよエルサレムよ預言者を殺し汝に遣はさるゝ者を石にて打つ者よ、母鶏の雛を翼の下に集むる如く我れ汝の赤子を集めんとせし事幾度ぞや。然れど汝等は好まざりきと云て慟哭したり、(馬太二三ノ三七、路加十三ノ三四、三五)。約翰傳には其の弟子ラザロの死に由て悲める姉妹の状を見て、涙を流し、身ふるひし、心を傷めたりと記さる(十一ノ三三、三五、三八)。彼は怒りもしたり。エルサレムの神殿の廣前にて、百賈混雜し、貪慾公行せるを見ては、怒て賣買する者を逐ひ出だしたり(馬太二ノ十二、十三、馬可十一ノ十五、十九、路加十九ノ四五、四八)。安息日には善をなすと惡をなすと生けるを救ふと殺すと何れをかなすべきと問ひしに、パリサイ宗の者どもは舊き形式に囚はれて

敢て答ふる勇氣なかりし時には、基督は怒を含みて環視し、彼等の心の頑硬なるを憂ひたり(馬可傳三ノ一六)。基督にさはられんため人々幼兒を携へ來りしに、弟子等之を責めし時にも、基督は之を見て怒を含み、弟子等に向つて幼兒を我に來らせよと言ひたり(馬可十ノ十三)。僻遠のカイザリヤビロビ附近にて、己れの都に上りて長老祭司長等より殺さるべきを預告したる時、ペテロが基督を引き止め、主よ宜らず此事汝に來るまじと言ひしに對しては、ペテロを反顧して、サタン(惡魔)よ我後に退け汝は我に礙く者なりと叱咤したり(馬太十六ノ二)。彼は常にパリサイ宗の人の形式的にして偽善なるを憤慨したり。彼等の非難に對して猛烈に反撃を加へしは福音書中到處に見ゆ。馬太傳二十三章の如きは、實に此の輩に對する大いなる彈劾なり。傳道せし邑々の悔改せざるに付て太く憤慨せしも見ゆ(馬太十一ノ二四、路加十ノ三十一、三十五)。彼は時としては失望までしたり。我れ此世を何に譬へんや、童子嚮に座し其の侶を呼びて、我等笛ふけども汝等踊らず哀みをすれども汝等胸打たすと云ふに似たり、そは「コバブテスマ」のヨハネ來りて食ふこと飲むことをせざれば鬼に憑かれたる者なりと人々言へり、人の子來りて食ふことをし飲むことをすれば、又食を嗜み酒を好む人、稅吏罪人の友なりといふと嘆せり(馬太十一ノ十九)。

敵は基督の一言一行を覗ひて一々非難を加へ訴訟の材とし、其の奇跡をさへ悪鬼の力を籍りてするものと誣ひ、而して肉親の母と兄弟さへ、人の噂を信じ彼を鬼に憑かれたる者ならんと思ひて、其様を實見せんと來りし時には、彼は實に人間の頼み甲斐なく、百千の説教も多くは無効に終るを感じ、有名なる播種の譬其他を語り出で、地面によりて折角の種子も或は失はれ或は枯れ或は實を結ばぬことを示し、又今は善惡混濁すれど其の中の善き者のみ天國に入れらるゝ事などを明にしたり(馬太十三ノ一五十三)。弟子等に付ても、噫信なき曲れる世なる哉、我れ何時まで汝等と偕に居らんや、我れ何時まで汝等を忍ばんやと嘆じ(馬太十七ノ十七)。神は晝夜祈る所の選びたる者を久しく忍ぶども終に救はざらんや、我れ汝等に告げん、神は速に彼等を救はん、然れど人の子來らんとし信を世に見んやとも言へり(路加十八ノ七、八)。彼には苦惱もなきに非ざりき。最後の夜十字架を明朝に控へし時には、流石に心悶え、橄欖山にて痛く悲み切に祈れり、其の汗は血の滴の如く地に落ちたり(路加二十二ノ四四)。曰く我父よ若しかなはば此の杯を我より離ち給へ、然れど我心のまゝを成さんとするに非ず、聖旨に任せ給へと(馬太二十六ノ三九、四二)。彼は固より深き意味の愛、神の愛を以て人を愛したれど、普通の愛を以て愛したる所

もあり。彼はペテロを愛しぬ。使徒ヨハネを愛しぬ。道を問ふ善良の青年をば愛でしげに打ち見やりたり(馬可十ノ一二)。彼は人の疾病不幸に同情したり。病を癒し、盲の視力を恢復させ、聾を聞えさせ、跛を歩ませ、死者を甦らせたり。彼は是等のことを以て人生に無差別なることせず、之を傷み、之を除き去りて、人々の状態を改良せんと勉めたり。不幸に同情するのみならず、不幸に同情して之を除かんとするは幸福に同情するなり。彼は人の幸福を欲したり。人の結婚をば祝せし記事は約翰傳のみに見ゆる所なれど(二ノ二)。自らを花婿に譬へたる所などは、之に關する喜びの心を示す(太九ノ一五)。其他人の幸福に對して之を咒ひ若くは冷視したる跡とてはなく、唯だ之が増進を計り、人と共に喜びしは明なり。従つて他人よりも同情を求めたり。最後の夜にはゲッセマネにて、自己の悲痛にかかはらず、弟子等の疲れて眠れるを見、ペテロにかく一時も我と偕に目を醒し居ること能はざるかと言へり(馬太二十六ノ四)。其前には一人の女が耶穌の食する時、來りて後より高價の香膏を其の首に注ぎしをば、己が葬のために行ひしものとして喜びたり(馬太二十六ノ六、十三)。

斯く基督の内部は全然人性にして、事々物々この人性が發揮せし次第なるが、外よ

り力を受くる方に於ても、彼は又人らしく受けたり。外部よりの感化、印象、感動は全く人のものなり。又是等に對する基督の知情意の發動もまた全く人間的なり。彼は郷國の方を感じぬ。彼は猶太人なり。猶太人ならではの有り得ぬものを有したり。若し猶太の歴史、國民性、觀念を基礎とするに非ざりしならば、彼の人格もなかりしなるべく、彼の宗教は生れざりしなるべし。嚴格なる唯一神の信仰、其の正義の徳、其の惠等は基督にはもはや先定の信仰なりき。之を希臘人印度人の觀念等に比すれば全く別種類なり。舊約宗教は彼の内部に遺傳して、宗教となり性格となり居たり。靈魂の不滅の如き、又は天の使の存在の如き信念さへ、時代の猶太教を承けて其の内に抱かれ居たり。唯だ舊約の觀念の枝葉や其の形式に囚はれず、直ちに其の實質に到り、其の現はせる根底の神に接せしが故に、宗教を殺す所の分子を保守せざりしなり。當時の希臘感化は受けし跡なし。然れども此れ消化せられざる希臘の要素が、時々其の宗教中に露はれ來りしこと見えざるの謂にて、時代に瀰れる希臘精神をば自然に呑みて、これをも包容して新意識を立て居れるは疑ふべからず。彼は父母より遺傳せる所もあり、感化を受けたる所もある如し。其の深く靜かなる性質は母にも負ひ、父にも負へ

るらしく見ゆ。彼は自然の感化をも受けしこと明なり。ガラヤ内地の風光は彼の性質思想の上に印象を興へたること深く、又家庭の幸福を味ひしことも濃なりしやうに見ゆ。

従つて彼は周圍のものに對して常に極めて自然なる觀察をなし極めて自然なる情操を懷きぬ。彼は自然界を樂み之に興味を有したり。空を舞ふ鳥、野を飾る花、野の狐、牢の羊、葡萄、無花果、朝紅、夕紅など、凡て其の心に觸れ其の情を動かしたり。彼は人類を呪はれたる者とも見ず、其の肉體を罪の座とも見ず、人生を火宅とも見ざりき。人生を厭ふ如き様少しも見えず、之に興味を抱き、其の萬端に同情し、尊敬したり。幼兒をば祝福して天國に居るは斯くの如き者ぞと言ひ、結婚をば祝福し、或は三斗の麵粉の中に醜種を投ずる女、白磨く女、家を掃除する寡婦、子に善き賜を興ふる父、放蕩子の歸參を迎ふる父、婚禮の行列を迎ふる童女などの家庭の行事其の譬の中に引かれ、種蒔き、刈り入れ、草取り、蓄へ、葡萄園の勞働などの農夫生活や、網打ち、魚選り、其他の漁夫生活や、迷ひし羊を尋ね、又は綿羊と山羊とを分つなどの牧畜生活や、眞珠の賣買等の商賈生活や、乃至は作戰計劃を回らす王者の生活など、有ら

ゆる人間の生活に興味を有したり。

故に他人に對しても極めて自然的にして又最も人情的なり。前にも言へる如く、彼は自ら至る所、人生の不幸悲慘に接するや、之を哀み之を憫み、及ぶ限り之を除いて人を幸福にせんと勉めたり。凡て人に對しては愛あり。舊形式に囚はれて、舊き慣例や思想に由りて、周圍の人の價を估もり、人を議し人を善視し惡視する時代の宗教家等と全く異り、其等の皮殻を披脱して直ちに周圍の人の人格を視、税吏や罪ある者に對しても平等に振る舞ひ、其の良心に訴へて神を示せり。バブテスマのヨハネなどに對して終りまで敬意を抱き、自ら之に優れる者なりと意識しつゝ而もヨハネを推稱したり。父母に對しては子たるの情を棄てず、生き残れる母をば常にいたはりしことは福音書に見え、兄弟とも友愛ありしことは、其の死後兄弟の一人ヤコブが熱心なる使徒となり、信徒の團體を司りしに見て知るべし。彼は時代の宗教家が神殿に於ける一片の儀式を守らんとして父母を飢餓に委して顧みざる如き行爲を非認したり。羅馬皇帝に對しても不平を唱へ、叛亂をすゝめし如き形跡とてはなく、却つてカイザルのものはカイザルに歸し、神のものは神に歸せなど言へり。猶太の宗教的古律法をも破壊し去ら

んとはせず、祭司等に對して反抗の態度をも取らず、却て古律法を完成せんために來れりと言ひ、祖先モーセやアブラハム其他に付ては、常に謹みて其の遺訓遺風に説き及ぼし、猶太教を維持するための人頭税をも甘んじて納めたり。凡て彼は人に對して自然にして正則にして、少しも不自然變則の所なかりき。

基督の人と爲を見るに、何所までも天真流露にして、自ら毫も性を矯め情を枉げたる跡なく、又何物にも制せられ囚はれて、其の自然を妨げられし跡なし。其の自ら生活せし所、其の教へし所みな然り。凡て宗教家としいへば、靈の生活を重んずるの餘り、人性の自然的方面を閑却し、若くは之を藐視し、若くは之を虐待し、終に習ひ性となりて、自ら矯め枉りたる人格となるが常なり。印度の宗教家は婆羅門教徒も佛教徒も著しく之に傾けるは何人も知る所也。彼等は到底普通の人に非ず、人性の一面を毀傷し埋没し去りたる人にして、人間普通の性格を具へ生活を營む間は、到底嚴密なる婆羅門たり比丘たること能はざるなり。希臘の主義また然り。彼等は何れの學派も『自然に従へ』といふ如きことを警句とせしも、然も靈を重んずる徒は事實に於て自然を失ひ、ストイコスの徒の如きは、肉を苦め之を抑ふるを其の努力の目的とし、一種の

苦行者となり終りしなり。猶太に於ても基督の時代のエッセネ派はまた苦行者なりき。彼等は全く世間より退隱し、質素なる生活をなし、聖清といふことを極力追ひ求め、結婚せず肉食せず、淨不淨物を嚴別して、一切不淨に觸れざらんとしたり。基督と同時に現はれ基督を世に紹介したる『バブラスマ』のヨハネすら、猶太の曠野に住み、身には駱駝の毛にて織れる粗服を着け、柔さぬ革の帯を束ね、蝗と野蜜を常食として道を説きたり。此等非尋常の性格生活が即ち特に神に交はれる人々の特徴なりと信せられしなり。此れ高尚にして靈を重んずる宗教家には殆ど皆免れざる偏見なり。若し此の偏見なきものは、大抵聖潔の觀念なく、野獸の如く直情徑行して、之を神ながらの道など稱する者なり。然るに耶穌基督に於ては、其の精神の高潔無比なるにも拘はらず、他面に決して此の弊なく、彼は普通人の如く生活し、『食を好み酒を嗜む者』といふ誹をまで受けつゝ、此の普通人生活の裡に其の高潔なる理想を實現して少しも差支を見ざりしなり。耶穌を以てエッセネの徒となせし如きは、盲學者の妄斷たりしなり。勿論耶穌の教訓中には『若し汝の右の目汝を礙かさば切りて之を棄てよ』などいふ句あり。此は精神を以て肉體を支配すべきを教へたるものにて、決して斷滅主義に

はあらず、此は後に至て論すべし。總して耶穌は自然の發達を重んじ、矯枉作爲を斥け、自ら然か生活したり。

然かのみならず、基督は凡ての因習先入見乃至境遇等より自由にして、人性を有りのまゝに發揮し、天地人生を有のまゝに見たり。彼は人として周圍の力に對し感受を有せしは前に言ひし如きも、之がために囚はれて自然を傷る如きことなかりき。彼の行動言説に何所に國民的時代的或は個性的偏見偏行ありや。彼の生活の萬端は確に世界的なり。之を何所に行ひ何時行ひても差支へなきなり。此れ驚くべきことなり。若し彼が何等か囚はれ居たらんには斯かる普遍的性質はあるべからず。彼は人性てふものを最も自然に發揮したり。若しルッソーの『エミール』の主張が行はれ得べきものとすも、耶穌基督は既に其の先型たるものなり。試に之を他の宗教家と比べ見よ。基督の如く因習や偏見より全然脱出せるもの何所に在るか。釋迦も獨創の宗教を立てたる人なり。されど其の神觀人生觀は印度在來の思想に囚はれ居れり。之より全く超脱し居らざる也。マホメットも大人格なり。されど其の宗教は舊約の文字に囚へられ、又亞刺比亞人の性格に囚へられ、世界の一局部にのみ行はるべきものたり。『バブラスマ』の

ヨハネも大いなる預言者たりしが、同じく舊約の窩中より脱し居らず。否基督の弟子等を見てさへ尙囚はれたる所あり。パウロの如き偉大なる人物も、基督の精神を既に猶太人的に解釋せる所少からず、其の宗教はもはや基督の宗教の純白なるに比して幾分の色彩を帶ぶ、彼の宗教説明には希伯來の神學豊富なり。約翰傳及び約翰文書に至れば、又他の色彩鮮なり。即ち希臘化猶太人の心意に解せられたる基督の宗教なり。然るに耶穌基督自身は何物よりも超脱せり。パリサイやサドカイやエッセネなどに由て囚はれず、其の言その行其の想、彼等の轡内に入らず、又希臘や羅馬の型にも拄げられず、唯だ神が當時の世界に獨立せる人格を置きしかの如く、極めて自然自由に「人」を發揮したり。

歴史に存在せし基督も自然の人、萬世に仰がる、基督も人性の人なるが故に、基督教に於ては常に人性の自然の發展を尊びたり。基督教會の初代は時代といひ基督信徒自身といひ、甚だ不遇の中に在りたり。初の基督信徒は猶太教徒に迫害せられたり。其の壓迫は随分激烈なりしなり。次で基督教は羅馬政府の彈壓を受けたり。瀕々たる迫害は基督教を根滅せずして已まぬ勢なりき。基督信徒は此の間を忍び、此の間を切

り抜けたり。故に世末的思想、即ち世の終末來りて、天よりの力に由て世界顛覆し、壓ふる者亡ばされて基督信徒は神の賞を受くといふ希望と信仰とは、其の宗教中に混入せざるを得ざりき。基督教が羅馬人の間に行はるゝに至りし時には、羅馬の盛時は既に絶頂を過ぎて、廢頽の風塵々として見え、道德や信念は衰へ果て、人々は厭世の勢に襲はれ居たり。故に基督教も其の脱離遁世の方面を歓迎せらるゝ傾ありき。事情かくの如かりしにも拘はらず、基督教は常に積極的の方面を發揮し、人性自然の開發をなしつゝ進みたり。此れ基督教徒の描ける基督の姿が鮮に自然の人なるが故に、此の自然の人基督が基督信徒の精神を支配し支導せしが故なり。初より基督を自然以外に脱離したる人格とし、基督教を空想とし、基督教を出世間の觀念とせんとしたる運動は強くして、基督教徒は猛烈に之と闘ひ來りしなり。提摩太書は果してパウロの著作なるや疑はし。但し基督教會早き時代の産物たるは明なるが、此の提摩太前書四章一節以下には、「然れども靈明にいふ、後に至らば或人信仰の道より離れて人を惑はす靈と惡鬼の教に心を寄せん、善を假りて謊を言ひ、良心を烙かれ、娶ることを禁じ、食を斷つ事を命ずる者に誘はるゝに由りてなり」とあるは、即ち初代の教會に滲入せ

し禁欲主義漸滅主義に對する警戒なり。第二世紀半までのグノシス派（知識徒）の多くは盛んに基督の肉體の實在せず、唯だ假相化現にすぎざるを主張せしが、之に對しては教會の師父等最も強く福音書の事實の正確なることを力説して、彼等の説の妄なるを論じ、二世紀後半に於てイレナヨス、テルツリアヌス、アレキサンデリアのクレメンス、イッポルトス等猛烈にグノシス派を攻撃し、終に彼等を教會史上より撲滅したりたり。第四世紀に至りアントニオスの如き者現はれ、家産の累より脱し、肉親の絆より離れ、全く退隱の生活をなし、茲に僧庵主義なるもの始まり、恰も人心の倦怠と道德の頹廢とに對する者として尊ばれ、其より僧庵は到る所に建てられ、出家僧また甚だ多くなりしが、然も此れ宗教には必ず伴ふべき事にして、基督教も其の主義を一方にのみ敷衍し行かば斯くならざるを得ざりし故なり。然れども此れ決して基督教の健全なる發展に非ざりき。斯かる主義が初代の元氣發洩たる時に起らず、基督教が漸く時代を経て、其の活力減じ、形式に流るゝに至りし頃、此の主義も首を擡ぐるに至りしに徴しても之を知るべし。故にルーテルの如きは宗教改革の一條として此の僧庵主義を打破し、自ら又吾人は日常生活の中に神に事へざるべからずと言ひたり。され

ば基督教の主義は世を離れ人を超脱し、自然を失ひたる基督の人格を再現することに非ず、實に自然の人たる基督を再現するなり。パウンの『基督教研究』(Borden P. Bowen, *Studies in Christianity*)の中に、米國にて或る外國宣教に關する會合の時、未開國に宣教せし一人起ち上り、余は神の召を感せしかば、余が妻を郷國に残し、愛着の情を棄てて宣教に向ひたりと誇り顔に語り出でけるを、席に在りし一名士次で起て非難し、此れ實に人情に逆ひ殘酷のことなり、斯かる事は神の旨にあるまじきなりと論じたりとて、パウンも之を誤れる宗教として戒め居れる所あり。杓子定規に斯かる種類の事を悉く基督教の精神に合はずとするは謹み控ふべきことなれども、確に斯かる方面に誤りの傾向あるは明にて、基督の人格は決して人間自然の性に戻るものに非ず。吾人は自然の人基督を發揮せざるべからず。基督教はたとひ長く其の正統の發展を任せられしことありとするも、其の正道は實に此の最も高尚なる意味の自然主義たるや論なきなり。

乙、靈の人耶穌 以上論ずる所の如しと雖も、然も自然は靈に支配せられざるべからず。此れ人間の特色なり。人もし自然界の一部として生じ、唯だ自然の力に支配せら

れ、自然の要求のみを有し、自動的に自動器械として活動するのみならば、人の人たる所以は更にあることなし。否もし之が人の真面目ならば人は特別に他の動物と異りたる所なしとしても亦已むを得ざれども人の真面目は其の自然界より脱出し却つて之を支配せる靈ある所に在り。動物は其の身體の自然に内含せる衝動に由て動く、故に其の要求は全く自然にして、之を達するも亦自然なり。然れども人には善も惡も自然以上のもあり。或學者等は人類は動物中の最も貪食なるもの、又最も多慾なるものなり、動物には肉食動物とか菜食動物とかの別ありて、或種の食物のみを選び、更に進みては肉食しても或種の肉のみを選ぶ性あり、例へば肉食の猛獸は動物を食へども、若し弱き菜食動物と肉食動物と共に在るを見れば必ず菜食動物の方を食ふ、獅子の如きは人と馬と共に在るを見るときは、馬を食ひて人を食はずといふ風なり、然るに人類は如何なる飲食をも欲して之を取捨するとなし、其他の慾にも動物には何等かの制限あれど、人は殆ど無限なりと言へり。之を以て見れば人は最も多慾にして最も醜劣なるものなるが如し。此れ然しながら人の動物よりも優れたる所なり。此れ人に靈ありて自然を支配するが故なり。自然の要求は其の性に應じて限りあるを、人は靈を以

て飽かぬ慾を有するに至り、飲みてもく、尙渴き、食ひてもく、尙飢を感じ、終に何物をも飲食するに至りしなり。故に或は物慾といひ、或は肉慾といひ、或は禽獸の慾といひ、人の劣等の慾情を自然的の發作に歸すといへども、實は自然的には人は其ほど多慾ならず、飢ゆる者は滿つる程食へば足り、渴く者は滿つるほど飲めば足る。自然の要求は其にて滿たさるゝなり。然るに之にて満足せず、限りなく求めて限りなく之を達し、身體其物を破壊するに及ぶは、此れ其の因たるもの自然の要求に非ずして靈の作用なるが故なり。ブッシュネルは曾て此事を面白く説明したることあり (H. Bushnell, Sermons for the New Life)。故にかゝる慾情の源頭は自然の要求より發すと雖も、此れ自然の要求のために靈が捕へられ、自ら自然以上の慾情を發するものにて、此れ即ち靈が自然のために征服せられたるなり。低き方面に於て斯くの如し。之と反對に高き方面にも靈は大いに自然を支配す。伯夷叔齊は義周の粟を食はずとて首陽山に餓死したり。孔子は渴しても盜泉の水を飲まざりき。此れ靈が自然を征服したるものなり。吾人の肉體は吾人の内心にて善と信する目的のために使用す。此れ靈が自然を支配するものに非ずや。更に吾人の周圍の自然界に對しても、唯だ之を自然に放棄すれ

ば何億萬年を経ることも變化も起らず、勢力は無益に其の形を變ずるのみなるを、靈の力を以て之を使用し之に變化を與へ、全く自然的には起り得べからざる事をも起す。みな靈の自然を支配する事實の例なり。確に人の靈は自然以上に在り、自然を支配す。之あるが人の特色なり。是あるが故に人は動物と異りて文明を造り、其の生活をして向上進歩せしむ。人ならば之なかるべからず。此の靈の自然支配が最も圓滿完全なるものが即ち最も圓滿完全なる人格なり。

然るに人に於ては靈と自然とは直ちに衝突するを意識せらる。己れに靈ありてふ自覺のなき間は、此の衝突の意識また決して起らざるなり。然れども物の以上に靈あり、自己には物質たり自然たる肉體の衝動より以上に、靈より出立せる所の意志あり、其の目的を達せんと欲するに、物質たる肉體の在るがため之を達する能はず、所謂高根の櫻、雲井の月、捉へんと欲すれども空しく手を伸ばすのみなるを感ずるとき、茲に靈と自然とは相適應せず、互に相衝突するを思ひ付かざるを得ず。其のみならず、肉體には要求あり、渴して水を欲するとき、飢えて食を欲するとき、我が靈は其の食のふべからず、其の水の飲むべからざる物なるを叫べども、肉體より來る猛烈なる要求に

聽きて、終に靈の底より出づる叫びを押へて飲食することあり。此れ即ち靈と自然との衝突にして、自然は靈を壓倒し去りたるなり。否靈が自然の要求の猛烈なるため、自ら自然の力の器械となりしなり。靈さへ終まで聽かず、却つて自然を使用すれば、其の自由は何所までも存するに、靈が自ら選んで自然の要求する所を自ら行ひしなり。斯くの如き衝突あるが故に、人は苦痛と煩悶とを起し、何所かに此の衝突の起らざる地を求めんとし、或は此の衝突を和げんとす。眞に之が衝突し居ては、人は常に平和ならず、又何事をも心を集中して決行する能はざるなり。茲を以て一方には全く靈を忘却し去らんとする者あり。自ら靈なきものとし、唯だ自然界に屬する一片とし、自然の勢力の導くまゝ、其の流に委せて、敢て自ら其の中より自覺の首を擡げざらんとするものなり。近頃の所謂耽溺の生活とは此の事ならん。然り人は靈の方の縁の糸を切りて、全く靈を葬り去り、自然の中に溺れ了らば、何の苦痛もなき理なり。然れど此れ人間の人間たる所を放擲したるものにて、唯だ自然の力にて生活し、自己の住籍を全く自然界の中にのみ置かば、此れ動物界に下りたる者にて、折角人類まで進化せる者が、幾段後に戻りたるなり。之に反して靈と自然との衝突を絶たんとて、全く靈

のみにて生きんとし、肉體を及ぶ限り壓抑せんとする者あり。彼等は凡て肉體の要求を容れず、凡て之に従ふを恥づべき事、惡なること、なし、唯だ生命を維持するといふために必要なもの、外、一切を拒否して最も尊き生活を送ると意識したり。彼等の多くは自己の肉體を壓抑し虐待し、其の精力を亡ぼすは、即ち自然の慾の根を壓感する所以にて、肉に對して靈が勝利を占むるものなりと思惟し、盛に之を實行したり。かくして自然と靈の衝突を無くすることは不可能なり。古來斯くの如き苦行者は肉體を壓抑すること愈よ強くして、肉體の慾情の反動いよく激しきを経験し、更に極端なる自己虐待に到りて尙満足せざるが常なれども、然も或は肉體を壓抑し、唯だ靈のみにて生くることを得ることもありせば、此れ又靈と自然の衝突を無くするもの一途たるや勿論なり。然れども此れ亦人間たることを失ひたるものなり。神は人を自然界の中より造りたり。人は自然界より立ち上り居れど、尙自然界より全く足を離して靈界のみを翱翔し居らざるなり。茲に人生の眞面目あり。されば強て自然界との縁を自ら絶たんとするは、即ち作爲的なり不自然なり、其の人性は虚偽か少くとも不具なり。人は現世に於ては肉體をも認め、其の性に率はざるべからず。

然らば肉をも其の有る如く維持し、靈をば勿論保存して、人は終りまで靈と自然との衝突に悩まざるを得ざるか。否、兩者は衝突すといへども、此の衝突こそ兩者の關係の變則状態にして、靈と自然とは本來調和せるものなり。靈は決して自然に逆つて現はれしものに非ず。唯だ自然より超脱せるのみ。自然も神の造れるものにして、靈も神の造れるものなり。根本は一なり。自然は其の性を十分發揮しつゝ、而して靈に支配せられ得べく、靈は自然を蹂躪せずして之を導きつゝ、而して自己の最高性を發揮すべき也。飲食其他の要求は、肉體の維持上必ず生すべき事なり。此の要求を充たしたる時、其所に快感のあるは自然のことなり。故に此等は達しても毫も差支へあるものに非ず。然れども人が自然に率ふは決して盲目的に自然に牽かれ、自然の裡に吞まれて行ふに非ず、醒めて自己の意志を以て行ふなり。故に醒めて食ひ醒めて飲み、靈性を害せざるべきなり。必ずしも食はず飲まざるを要せず。茲に調和行はる。抑も靈性は嚴然として存在し、常に其の活動をなす。靈性を麻痺せしめざれば行ふべからざることや、行はば靈性の活動を壓迫萎微せしむることや、凡て其等をなすべからず。靈性の活動とは宗教、道德、思索、研究、美感等となりて現はるゝものなり。之と兩立する範圍に於て

自然に従ふべし。元來動物の行動と雖も必ず何等かの制限を受く。彼等は自然以上のものならぬ故自然の制限を受く。例へば食を求めても其の飢ゑを飽かすまで求め、其以上に至るときは欲情の止むを普通とす。然るに人は靈性ありて、斯かる自然の制限を超越し、腹に満ちても尙求むるものなるが故に、茲には靈の制限あり。否靈にて自ら制限せざるべからざることゝなれり。従つて時としては自然には要求することにも、靈のために許さぬことあれば、之を抑へて遂げざることあり。勿論これ稀有の場合にして、自然を無視するに非ざれども止むを得ざることなり。動物にても要求を有しつゝ習慣又は恐怖等に由て之を遂げぬ場合あるに比すべし。唯だ其の行動の價値に於て雲泥の差あるのみ。自然を認めつゝ、斯くの如き態度に出づるものなるが故に、斯くの如き態度は決して自然の虐待に非ざるなり。靈性の活動如何に盛にしても、自然が壓迫せられ、其の用を失ふ如きことは決して之あらざるなり。

自然をして其の用を保たしめつゝ、靈性の活動を盛にす、此れ即ち大人物なり。自然より來る必然の要求に聽きて人の爲すまじきことを爲し、或は自然より來る要求を満足する時の快感に酔ひて、自然の要求もせぬことをまで自ら追ひ求め、耽溺の生活に陥

る如きは、勿論自然のために靈を壓蹙したるものにして最小の人物なり。之と共に自然を徒らに壓迫し、其の必然の要求をまで全く斥け、茲に靈の安全と繁榮とを見出ださんとする如き者も、極めて變則の人物なり、之を大人物とすべからず。普通人の生活をなしつゝ、而して靈性の大を發揮す、即ち神に十分に事へ、人を十分に愛し、或は自然を十分に研究使用する、此れ即ち大人物に非ずや。此の兩面は決して根本より衝突せるものに非ざれば、斯かる調和中正の生活は、必ず實現し得らるべきなり。

さて耶穌基督の人格を見るに、彼は確に自然的人なること上述の如くして、而して、其の自然は靈の統治の下にありて、自然と靈とは彼に於て全然調和せり。彼は肉體を罪の本座ともせず、人間普通の生活を迷妄ともせず、宇宙を夢幻とも觀せず、自然を現實とし之を是認したると共に、又一點自然に溺れ若くは自然に蔽はれたる所なく、其の靈は自然より超越し、自然を支配したり。此れ彼が一面に釋迦などと異り、他面にマホメットなどと異なる所なり。大いなる人物は偏し易き者なり。彼等は其の偏したる所に由て大事をなし、之がために大人物となる。世の事業に成功するものは概して意力強く、而して物質の要素充溢せる者なり。精神的の方面に優るゝ者は蟲も殺

さぬ軟なる質の者にて、此世には影の如く幽靈の如き生活をなす。然るに基督を見れば靈的と自然的の生活眞によく平衡し、何所にも其の癖を見る能はざるなり。

唯だ靈と自然とが彼に於て均衡調和せるのみにはあらず。若し單に均衡調和せるのみならば、或は凡人にも之を見出だすを得ん。然り凡人は凡ての點が小さく調和せる者の謂なり。天秤の兩盤に一々づゝの物を置きても均衡す。然れども大人物の調和均衡は斯かる種類のものなるべからず。一方に無限の重量ありて、他方にも之と均衡する重量ある、是れ大人物の均衡なり。耶穌は自然を保ちつゝ、而して其の靈性の面目を最高點まで發揮したり。然り耶穌に於て人間の靈性は春の花の如く咲き出でたるを見る。他の者にはまごろみて醒め出でざる者、或は單に芽として存するもの、或は全く折れ挫け居れるもの、耶穌に於て圓滿に發現せり。何人か耶穌より以上に其の靈的生命を展開したる人ありや。耶穌が神人を一に結び、世界を新にし、人類に無比なる功を献じたる所以、其の大人格たる所以は、言ふまでもなく其の靈的の性によるなり。

靈的生命の最高發現たる宗教に付て耶穌を見るに、其の崇高完全なるは世界無比なり。此は他の所にて論じあれば詳叙を要せず。今日に至るまで耶穌の宗教より以上の

ものを教へ又は實現したる人あることなし、基督信者ならぬ學者と雖、既成宗教の中にては基督教は最も高く進化せるものなることを謂へり。耶穌は神の天父なるを觀たり。天父の愛を其の靈に飽くまで味ひたり。彼の内なる自然的の要素は此の靈眼を翳かぶませず、此の雨露よりも豊に柔かなる天父の愛を遮さりて彼の感覺を害せざりき。彼は天父に事へたり。其の全生を天父の旨を成すため、天父の國を立つるために献けんげたり。天父の心のある所には何所にも趨きたり。直ちに起て趨きたり、或は自己の慾或は肉親の情など、彼の自然的の方面は、彼の此の意志を妨げ、或は之を抑へ、或は之を在らぬ方へ導き行く如きこと絶えてこれ無かりき。彼は死に至るまで柔順にして、決心して十字架にかゝりたり。神に對する人の生活は茲に其の精華を放つて燦然たるなり。(後の諸章を見よ。)

次に道德の方面を見よ。之も耶穌の後、耶穌より以上の道德を教へ又實現したる者なきならずや。彼は人と人との關係は一に愛を以て解決すべきものなるを看破し、之を道德の鍵、其の中心、其の生命として人に教へ、自らは教ふるよりも以上に之を實行したり。耶穌の道德は決して人類社會の進歩中自然に發生したる習慣の自覺及び組

織に非ず。之を基礎とはし居らんも、之より超脱し、其の靈を用ひて理想したるものにして、實に人類を新にし、社會を創造する力あるものたりしなり。自然的の方面は、彼が此の眞理を知識することも、又之を實現することも、少しも妨阻せざりしなり。彼と雖も自然の意識あれば主我心も起り得べからざるに非ず、肉體の快樂を味ふの情も起り得べからざるに非ず、或は民族思想に捕へらるゝ危険なかりしに非ず。然れども彼は凡て此等の絆しを脱出し、自由に其靈を活動させて、人を愛せよ、互に愛せよ、敵をも愛せよと教へ、又行ひたり。

耶穌に於ては科學なく哲學なかりし故に、其の人格は完全ならずとは、近代に至りて極端なる批評學者の言ふ所なりき。然り耶穌には科學哲學なかりき。然れども此等の有無は人格の大小を別たす。科學を知らず哲學を説かざりしとて靈の生命の發現が不完全なりしとすべからず。當時は科學なかりき、然れども科學なしとしても科學あらば之を知り得るの力あらば人物は大なり。又耶穌の周圍には哲學を要せざりき。アレキサンドリア邊にては哲學を要したらんも、然も時代の低き思索力に理會せられ、之を満足させるほどの哲學ならんには、何の尊きことあるべからず、之を説かざるの優

れるに若かず、之を説いて、宗教を哲學に包むは、即ち宗教を一代のものとなし終り、其の哲學系統の廢ると共に、其の宗教の死する禍因を置く所以なり。フィロの哲學などは其の好適例なり。耶穌は科學を知らず哲學を説かざりしも耶穌は智慧に於て絶大なりき。神の天父なるを教へ、人の一人の無限に尊きを教へ、愛を教へ、又之を凡て行ひたる耶穌は眞に智慧の至れるものならずや。既に智慧あり、此れ靈の最も高く活動せるものなり。元來科學とは何ぞや、哲學とは何ぞや。科學とは自然界諸方面の眞相を究むることなり、哲學は此の研究の結果を綜合して宇宙の統一を見出だすことなり。昔は科學は哲學に含まれたり。而して哲學の「フィロソフィー」なる語は、フィロソフία即ち愛するといふ語と、ソフィア σοφία即ち智慧なる語との結合に非ずや。種種困難なる研究知識を積み、種々複雑なる思索をなすは、即ち智慧を求めてなり。如何に苦勞慘憺として知識を得思索をなすとも、終に智慧を得ず、却つて不眞の結論に達するならば、其の哲學は目的を得ざりしなり。之に反して知識は然かく該博ならず思索は然かく多勞ならずとも、其等の結果達し得べき智慧に達するの能力あらば、其人は靈的に偉大なるものなり。靈の大いに活動せる人なり。耶穌の時代には今日の如く

多くの書籍も存せず、世界の交通も盛ならず、科學も發達し居らず、耶穌に向つては今日の博士に望むが如き知識を望むべからず、又哲學者に求むる如き大思索を求むべからず。唯だ其の智慧如何を見るべきのみ。然るに彼は其の弟子をして、凡て智慧と知識の蓄積は一切基督の中に藏れあるなりと言はしめ(哥羅西書 六二ノ三)。又十字架の死の如き、一見愚人の受くべき末路なるかの如きものに付ても、夫れ十字架の教は亡ぶる者には愚なるもの、我等救はるゝ者には神の力たるなりと言へり(哥林多前書 一ノ十八)。基督も多くの者に代りて贖とならんため、此の前途の大なる世界を望みつゝ、自覺して十字架につきしなり(馬太傳二 十ノ二八)。耶穌の人格もし智慧の貯藏ならざりしならんには、其の宗教や道徳は、幾程もなく通用力を失ひて、天地間に化石すべかりしを、彼は天地の最眞を取し、之を捉ふるの智慧を有せしため、其の宗教も道徳も永遠的普遍的として留まれり。されば耶穌は哲學を説かざりしも、哲學者の求むる智慧を圓滿に有したり。之を以て考ふれば、基督もし哲學の盛なる所に生れ、哲學を以てせざれば人を救ふ能はざることを観、又哲學を以て宗教の桎梏とならざるものと惟ひたらんには、彼は必ずや圓滿なる哲學系統を立てしならん。勿論詭辯者流の如き峩々たる議論の樓閣を築くに於て如

何ほどの偉才を現はすやは不明なりと雖も、必ず最も難の少き、萬代に通用する哲學を立てたるや明なり。斯く彼は根本的のみに於て智慧に秀でしを以て、細末の點にも其の智慧の流露せる節少からず。例へば敵對者どもが彼を言の尻に陥れんとして、租税を羅馬皇帝に納むるは善きや惡きやと問ひし時には、彼は直ちに己れ若し善しと言はし、彼等は猶太宗教の律法を引き出だし、之に背くものとして人民の前に罪せんとし、若し惡しといはし羅馬皇帝に反する者とし有司に訴へんと謀れるなるを看破し、時の通貨を取り出ださせ、之に刻せる像を指して、此れ誰ぞやと問ひ、彼等が羅馬皇帝なりと答ふるや、羅馬皇帝の物をば羅馬皇帝に歸し、神の物をば神に歸せよと言ひ、敵をして口を塞がしめしが如き(馬太傳二三ノ一五―二三)。不品行をなし現場にて捕へられし女を引き來りて、斯かる者をモーセ律法にては石にて打ち殺すべしと命じあるが汝は如何に思ふかと問ひ、耶穌もし打ち殺せといはし直ちに羅馬官吏に訴へ、若し殺すべからずと言はし、古法を破る者として人民に誣んと謀りし者どもに對しては、彼は汝等の内罪なき者先づ石にて打つべしと言て、地に屈みて物劃き成行を傍觀せり。敵對者の良心に咎められて一人々去り行きしを見て、我も汝の罪を定めず、往きて再び罪を犯す勿

れと言て女を去らせたる如き(此は約翰傳第八章の記事なれど多くの學者は約翰傳よりは原始的のものにて寧ろ馬可傳などの一部に相應すと言へり)或は復活を信せざるサドカイ黨の者來りて、七人の兄弟一人く死に行きしを、一人の女古法に従つて順次之が妻となり居しといふ時は、此の女天國にては誰の妻たるべきやと問ひし時には、天國は娶らず嫁がす天の使の如し、死し者の甦る事に付ては、神の言に我はアブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりとあるを未だ讀まざるか、抑も神は死にし者の神に非ず生ける者の神なりと、敵對者の寶典とせる舊約書を引きて答へしが如き(馬太傳二三三)更に他派の敵對者が入り代りて、師よ律法の中何れの誠か大なると問ひし時には、汝心を盡し精神を盡し意を盡し主なる汝の神を愛すべし、これ第一にして大なる誠なり、第二も亦之に同じ、己の如く汝の隣を愛すべし、凡の律法と預言者は此の二の誠に因れりと答へしが如き(馬太傳二三三)最後にエルサレムに入りし時、群衆が路に衣を布き、棕櫚の葉を打ち振り、ホザナよホザナよと連呼するや、或バリサイ黨の人之を不虔とし、師よ汝の弟子を戒めよと言ふには答へて、我汝等に告げん此の輩黙りなば石叫ぶべしと言ひ(路加傳十九、三十七、四十)安息日に病人を癒せしとて答むる者に對しては、

汝等の中に唯だ一匹の羊を有する者あらんに、若し其の羊安息日に坑に陥らば之を取り上げざるか、人は羊より優ること幾何ぞやと言ひ、又弟子等が安息日に麥の畑の傍を過ぎ其の穂を取り揉みて食ひしとて、此はモーセ律法の中の安息日に穀物をこなすを禁する法を犯すなりと責められし時には、昔の王ダビデが飢ゑし時安息日に古法の禁じある食物を食ひし例あるを以て答へ(馬太十二一、十四)バプテスマのヨハネが使を遣はして『メシア』は汝なるか我等他に待つべきかと問はせし時には、盲者は見つゝあり、跛者は歩みつゝあり、凡そ我がために躓かざる者は福なりと答へ(馬太傳十二一、十六)税吏や罪人と交はれりて非難せられし時には直ちに、善き牧羊者や貧しき寡婦の譬を語りて、一人の罪ある者悔い改めなば天に於て歡喜あらんと言ひ、又放蕩子歸參の譬を語り(路加傳十五)其他弟子等の中何れか大なる者ぞといふ争あれば、嬰兒を呼びて中に立たせ、天國に於て大なる者は斯くの如きものなりと言ひ(路加傳九、四六、四八)ペテロが主よ幾回まで人の罪を赦すべきかと問ひし時には、千萬金の負債を免されし者が、己に銀一百の負債あるものに苛酷の請求をなし、之を獄に下せるにより、先の債權者怒てまた債主を獄に下せり、他の罪を赦さずば神も汝の罪を赦さじと教へし如き(馬太傳十八、三三)其他あら

ゆる場合に機智縦横、聊も停滯する所なし。空飛ぶ鳥、野に咲く花、其の目に入るや否や、教訓の材料となり、種子蒔く農夫、網打つ漁夫、悉く譬喩等に收めらる。彼は正直なり、されど愚ならず。彼は柔和なり、されど懦弱ならず。生活の節々みな智慧を現はす。彼は其の弟子等の傳道行を送りて、蛇の如く賢く、鴿の如く柔和なれど教へしが(馬太傳十ノ十六)、自ら實に其を實現したり。彼は敵にも陥れられざりしと共に、味方のためにも誤られざりき。彼を執へて王とせんとせしを避けしは約翰傳の記事なれど、他の福音書にても彼は時代人民の誤れる『メシア』觀を以て見られんことを恐れ、決して彼等に自らを許さざりき。病を癒すときには之を人に告ぐるなかれと命じたり。弟子を教ふるには擒縦抑揚宜しきに適ひて之を啓發し、其の内の神的性質を誘掖したり。耶穌の跡に愚かしき點何所にありや。福音書記者と雖も人なり。如何に耶穌を完全の姿に描かんとしたりとて、其の行爲言説を叙する上は、何所にか愚の點も現はるべきに、其の之なきは事實かく言ふべき節の存せざりしものと見るべからずや。吾人は茲に於て耶穌の内に智慧の充實したるを信ず。即ち耶穌は靈的生命の咲き出でし花たる智慧に於て、其の圓滿境を發揮せしを思ふなり。

美を感じる能力も耶穌に於ては十分に發達し居たるべし。前にも言へる如く彼は自然に付て深き興味を有し、其の美を愛し、空の鳥、野の花、其他自然界の現象や事物に思想を刺激せられ、全く之を美的に見、淺薄なる宗教者の屢々なすが如く、牽強附會して教訓の材料とせし如き跡なし。彼は又人生の美を感じ、屢々之に動かされたることも前に言へる如し。彼の教訓は一面には詩の如く畫の如く、如何に彼の心の柔かとして發展の前途を有すと見るべきなり。即ち彼の中には文藝の方に大いに發展すべき能力を含みしと見るべきなり。固より斯かる點を強く論ずべきに非ず。耶穌文藝の方面に活動せば如何ほどの大家となるべかりしか。其は全然不明のことに屬す。唯だ彼は此の方面にも無能力に非ず、發展の強き芽を有せしことは十分に信すべき理由あるなり。兎にも角にも此等は凡て思想に屬することなり。文藝といひ哲學といひ思想なり。故に思想の能力の最も秀でたるものは、特に哲學とか文藝とかいふ殊別の方面に如何程の能力あるかを詳知すること能はずとて、正に大人物たるに一點の缺如せる所なしと謂ふべし。されば耶穌は思想の力の偉大なるものとして、此の方面にも

靈の活動の最も高き人格なりしを見るなり。

斯く耶穌の人格に於ては靈の生命溢るゝほど充溢して、諸の靈なる花を咲かせ居れり。故に彼の教訓も其の生活も徹頭徹尾靈的なり。其の自然は全く靈に由て導かれ居れり。彼の觀じ彼の經驗せし神は全く靈なり。其の愛は靈的の愛なり。神の國は決して地上の國に非ず、全く靈的のものなり。神の國に入るには國籍の變更も、僧侶も、儀式も、教會堂も要なし、唯だ靈を轉換し悔い改めて天父に信賴すれば可なり。神に事ふるには靈を以て事ふれば可なり。人を愛するの愛も神の心を以て愛すべきなり。此れ耶穌の教なり。試に馬太傳五章より七章に記されたる所謂山上の垂訓に就て見よ。其の劈頭の八福の教に於ても、其の福なるものは世の幸福の謂に非ずして、祝福即ち希臘古典語の神々の有する福の意なり。其より以下、或は古律法と自己との關係を説きては、自己は古律法を廢棄するものに非ず、却て其の目的を成就する者なりと言て、律法は表面の形式を行ふべきものに非ずして其の精神を行ふべきもの、例へば神へ禮物を供ふる前に他人との怨恨を去り置くべし、形の上に姦淫罪を犯さずとも、心に一定の女に對し色情を起す者は、同じく靈なる神の前に罪人なるを教へたる如

き、施濟、祈禱、斷食をなすに、唯だ外形を守り、他人に見えんことを求むるは益なく、精神を以て之を行ひ、隠れたるに在す天の父の前にてなすべしと教へたる如き、又は人生の第一義は神の國と神の義とを求むるに在り、決して衣食の事を思ひ煩ひて、之がために心を奪はるべからず、財を蓄ふるには蝨くひ鏹くさり盜穿ちて盜む所の地上にせず、斯かる事なき天に於てすべしと教へたるが如き、(馬太傳六ノ) 穀物の豊作を喜び、倉を建て、其にて安心歡樂せんとする者に、神は枕頭に現はれて無知なる者よ今宵汝の靈魂取らるゝ事あるべし、然らば汝の備へし物は誰が有となるやと言ひしと譬へしが如き(路加十二ノ) 弟子等を獎まして傳道に遣はせし時には、生命を惜む者は之を失ひ、我がために生命を失ふ者は之を得べしと言て、靈の生命を高調せるが如き(馬太傳十ノ) 又は馬太傳十三章に傳へられたる天國に關する七つの譬喩の如き、又は天國に於て大いなる者は誰ぞやと言へる問に答へて、我れ眞に汝等に告げん、若し改まりて嬰兒の如くならずば天國に入ることを得じ、然れば凡そ此の嬰兒の如く自ら謙る者は、是れ天國に於て大なる者なりと教へし如き(馬太傳十八ノ) 又は若し汝の手汝の足己れを礙かさば斷りて之を棄てよ、兩手兩足ありて盡きざる火に投げ入れられんよりは、跛または

不具にて生に入るは善きなりと教へし如き(馬太傳十八ノ八、九) 又は夫れ甦るときは娶らず嫁がず天に在る神の使たちの如しと教へしが如き(馬太傳二ノ三三) 馬太傳二十三章に集められたるパリサイ黨に對する譴責に於ては、彼等が古律法の外形を果たし、外は眞に美はしく見ゆれども、内實には其の精神なく徒らに白く塗りたる墓の如く、貪慾を充たし不法を充たし、律法の細末に拘泥して其の大義を忘れ、蠅を漉出して駱駝を呑む如き矛盾をなし、其の經札を大にし、其の衣の裾を濶くし、筵席の上座、會堂の高座を好み、市上にて人を祝し、人よりは師と稱せられんことを愛し、水陸を歴巡して一人にても多く自黨に引き入れんとし、偽りて長き祈をなし、寡婦の家を呑み、他人には負ひ難き荷を負はせ、自らは指一つ之に添へず、天國の門を人の前に閉ぢて自らも入らず人をも入らしめざるを慨嘆せしが如き、凡て吾人の第一に求むべきもの、慕ふべきもの、力を傾くべきものは、物質の事に非ず、靈の事天の國たるを力説せるものなり。神の人に對する關係も全然靈的なることも耶穌に由て鮮かに示されたり。神は天の父なり、其の日を善き者にも悪しき者にも照らし雨を義しき者にも義しからざるものにも降らせ給へり。天の父は實に完全なり(馬太傳五ノ四五、四八) 天の父は人の求めざる先に凡

て無くてならぬものを知り給へり(馬太傳六ノ三) 彼は隠れたるに在して、祈を聴き、斷食、施濟を見給へり(馬太傳六ノ一、一八) 彼は求むる者に與へ尋ぬる者に會ふ神なり(馬太傳七ノ七一) 彼は人の一個一個を愛護して其の髮毛をさへ一ツツ、數へ知れり(馬太傳十ノ二八、三二) 一人の嬰兒にも天使を附して、父の顔は常に此の天使に向ひ居れり(馬太傳十ノ八、十) 彼は人の罪を赦すなり(馬太傳十八ノ二一、三五) 彼は一人の罪人のためにも全力を盡して其の歸らんことを勉む、宛がら牧羊者が一匹の迷へる羊のために非常の苦辛を嘗むるが如し、又罪あるもの、歸るとき失ひし者を得たりとて喜ぶ、宛がら放蕩子の歸參を父の喜ぶ如し(路加傳十五) 故に人の神に對する道も又靈的ならざるべからず。パリサイ黨のなすが如き外形偽善は神の前に益なし、天國は近づけり悔い改めよといふは耶穌の最初に鳴らせたる招致の聲なり(馬太傳四ノ十七) 祈をするにも心から謙りてせざれば義とせられず(路加傳十八ノ九、十四) 葡萄園にて日暮僅に一時間勞して一日の賃銀を得し者の如く、感恩の心なくては神に喜ばれず(馬太傳二十ノ十六) 心を盡し精神を盡し意を盡し主なる汝の神を愛すべし(馬太傳二十二ノ三四、四十) と教へし如き、其他凡ての點に於て神人の間は靈的のものなるは基督の教の一大特色なり。マルカス・ドットツ Marcus Dodds が、基督の示したる天國は、嬰兒の如き者が居り、嬰兒の

如き者が大いなる所なり、之をマホメットの天國の凡ての快樂充ち、數千の妻妾侍るに比し、また佛教の極樂の蓮花咲き開き、伽陵頻伽嚙りかはすに比するに、全く肉慾を離れて高潔純靈なりと言ひし如く (Mohammed, Buddha, and Christ) またハルナックが馬太傳六章路加傳十一章に在る祈の範例に付て、此れ實に精神が其の中心よりの平和に由て支配せられ居れる人に非ずしては到底發し得ぬ祈なりと言ひしが如く (Harnack, Wesen). 基督の教の凡ての點は、悉く肉慾的の臭味を離れ、純然靈的なり。基督の教は、靈が全勝を占め居れるものあるべからず。耶穌の教訓かくの如し、其の行動また之に應ず。勿論彼に於ては教訓と行動と矛盾せし跡あるを見ず。故に其の行動も靈的なり。弟子を教訓せし、多くの人々に教訓を垂れし、病者不健全者を助けし、其他あらゆる事、悉く彼は靈的に之を行へり。時人は彼より唯だ靈の流れかゝるを覺えたり。故に靈の事に最も感受鈍き者どもは失望したり、惡みたり。十二弟子の中にさへ謀反人を起したり。彼は此等に由て殺されしなり。されど感受力あるものは、彼の盈滿より受けて恵に恵を加へられ、己が靈性の統一の中に、更に新しき生命を注ぎ入れられ、前性格を脱ぎ棄て、新しき統一をなし、新しき性格となり、神に對し又人に

對し關係を新にしたり。彼の信徒が彼より受けしものは、實に此の靈の生命にして、彼は彼等に取りては實に靈の創造者、救主たりし以外には、意味なかりしなり。其後の歴史に於て耶穌の人格の活動は、常に靈的なり。其の靈的の力を以て人の靈を動かし、之に己れの内容を注ぎ入れ、之を新にし來り、今尙之をなしつゝあり。されば耶穌の人格は其の靈的の方面に於て最も活動せり。如何に彼が靈的の人なりしかを示すならずや。更に翻つて彼が神に對せし所を見るも全く靈的なり。彼は猶太人の血統たることも、儀式も禮典も、凡て眼中になし。唯だ神に對して子の心を以て事へ、全然神と合一し、其の愛を以て世の中に生活したるのみ。其の宗教の活力ある所茲に在り。後世基督教が末節に拘泥し、種々の形式に蔽はるゝに至りても、また大いなる人格現はれて、其等の皮殻を徹して基督の精神に入り、神に直接して新しき力を得、基督教を改革して之を人類の救の力たらしむるも之に由れり。

かく耶穌は靈の人なりき。吾人は耶穌に於て靈の最も高調し最も圓熟し、其の精華を發したるを見る。彼は自然を抑へず害せずして、而して靈を自由に圓滿に旺盛に發揮したる人格なりき。

故に基督教は世々靈界を其の戦場とせる運動なり。基督教は耶穌基督に由り、罪の生活を非認し、心を神に向け、神と合一せよといふことを題詞とし、之を人生の目的とす。物質の上の繁榮を來らせ、自然の力を十分に發揚せんことは其の主眼には非ず。靈は萬事の基にして、人類は己が靈に由て萬事を創造し、天地を新にする者なるが故に、人の靈に向つて作用し、此の靈を改むることを第一の目的とせり。従つて基督教に由て人の靈は更新變化を來たし、其の睡眠の中より醒めて向上の翼を擴げ、無限の神に翔け行き、又汎く人を愛するの活動をなすに至る。此の故に社會また新なり。基督教の來らざりし前と、基督教の來りて後の社會とは、精神全く異にして、物の價値顛倒し、新世界となれるを見る。基督教は決して利用厚生といふことを目的とせる運動にはあらず。利用厚生を主眼とし、其の以上に出でざりせば二宮金二郎の教、若くは福澤諭吉の教と選ぶ所なかるべきなり。又基督教は修身治國齊天下を第一義とせるものにもあらず。此は儒教などに於て専ら力を注げることなり。更に又基督教は人との關係を整へんことを最上目的とするものにもあらず。此れ倫理學者道德者のなす所なり。尙又基督教は人の知力に訴へ之を啓發せんことを最高事とせす。基督教

は自然の事物質の事よりも靈のこと、又靈のことにも横に向つて人に對する關係よりも上に向つて神に對する關係を正しうせんことを、其の弘通は即ち所謂精神的運動なり。但し神は天地根本の實在にして、萬物は神に依て造られ、萬事は神の旨に従つて成れるが故に、神との關係を正しうするは、即ち同時に宇宙の眞理に通ずるの知能を啓發し、他人との關係を正しうし、身修まり國治まり天下齊ひ、生活厚くなることなるは勿論なり。然るに動もすれば基督教を修身治國のためにのみ信じ又傳へんとし、若くは基督教を以て現代人民の生活狀態の改善、社會組織の改革の運動に於て盡くとなすが如き者あり。此れ基督教を誤ること甚だしきものにて、其の本を忘れし罪に基するなり。

然れども基督教は決して自然を忘れ物質を無視せざるが故に、自然に關し物質に關することもまた顧るべきなり。耶穌の教へし祈禱の範例にも、神に向つて願はくは汝の御名を高くせよ、御國を來らせよ、御心の天に成る如く地にも成れかしといふ實に崇高純靈の祈願をさへげたる後、直ちに我等の日用の糧を今日も與へよといへり。耶穌自身物質を要して生き、又他人の要する物質の要求を満たさせたり。故に社會組織

の改革、政治經濟實業の方面の努力は基督教の何時も怠るまじきことなり、之を神の心に合はするやう企て試むべきなり。人類は如何になるも我の關する所に非ずといふは、神の心に非ず、基督の精神に非ず。然も社會上政治上其他のことを神を忘れ靈を忘れて行ふが故に、其の志徹底せず。如何に社會を改良しても、何物を與へても、人の靈が正しきを得居らねば、不平不満は已む所を知らず、却つて惡念劣情を達するの自由を得て、社會はますます惡状態に陥り、人類は墮落するに至るなり。

耶穌の人性の總評

茲を以て耶穌の人性の全體に付て觀れば、耶穌は正則の人、完全の人、理想の人と謂はざるべからず。正則の人とは、人性を矯枉なく發揮したる人の謂にして、かの變則の人に對する語なり。完全の人とは人性を發揮して不具不足なきものを云ふ。理想の人とは人は斯くあるべきものなりと思はるゝ人性が現はれ居れる人を云ふ。耶穌を見るに確に是なり。耶穌を斯くの如く觀ることをば、近頃の極端なる否定派の耶穌傳研究者等が、耶穌の近世的描寫と稱して、其の史的ならぬを批評する所なれど、然も余の觀余の知り余の論ずる所の耶穌は、史的耶穌のみならず、久存の耶穌をも含め

るのみならず、史的の耶穌また斯くの如しとせざるを得ずして、極端否定派の否定は未だ曾て斯かる耶穌の史的なることを動かせし實なければ、敢て臆する所なく、此の眼を以て耶穌を見ることを得るなり。

確に耶穌は正則の人なり。彼の人性に於て何等變則の人性の現はれたるものあるなし。前にも言へる如く、彼は極めて人性の自然に従へり。自ら自然を矯め若くは托げしとなし。其の性來また極めて健全の人なりき。天才や宗教者に有り勝ちの偏れる性質、變態の心的作用は彼には是ありしと見るべからず。路加傳二章四十二節以下に記されたる十二歳の時の事の如きは、之を事實とするも何等變則の人性を露はしたりとは見えす。曠野に於ける誘惑、受洗の時の天よりの聲の聽覺などは、宗教的に偉大なる人物に取りては感覺せらるべき事ごもにして、之を人格の全體に比較すれば、不健全を現はすとは如何にしても見るべからず。山上の變貌、復活の如きは、若し假に之を幻象の類と解釋し去るにしても、其の見者は弟子にして耶穌の頭腦の作用には歸すべからざるものなり。神殿より貪慾陋劣なる商賈を逐ひ出だせし如きは、敬虔なるもの、至情としてさも有るべきことにして、却て自然をこそ現はせ、之を變則の性の發露とは

いふべからず。基督ほど健全正則の性の人は無かりしなり。勿論正則といふにも種々あり、知情意が共に貧弱にして均衡し、宗教的の深き感情経験もなく、道德的の大なる煩悶も強烈なる意志もなくして、而して正則の人と謂ひ得べきもあらん。是等の何れかが豊富極盛なる時は人性は傾く者なり。然るに耶穌に於ては、宗教彼の如く、道德彼の如くして、而して偏する所、缺陷する所なきなり。オスカー・ホルツマン Oscar Holzmann は曾て『耶穌は心酔者なりしか』*Was Jesus Ekstatischer?*を著し、耶穌は神と合一の意識最も熾にして、一個の心酔者なりきと論せしが、此は多くの大家の首肯せざる所なり。佛蘭西のロアシー Loisy も之を否定し、ハルナック Harnack も其の『本質』*Wesen*の中に、耶穌は何所より見るも、心酔者たりし跡なく、健全の質なりと論せり。近年亂暴なる基督史論の勃興と共に、耶穌の心的活動を變態なりと論するもの、獨逸和蘭等に現はれ居れり。シャール・ジャクソン・ケース Shirley Jackson Case が其の『耶穌の史實』*The Historicity of Jesus*に引く所に由れば、デローステンは『精神病治療學者の立場より見たる耶穌基督』に於て、耶穌は心的に不健全にして、従つて妄象に捕へられたりと論じ (*De Loosten, Jesus Christus vom Standpunkte des Psychiaters, 1905*) ラ

スム・センは『比較精神病學研究』に於て、耶穌は一個の癲癇病者なりと云へり (*Rasmussen, Eine vergleichende psychopathologische Studie, 1905*)。これ又之に反對してはクナイプの『精神病治療學の感化を受けたる近世耶穌傳研究』*Kneib, Moderne Leben-Jesu-Forschung unter dem Einflusse der Psychiatrie, 1908*。ウエルネルの『耶穌の心理的健全』*Werner, Die psychische Gesundheit Jesu, 1909*。ウイゼルの『心理學的耶穌人格論』*Weidel, Jesu Persönlichkeit: eine psychologische Studie, 1908*。マコーマンの『精神病治療學者の照出せる耶穌』*Jesus in psychiatrischer Beleuchtung: eine Kontroverse, 1910*あり、耶穌性格の病的ならず、健全なることを主張せり。耶穌の奇跡を行ひし如きは、決して其の心意の不健全の證とすべからず。當時に於ては奇跡は左ほど變態のことならず、況やクナイプ、ウエルネル等の論すと云ふが如く、耶穌に於ては神的力量あり、奇跡をも爲し得たるべきを思ひ得るに於てをや。耶穌の一代を見るに萬事が正則なり。前には耶穌の言行をエッセネやヨハネや乃至他の宗教家等に比して、極めて自然的にして矯抑偏僻せる所なきを言ひしが、其の言行の斯くの如きは、即ち其の人格の正則なるを示すものなり。使徒ペテロに至れば或はヨッパに在て日中に幻を見しこ

三二二
 とあり(使徒行傳十ノ九一十六)。パウロまたダマスコへ急行する途中、俄に天より聲あり、耶穌の歴然として現はるゝを見し經驗あり(使徒行傳九ノ一―九)。又ガラテヤ傳道旅行の間と思はるゝ頃には俄に携へられて第三の天に昇り、言ふべからざる語を聞きしてふ經驗あり(哥林多後四―)。此等は或は不健全性の人の經驗とも謂はれ謂ふべし。約翰傳著者の心意も頗る神秘的に傾き、自我の意識の境界を失ふに至る質なること見ゆれば、是も一派の學者に言はせなば心酔者の一人、變態の心質といふならん。然れども耶穌の人格の中には、斯かる要素に由て支配せらるゝ如き傾向更になし。勿論此等の要素絶無なりとは謂ふべからず。絶無ならば其の人格は却つて不完全なり。耶穌の人格の中には此等の要素も多分に在り。されど之が他の要素を蔽ひ、他の要素に勝て働くといふ變態の人格に非ざるなり。彼が人々の中を歩みしを見れば、巨船が洋中を行くの觀あり。人をして毫も危ぶましむるの點なし。凡ては堂々たり。故に他人をも感化して不健全を健全に、變態を正則にせしなり。癲狂、癲癇、其他の不健全者が彼に來つて癒されしは目に見ゆる上のことなれども、目に見えぬ不健全者變態者も亦同じく彼に來つて癒されしなり。マグダラのマリアは必ず變態者か心意の不健全者なりしならん。然も彼に従つて

大體に於て大いなる人格となりたり。稅吏マタイの如きも然りしならんが此は何れの方より見るも眞に健全と謂ふべき人格となりたり。其他今日にても精神の不健全變態なるものが久存の耶穌の人格に接して、非常に健全正則なる人格となりつゝある事實ならずや。之に由ても耶穌の人格の正則なるを知るべし

三二三
 されど以上は耶穌の完全の消極的證明なり。耶穌の人格の完全の積極的證明は如何。完全の人とは如何なる物か。吾人は完全といふものゝ標準を有せざるなり。且つ又人は尙進化中にあり。其の到達點は何所に在るや、現在に於て之を見ること能はざるなり。されば完全の人といふは如何なる人か。或人を指して之を完全なりといふこと能はざる理なり。然り吾人は茲に完全の人の姿を明白に描出すること能はず。然れども吾人耶穌を見、其の人格、及び人格の發現たる教訓實行を見、之を人生の萬事に敷衍し、萬端に適用して、茲に突止する所、凝停する所を見出ださず、耶穌の精神、耶穌の原理は、如何なる人事の中にも入り行きて發揮せられ、茲に美はしき果を結び、之に由て個人及び社會に生命を與へ、之を美化上進繁榮せしめ、何時何所にも斯くの如くならば、其の源たる耶穌の人格は、吾人の視界の及ぶ限りに於ては完全なる人格

とせざるを得ず。完全なる人格は尙此の以上に出で得るものなるやも知るべからず。雖も、其は既に吾人の経験を超絶し思辨をも超絶す。吾人は吾人の経験し思辨する限りの完全を以て吾人の完全となさざるを得ず。耶穌は此の意味に於て完全の人格なり。シュライエルマッセル Schleiermacher は耶穌の完全は宗教の圈内の完全にして、其他の方面に於て不完全なるを妨げずと言ひしが、必ずしも然か言ふを要せず。吾人は以上の意味にて耶穌を完全といふなり。耶穌を見るに其の生活に於て缺陷ありしを認めず、人もし其の人格に缺陷あらば、其は必ず其の生活に罅隙を生じ來る、然るに耶穌の生活を究むれば究むるほど、其の人格の美いよゝゝ露はれ來るなり。彼の教訓を味ふこと深きに従ひ、彼の行動を倣ふこと加はるに従ひ、彼を追想すること切なるに従ひ、將た彼の久存の人格に接すること密なるに従ひ、耶穌はいよゝゝ其の完全の面目を現はして、吾人の心に玲瓏壁よりも圓きものとして認めらるゝなり。若し不完全なる人格ならば之に反す。初は吾人の目を驚かし心を引くの美あるも、之を究め、之を考へ、之に倣ひ、之を慕ふこと加はるに従ひ、其の缺點弱點暴露し來りて目もあてられぬ人格となるに至り、若くは其の教に従ひ其の生活に倣ふに従つて、世の中に諸方面に差

間へを感じ、缺陷を生ずるに至るは常に有り勝ることならずや。小兒時代に或人物を師表として仰ぎ、之に倣ふて生活し行く内、人ど爲りて忽ち其の人物と同じ缺陷に陥り居しを發見し、俄に生活の方針を改むる者あるは吾人の屢々見る所なり。然るに耶穌は之を信じ之を倣ふ如何なる人をも、此の狼狽に達せしめざりき。若し世に缺陷なき人格を求めば基督の外に之あるべからず、然かのみならず耶穌の人格は積極的に世に再現せられ三現せられ千萬現せられて凝停する所なく、其の人格の端々をまた人事に再現三現千萬現して、人事悉く美化す。個人もかくするとき理想に合へるを見出だし、社會も斯くするとき理想に合へるを見出だし、斯くて何れも幸福を加へ、大いなる進歩をなす。耶穌の人格の完全を謂ふ、豈に崇拜者の無證的信仰若くは誇張とすべけんや、耶穌は眞に完全の人格なり。

完全の人格といふことに附て直ちに提起せらるゝ問題は耶穌の無罪如何てふことなり。ユニテリアンの人々は耶穌とても人なれば罪なかりしとすべからずとて、聖書中より特に耶穌の人格の缺點を暴はすと思はるゝ節々、例へばパリサイ黨の者を譴責せしこと、神殿より貪慾なる商賈を逐ひ出だせし事などを引きて之を證すれど、此等の

事を罪惡とすべきや否やは、耶穌の心事に立ち入りて其の動機意向を見ざるべからず。此れ困難なることにして到底企て及ぶべからざることなり。然も之を明にせざれば耶穌に罪惡ありと断定する能はざるに、ユニテリアンの徒輕々しく之を断定するは、即ち一個の獨斷前定に囚はれ居れるが故なり。何ぞや。人は必ず罪を犯すといふことは是なり。然れども人なれば必ず罪を犯すとは何者も定めあらぬなり。罪を犯さぬ人あるかも知るべからず。罪を犯さねばこそ非凡なれ。されど無罪の問題は至難なり。耶穌無罪なりといふも、畢竟するに耶穌は神なるが故に罪を犯すべからずといふ前定より來れる獨斷なり。耶穌の言には一言之を證するものなし。汝等の内誰か我を罪に定むる者あるやといふは約翰傳中の句にして、然も此は最も深き意味に於ける罪のことをいふに非ず、外に形はれたるものを指すなり。

斯く耶穌の無罪は直接に證明すること能はざれど、唯だ之を吾人より觀て推定することを得るなり。耶穌には罪の意識ありし如く見えざるなり。彼は天地の間に在りて、自己の内部と宇宙根本の實在たる神との間に、何等の不調和ありしを感せし跡なく、又自己の内部に思想の分裂ありて、戦闘の状態に入りしといふが如き様も見えざるな

り。曠野の誘惑、ゲツセマネの苦禱の如きは、煩悶は即ち煩悶なりと雖も、然も肉に就かんか、快樂を求めんかといふ質の思想ありしに非ず、其の誘惑は唯だ其の使命を果たすために全然純潔ならぬ手段を取るの途も眼前に見え、神より與へられたる力を自己もしくは人民の自然の必需的要求を充たすために流用し得る途も見え、又此の力を直接に現はして、其にて直ちに隨從者を得る途も見えたるに過ぎず。ゲツセマネの苦惱は十字架の死を明日に控へたるものとして、當然起るべきことなり。耶穌の此等の煩悶を仔細に究め見よ。其内には一點慾情の汚れ混じ居らずして、普通人の所謂心煩悶なるものと、種類の全く異り居れるに心づかすんば在らじ。若し福音書記者が意識して斯く描寫せしとせば、其の用意は驚くべく、逆も人間業には非ざるなり。耶穌に於ては凡てが平和なり。衷心より一律の調和を破るものなし。されば彼には罪の意識全くなかりしと推定するも決して無理にはあらず。彼れもし靈性遲鈍にして、宗教整はず、道德低き者ならんには、或は罪の意識なくとも人格の完全なる證とはなすに足らず、よし又意識ありても極めて薄弱ならば、之がために心中の平和を亂ること少く、此の不調和を暴露することなくて終りしとするを得んかなれども、靈性の發達彼の如

く、而して神を見て明なること彼の如く、而して人類の罪を見て其の赦の至要を感じ、悔改を促すの切なること彼の如くにして、而して自己は斯くの如く一點の疚しきを感じせず、神に對して徹底せる一致を保ちし自覺ありしとせば、以て其の内心に罪の意識の全然なかりしを知るべく、又以て其の品性の玲瓏純潔なりしを知るべきなり。耶穌の弟子なるパウロを見れば、其の人格はまた偉大にして其品性は高潔、史上比なきほどの人物なれど、彼には既に深甚なる靈闘ありき。彼は肉の法と靈の法とが自己の内部にて相争ひ、自己の分裂するを感じたり。多くの敬虔なる人格は大抵之を感ず。乞ふ聖アントニオス、聖アウグスチヌス、聖フランチェスコ、聖ベルナル等を始め、古今の大なる聖者等を見よ。皆な罪惡の意識の戰場を潜りて、其の矢玉の下より出で來り、平和の境に達したるものならずや。基督が是等の人格の師にして初型にして、而して此點に於ては異なるは明に見ることを得べし。

史的の基督に於て罪の意識を認めず、又史的基督の言行に罪の意志より出でしとするものを指摘し能はざるが故に、久存の耶穌の人格に至ては勿論完全無缺なり。偉人は死後に至りて崇められ、其の缺點は葬られ、若くは思想に由て美化せられて、益々

大人格とせらるゝが常なれども、然も史的に完全ならざりし人格は、何所にか其の缺點を暴露し、其自身に蔽ふべからざる不完全の面目を呈すると共に、人生に偏れる感化を残し、終に其の進歩を行き止まらしむ。著しき例を取りて言へば、ルーテルやカルヴィンは即ち所謂プロテスタント主義の開祖にして、新教徒は其流派によりて其れ其れ彼等を尊び、神のやうに思ひて、今尙ルーテルの精神ゆゑ斯くせざるべからずと云ふか、其はカルヴィンの主義に反すと云言て、基督信徒の生活を律し行きつゝある程なれど、彼等の功の永遠に忘るべからざると共に、其の人格の缺點より出でし所は、今やプロテスタント諸教會を進歩より牽止し、基督教は今やルーテル、カルヴィンの人格を蟬脱せざれば、生命を盛にする能はざるに至れり。其他かゝる例は古今に充ちて一々茲に言ふべからず。然るに耶穌の久存の人格は何所まで發展顯彰しても其の止まる所を知らず。此れ彼が完全の人格にして、而して其の完全は決して後人が思想に由て其の内容を美化したるに由て存するに非ず、實に彼れ自らのものにして、即ち實なることを證するものなり。吾人は耶穌に於て完全の人格を見る。

正則といひ完全といふは眞に尊きことなるが、然も是は現在の状態を云へることな

り。人には此の以上理想の状態あり。例へば幼児の正則及び完全状態は、身體よく整ひ、よく遊び、よく笑ひ、よく泣き、よく食ひ、よく飲み、よく睡り、又よく小兒の語をかたり、よく父母を愛するなどいふことに在らんが、幼児の理想は未だ現はれ居らず、それは將來に在り。然れども幼児の理想は確に存在するが故に、父母は此の理想を望みつつ、之に到らせんとして幼児を養育す。たとひ完全なる幼児たりとも此の將來なくんば生けるものに非ず。幼児には理想あればこそ、正則状態も、完全状態も分明するなれ。正則完全とは將來の理想に發達すべく現在はその階段に在て、適當の發育をなし居るの意味ならずや。若し理想なくば如何なる方面に發達し行きたりて、之を變態ともいふべからず、又如何なるものを缺き居ればとて、之を不完全ともいふべからず。人といふもの又然り。人は如何に在るべきものか。是が明なればこそ此の理想を指して發達せるものを正則の人と名づけ、現に此の正則の發達が凡ての點に於て認めらるるものを完全の人とは名づくるなれ。然るに耶穌は人の當に在るべき人格なり。耶穌に於ては人の理想が實現せられ居れり。故に人は耶穌を仰ぎ、其の人格内容を自ら實現せんと努力するときは、即ち理想に向つて進み行くなり。勿論理想の人格といへばと

て、宇宙間の有りこ有らゆる事理に付て完全なる知識を有し、又凡ての眞理を包容し統一したる哲學を有し、又凡ての文學藝術に通達し盡したりといふには非ず。其等の根底たる品性の理想を發揮せるを謂ふなり。正しき知識の慾望、其の獲得、其の活用、正しき思想、其の實行、正しき文藝などは、皆正しき品性の所産にして、善き樹は善き實を結び、惡しき樹は惡しき實を結ぶものなればなり。耶穌の品性は理想の品性なりき。曾て歴史に存せし一個の人物に、人の理想が現はれ居れりと云ふこと、又吾人は此の古の人たるものを理想として生活せよといふことは、一見あるまじき事の如し。且つ斯くする時人類の進歩は停滞し果てずやと危ぶまるゝも、レバ理あり。之もユニテリアンの人々などの常に口にする所なるが、吾人の理想とする耶穌は史的耶穌と共に久存の耶穌なることを記憶すべきと共に、然も現實の耶穌に相違なければ、淺墓に考ふれば此の憂なきに非ざる如きも事實に於ては決して然らざるに非ずや。基督教にては終始耶穌を理想とし、之に倣ひ、其の人格を再現せんとし來れり。然るに幾千年を経ても其の理想の陳腐に歸することなく、常に清新の標準として立ち、何時まで之を追ひ求めても、之を追ひ抜くことなく、人類の思想之より以上に超生することなく、而

して斯くする人々、斯くする社會は、何時まで進歩しても停滯することなし。従つて進めば従つて新しき面目を發揮しつゝあり。斯く耶穌の人格は、何時までも理想たる價を減せずして益々之を加へ、之を理想とする社會は何時までも停滯することなきに由て個人のため社會のため保守的回顧的の弊害なく、却つて之を永久に進歩開發ならしめ、生氣充溢せしむるを見るのみならず、斯くの如く耶穌を理想とするときに、人類が斯くの如く駸々として進歩し、耶穌を理想とするもの加はるほど、世界が改善し、上昇するに徴するときは、此れ即ち耶穌が人の理想たる實を有するに由ると見ざるべからざるなり。理想なればこそ之を指し進むものが、人類として上昇するなれ。若し理想ならずんば、之を指し進む個人と社會は、必ず不健全の状態に達し、弊害百出して之より脱出する能はず、他來の力を待て救はれざるべからざるに至るべきなり。然るに耶穌を指して進むものは、二千年間努力して非常なる上昇をなし、世界の面目炭と雪ほどになり、而して尙ほ、てしなき前途を示す。此の事實は耶穌が理想の人なることを確實に證しするものなり。耶穌は理想の人格なり。其の品性は永久に人類の再現すべきものなり。其の品性の直接活動たる宗教と道德とは、吾人が人として必ず現す

べきものなり。

以上余は耶穌基督は史的人格としては勿論、其の久存の人格としても、一個の人なることを明にせり。彼は人の自然性を最も圓滿に發揮したる人、人の靈性を最も高く活現したる人、實に正則の人、完全の人、理想の人たるなり。此れ基督が人類を動かし之を救ふ所以の一なり。

第一二 耶穌基督の人格は神の内性の顯現

耶穌基督は人の至れるものにして、其の人格は人を顯彰し居れり。人の如何なるものたるかは彼に於て表はるゝなり。又彼の生活は人の理想を顯現し居れり。其の生活の端々は生ける理想人の顯現なり。此れ實に大切なることにて斯かる人格の尊きは言ふまでもなし。されど唯だ人を顯彰し、理想人格を顯現するのみにては、神人の關係たる宗教に於ては價值甚だ少し。否人性論の上より言ても價值尙少し。何となれば人は人をも見て解し得らるべきものに非ず、神を解し天地を解し、兩々相待て始

めて明なるものなればなり。

耶穌は又神に對する人の道を全うしたり。彼の宗教は人として神に對する道の盡くせるものなり。吾人彼の如くせば宗教を全うせりと謂ふべきや勿論なり。然れども此れ又他に相待つべきことあり。何となれば神が顯はされずして、而して神に對する人の道が明なる理なければなり。自ら神の明なる人にして始めて之に對する道を全うし得べく、他人に神を現はして而して之に對する道を示し得べきなり。

耶穌は人及び人の方より神に對する道を其の人格と生活とに於て顯はしたるのみならず、彼は更に人として顯はし得る限りの神の内性を顯はしたり。更に又神は人の人格に現はれ得る限り耶穌に於て其の内性を顯現したり。彼は神を信じ神を愛し神の内徳と調和したるが故に、神と靈々相合一し、茲に神の内部の眞實を知悉し、經驗し、之を人に向つて開示したると共に、神は此の合一に於て其の内性を耶穌に於て活現し、神の心即ち耶穌の心、神の爲す所即ち耶穌の爲す所となり、又耶穌の心即ち神の心、耶穌の爲す所即ち神の爲す所となり、茲に神は耶穌に於て活動し、人類の中に活動し、世界に内在するの實を現はしたり。

甲、耶穌は自ら神に付て顯示す。耶穌は神を顯示したりと言ひ、最も完全に之を顯示したりと言へばとて、唯だ然か言ふのみにては、我田引水の獨斷と聞ゆる外あるべからず。然るに多くの傳道者は勿論神學者さへも、此事をば唯だ前定的に宣明するのみなるが故に、其の所説比較的力なく、反對者を首肯せしむる能はざるなり。此れ然しながら理由を言ひ顯はすに最も困難を感じることにて、多くは吾人の直覺に訴へ、耶穌の神に付ての知識が最も正しと思はるゝ故に、敢て是が理由を求めざるものならん。然れども何事に依らず眞理は之を眞理として認めらるゝ理由あり。耶穌の神に付ての顯彰が最も正しとせらるゝは、即ち其の多くの點に於て試験せられて、茲に其の眞理たることを現はすが故なり。一は宗教の歴史の指す所を見て、耶穌の示せる神が、其の目的に中り居るを示すが故なり。宗教は劣等より高等のものに進む間、多神より唯一神となり、民族的より普汎的となり、無道德的より、道德的となり、至上慈愛の神を求むるなり。耶穌の神之に當る。二は人類の知識及び思辨の歸結する所を見て、耶穌の神の眞なるを知る故なり。人類の知識は極めて不十分に於て、其の思辨は至て不

完全なれども、然も人は之を用ひて、其の歸結する所を眞と信じつゝあり。耶穌の示せる神は、知識を綜合し理論を築き上げたる上にて、神の真相を得たるものと信せらるゝ故なり。三は吾人の生活及び人類世界に於ける價值に徹して、耶穌の神の眞なるを見る故なり。若し眞ならぬことならば、之を信じ、之を實生活に適用活現し行く内に、必ず之に由て濟されぬ事に觸着し、人類世界は或は害を受け或は停滯すべし。然るに耶穌の神の信仰は斯かることなきは勿論、之に由て個人は非常なる力を得、之を失ふときは暗に沈むほどの感情と事實とあり、人類また之あるに由て榮え、之を失ふて墮落し荒廢するが故なり。四は一旦神を信するときは、神あらば其の神は必ず信者と交渉し、信者の經驗に入り來る理なり。而して時としては神を甲様に信じて却つて乙様の神に接する經驗あり。釋迦の神は無情無心の實體なりしも、其の徒は却て慈悲の神を經驗し、其方に佛教を敷衍し行きたるが如きものあれども、耶穌の神は信するものに、耶穌の示したる如く經驗せらるゝが故なり。此等の理由の故に耶穌の神に關する知識經驗は最も神の眞に合ひ、従つて耶穌は最も徹底的に神を知識經驗したる人なりしことを知るなり。吾人が常に彼を無二の宗教的天才と謂ひ、彼を崇めて權威とすべきを謂ふ所

以のものは茲に在り。

兎に角神に付ての耶穌の顯示は、種々の試證に訴へて眞實に合ひ健全なること明なるものなるが、耶穌は如何にして此の顯示をなせしかといへば、其一は其の教訓に於てなり。古來人類は神を探り求め、偉人等出でて神に付て教へたる所あれども、耶穌の如く、神を明白に、神を親しく、又神を生々しく人に教へたるものあらざるなり。異教の開祖や猶太の預言者の中には、神に付て頗る壯烈なる教をなせる者ありと雖も、之を耶穌の教へたる所に比すれば、眞實を距ること確に遠しと感せられ、人生の上に結果を起せること輕小なり。たゞ神を其の眞實に合ふと思はるゝ形に於て顯示したる者は、唯だ神の人格の形式を示して、其の内性を示さず、故に神は人類の生活に入るることなくして終るなり。然るに耶穌は神の形式を示せるのみならず、其の愛なるを示せるのみならず、其の愛は如何に發展分化して、如何なる活動となり、人生に入りては、如何なる影響を起すかをまで示せり。此れ吾人が彼の教に於て神の完全なる顯示を見んとする所以なり。

耶穌は神は天の父なりと教へたり。此は耶穌の教の最大要點にして、其の宗教の根

本たり源頭たる觀念の表示なり、人類は神に付て様々の思索をなし經驗をなし、一定の信念を造りて、之に由て宇宙人生を解し、生活の原則を立て來れり。然れども其の信念は、次第に宇宙人生に對する知識經驗の増加し來るに従ひ、所々に支拮衝突を起して、終に通用せざるに至り、全然其の信念を擲棄するか、さなくば別に新しき信念を造りて解釋を試みざるべからざるに至れり。然るに基督は神は天の父なりと教へたり。此れ一見極めて平凡なる觀念の如くなれども、然も古來何人も看破し得ず道破し得ざりし奥義なり。勿論前人の教義の中に、神の慈愛を言ふものなきに非ず。然れども其は鬱蒼たる林の間より、美麗なる堂宇の唯だ齟齬をのみ現はすが如きか、若くは大いなる熊の喉にある新月の如く、全體にふさはしからぬ部分として現はされたるのみ。基督の如く之を以て神の性の實質とし、之を以てのみ人に臨み、之を以てのみ萬事を運行するといふ確實なる思想はなかりしこと事實なり。耶穌の教に由て、神の天父たる真相は始めて人類に開示せられたるなり。

神は天父たりてふ教は、一には神を一の形式に劃定したる者にて、又神の人格の形式を示したるもの也。神は單に天地根本の實在としては確に無劃定なり。絕對とい

ふは無劃定の別名なり。既に神は如何なる者なりと言はれ得ば、神は絕對には非ざるなり。然れども神自身を全體より觀れば絕對無劃定なりとしても、人類すでに實在す。人類は有限なる者にして而して無限なるものに對するが如く、神も有限なる人類に對して存するものなり。此の人に對するものとしての神、或は神の側面、或は神の方向、或は神の活動、是れは人に交渉するだけに人に知識經驗せらる。此れ即ち人が神に付て知る所觀念する所、即ちフェアバレンフェアバレンなどが神格といふ所のものなり(Fairbairn, Place of Christ)。されば神は如何なる者なりといふ時は、絕對無劃定なる神に劃定を與へたるものなり。神を人と交渉の地位に置きたるものなり。否、實を言へば神の人と交渉せる方面方向若くは活動を看取したるものなり。耶穌は之を天の父なりと看取したり。猶太教の如く超絶せる聖徳一途の神と看取するも、印度宗教の如く無意識と看取するも、同じく看取の一法なり。然れども前に言へる如き永久の試證に投せられて、何れが能く堅實不易の眞理として殘るかといふに至れば、耶穌の教より以外に之を求むるに由なし。されば神を天の父なりといふ形式の下に劃定せしは、人類に取りて基督の大恩と謂ふべきや論なし。若し基督之をなさざりしならば、絕對なる神に付て誤つたる

劃定を與へ、人類と交渉なき方面、若くは有りても極めて微弱なる方面の形式を以て、其の神格を言ひ顯はしたるべければ也。

神格はかくて耶穌に由て如何なる形式のものたるか、明となりたり。彼は人に對して父の如く、正しく清き愛を以て臨むものたること示されしなり。耶穌は始終この顯示を勉めたり。彼には神の姿は無心無情の實在にもあらず、又冷酷にして義を人に責むる暴君にもあらず。彼の冴えたる靈眼に歴然として現はれし神は、慈愛の笑顔を以て、彼を待ち人を待つ父なりしなり。彼は神格の此の形式を人に教へたり。彼は神の事を常に天の父と呼び、弟子等に祈の範例を教ふるときは、先づ天に在す我等の父よと言て神を呼べといひ、自らの心に描き、自らの接せる神は父の姿なることを顯はし、弟子等の信仰の對象としても、實に慈愛深き父の姿を現はさんとしたり。福音書を一貫して現はるゝ所の神の姿は、舊約の全巻を讀み行きて、吾人の心に現はれ來る神の面目とは全然異れり。基督教に於て神は現はれて天の父となりしなり。人類は神の人格の形式に付て此の觀念を得てより、思想全く一變し、神人の關係、人々の關係、萬物との關係全く新になりたり。パウロや、約翰文書著者や、其他新約全書文書の著者

等の宗教を見れば、其の性質により境遇事情により、基督教を現はすこと各々變化ありと雖も、然も彼等の精神の根底には、神は天父なりといふ信仰の確乎として抜くべからざるものあり。宗教は是に由て全く舊約宗教と異り、生氣充實し、經驗清新なり。耶穌が此の形式の觀念を與へて以來、基督信徒は時代を逐ひ、人種に従ひ、歴史に依り、各々其の思想する所、經驗する所により、此の形式の内容を充たし行きて、神は父にして如何なる性格を有し、如何なることをするかを、一々犇々と身に染みて味ひ、心に留めて認知するに至れり。然り一旦形式を與ふれば、内容は機に接し時に隨ひ、漸次充たされ行きて、神の父なる面目いよ／＼鮮に知らる。若し形式を與ふるものなくば、時々神の愛を思想し經驗することあるも、其等は心中に散在し若くは鳥合しあるが故に、徒らに消費し盡され、何事か極めて輕き反對の思想經驗の起るに遭へば、忽ち雲散霧消し去り、全く其の跡を留めざるに至りて、何時までも一個の定まれる觀念となることあらざるべきなり。

然れども耶穌は單に神の人格の形式に付て教へ、其の觀念を人類に與へたるのみならず、二には彼は神の人格の内容を人に顯示したり。形式を示すは或は企て及ぶやも

三三二

知れず。人間の事に於て見るも、彼の人は善き人なり、悪しき人なりといふ斷定を下し、之を他人に告ぐるは比較的易きことなり。江湖の新聞紙の人物評などは多く是なり。然れども其の内容を示し、善き人の善き所を一々細に示して、之を人の心に納得せしむるは頗る難きことなり。然るに神は絶大の人格なり。其の人類と交渉する方面と云ても、宇宙よりも大なる存在たるもの人類に對する方面なり。人類の過去現在將來、善人悪人、大事細事、物質の末端、靈魂の奥底までも交渉する神なり。此の神の人格の形式は、或は宇宙の現象や、人類の歴史や、人心の歸向や、其他より推して、大體如何なる者なりと結論し之を人に示しても、さて其の内容は如何、如何に世界人類の間に活動せりやと言ふに至れば、多くの者は忽ち噤と行き詰まりて、之を顯はすべきものを有せざるなり。哲學者等の神論は常に是なり。されど斯くては神の如何なるものなるかの不明瞭なること初と大差なきなり。人は形式を充たさんため自ら内容を考へんとしても、初より其の方角さへ示さざれば、如何なる種類のものが神の天父たることの現はれたるものか明ならず。神の天父たることの現はれたる事物に接しても、之を其れど覺り得るの理とてあらざるなり。故に神も知られねば、又かゝる教

にては人生には用をなさず。人を助け人を化し人を救ふことあるべからざるなり。然るに耶穌は一々細かなる點に立ち入りて、神の父なること此れの如し又其れの如しと教へらる。實に耶穌が至大の宗教的天才に非ざるより、確に神に接し、神と合一し、神彼に在て働けるに非ざるよりは、かゝる顯示あり得べからず。之に由て神の人格の内性分明す。勿論神の内性の事に應じ物に接して、種々變化して現はるゝを、耶穌は在世の間に一々示したるには非ず。其は億萬の事端に涉れば、到底能くせらるべからず。耶穌は神の内性の空虚に非ずして、打たば必ず響き、世界に現はれ來ること、現に現はれ居ることを、通則として示したり。教は之にて十分なり。人は之を示さるれば、自己が接着し遭遇する所に於て、神の内性の顯現を見、いよゝゝ之を確にするに至るなり。

耶穌は神の内性に付て極めて多端の教訓をなせり。然れども之を吾人の慣れたる途に由て分類して考ふれば、彼は一に神の靈なることを教へたり。神は隠れたるに在す天の父なり(馬太傳六ノ四ト六)。信者が教のために有司にわたさるゝ時、言ふべきことを賜ふ者なり(馬太傳十ノ十九)。彼の國は靈の國なり。形はれて來るものに非ず、人々の内に在るものな

り(路加傳十)。嬰兒の如き者の在る所なり(馬可傳十)。神は形を見ずして心を見る(馬太六八)。偽善者の祈よりも悔い改むる者の祈を義とす(路加十八)。二に神は聖なり。故に心の清き者は神を見ることを得(馬太五)。神は不義を容れず。罪ある者をば長く忍ぶとも、終まで悔い改めずんば之を棄つることあらん(馬太十三ノ二四一三)。教を聴くのみにて神の心に従はざるものも之と同じからん(馬太七ノ二一七)。偽善は最も神の惡む所、偽善者は最も禍なる者なり(馬太二三)。三に神は愛なり。愛は種々雜多の徳となり、人間に多くの形にて活動し出づるものなり。其の著しき所を摘まば、愛は護りなり。神は人を護り、特に基督の弟子を護る。空の鳥を養ひ、野の花を装ふ神は人をば決して飢ゑ凍ゆるに委せず(馬太六ノ二)。二羽一錢にて售らるゝ雀をも徒らに地に隕つるを許さぬ神は弟子等をば護りて頭の毛をみな數ふるばかりなり(馬太十ノ二)。小さき者の一人も天の使に護られ、天の使は父の顔を常に見て在るなり(馬太十)。愛は又與ふることなり。神は人に與ふるなり。求めよ然らば與へられ、尋ねよ然らば會ひ、門を叩けよ然らば開かるゝ事を得ん(馬太七ノ一二)。人先づ神の國と神の義とを求めば、神は生活に必需なるものをば必ず與へ給はん(馬太六ノ二三)。信者にて二人の者地に於て心を合はせ何事にも求

めば、天に在す父は彼等の爲に之を成し給ふべし(馬太十八)。愛は又赦しとなる。神は人を赦す。祈の中には我等に負債ある(罪を犯す)者を我等の免す如く我等の負債をも免し給へと祈るべし、若し人の罪を免さば天に在す父もまた己の罪を赦し給はん(馬太十二)。天の父は其の日を善者にも惡者にも照らせ、雨を義者にも不義者にも降らせ給ふ(馬太五)。神は百萬金の負債せる僕を善良なる主人の免す如く人の罪を赦す(馬太十八ノ四五)。一人の罪ある者悔い改めなば天に於て大なる喜あり(路加十)。神に歸る者は放蕩息子(路加十五)の歸參して父に迎へらるゝ如く神に迎へられん(路加十五)。愛はまた贖なり。即ち對手が其の罪過のため陥れる不幸沈淪を、我より進み、彼のため勞して代價を拂ひ、自己の生命の中に抱き入れ、幸福の状態に救ひ上ぐるこゝとなる。神は人を贖ふ。善良なる牧羊者が百匹の羊の中一匹を失はんに、之を尋ねて得るまで已まず、之を得れば、肩に載せ歸りて其の友を呼び、我と共に喜べ我が失ひし羊を得たればなりと言ふ如く、神は一人の迷へる者のためにも、自ら苦勞し、之を己れに引き返さんと盡力し、歸したる時天に於て無限の喜を有す(路加十五)。夫れ天國は朝はやく出でて葡萄園に工人を雇ふ主人の如し、六時先づ出でて工人を招き入れ、また九時頃出でて街に徒く立てる者

を見て、之を招き入れ、十二時と三時頃にも出でて然かし、五時頃また他の立てる者に遇て、何故日ねもす茲に立つや、汝等も葡萄園に往けと言て招き入れ、日暮に及びて後に至れるものを先として、朝より勞せし者に及び、一齊に約束の如く銀一枚づゝを與ふるが如し、天の門は人生の何時にても開かれて、神は自ら出でて人を招き之に入れんとす(馬太二十)。又天國は或王その子の爲に婚筵を設くるが如し。招き置ける者を迎へんために僕を遣はしたれど誰も來らず。然も王は尙懲りすまに他の僕を遣はし、言を恭しくし、凡ての準備厚く整ひたれば來れと言はしむ。されど一人は己の田に行き、一人は己の貿易に行き、他の者は其の僕を執へ辱しめて殺し、王も終に怒りて此等を棄て、街に行きて遇ふ限りの人を招き、席を充たすが如し。此は猶太人の預言者や耶穌に聽かぬを言ひたる意もあれど、神の人を救ふために自ら努力し忍耐することを示すに於ては一なり(馬太二二)。又天國は葡萄園の主人が、園の設備を十分に整へ、農夫に貸し置きて、收穫期となりしかば其の收穫の受領のため、僕を農夫の許に遣はせしに、農夫ども第一の僕をば執へて一人を鞭うち一人を殺し一人を石にて打ちたり。然も主人は尙之にて打ち棄てず、また外の僕を前よりも多く遣はししに、之にも前の

如くせり。主人茲に於て更に深入りし、我子は敬ふならんと謂ひて終に其子を遣はせしに、農夫どもは之を執へ、葡萄園より逐ひ出だして殺せり(馬太二二)。此等の譬喩は、耶穌の一生の幕閉ちて幾十年の後、追想か傳聞に由て記したるものなれば、何程まで後の思想を以て過去の教を修飾せしか不明なりと雖も、兎に角耶穌の教に斯かる譬喩を以て、神が人を救ふため自ら非常なる苦痛を嘗むることを教へしものあるは明かに思ふべきなり。神は又凡ての者を愛す。基督の弟子が敵を愛し、誣ふ者を祝し、憎く者を善視し、虐遇迫害する者のために祈禱するは、即ち天父の子たらんためにて、天父には善者に日を照らし、義者に雨を降らすの恵あると共に、惡者にも不義者にも同じく之を與ふるの寛容あり忍耐あり(馬太傳五)。麥の中の稗子をも忍びて最後の日までは容れ置くなり(馬太十三)。耶穌が天父の内性に付て教へし所、およそ斯くの如し。然れども此れ甚だ弱き引證に過ぎず。福音書を通讀して耶穌の教訓を見るときは、到る所神の内面が教示せられて、我等は内容の充實せる天父の腹中を讀む如き心地せずんばあらざるなり。耶穌は教に於て神を顯示せり。

神に關する教眞に大切なり。然れど教のみにては力なし。教は唯だ神に關する觀念

のみあらば爲し得ることもあるべし。従つて教は甚だ美なれども、唯だ空想に過ぎざることあり。神の内性は事實如何なるものか。此は現はれて行爲となれるものに由て知るべきのみ。聖なり、愛なりといひたりとて其は抽象的の觀念のみ。聖たり愛たるものは活作用せざれば知るべからず、又此の活世界を如何ともする能はず。聖たり愛たる内性あらば、其は必ず現はれて活動すべきなり。耶穌の行爲は即ち其の神の聖たり愛たる内性の此世の事情に由て激揚して火花を發し、其所に存在を現はしたるものなり。此れが他の宗教家や道德家の論證する所と、基督信徒の論證する所と大いに異なる所なり。近頃東京帝國大學法科の某教授、しきりに日本古神道を唱道す。曰く古神道は日本の大道なり、神ながらの道なり。曰く古神道は大いなり、宏し、寛容なり、包容的なりと。辯論具さに努むと雖も、さて其の古神道は如何なる内性を有するや、日本の神ながらの道ならば日本の神々の何所に如何になりて發現し居れりや、紀元前紀元後の歴史に於ける何物が其の古神道の活動せるものなりやと問ひ來るに、漠として一切捉ふべからず、博士一言の答なし。恐らくは博士自ら之を思はず之を明に知らざることを。さる道ならば有るか無きか定かならぬものなり。若し有らば其は必ず活作用

して何所にか露はれ居るなり。若しさる普通の大道ならば、事々物々に露はれ居るべければ、大事小事何事にも手當り次第に取り上げて、見よ古神道は茲に在り、此の現象が古神道なりと明白に指摘し得べきなり。然るに之をなす能はざるは、自己の思想不透明にして、何物か有るかの如く思惟し、自ら欺かれてかゝる言論をなすなり。然し斯かる事は學者には有り勝ることなり。基督の神の顯示に至ては然らず。教訓に於ても詳細に涉り、實生活に現はれたるものを指摘し、神は天父なりと教へしが、彼は自ら教へずとも、其の行爲に於て眞に神の聖、神の愛を活現し、神の内性の事實上如何なるものなるかを顯示したるなり。

耶穌の行爲は神的なり。吾人もし茲に凡ての聯想より離れ、唯だ單純に、神もし人の世界に來りて行動せば如何なる事をかなすならんと想像せよ。吾人の神に付ての觀念もし原始的にして、スカンディナヴィアの神話や、希臘の神話や、日本の神話にあるやうの神ならんか、其の現はれたる神は地上にて少年の如く隨分戯れ暴びて、其の周圍には種々の跡を印するならんと思ふべし。されど基督教に由て得たる天の父の觀念を以て此の想像をなすときには、吾人の眼前には人間の現實の世界に神の愛の行動が

現はれて、應病投藥、種々なる行爲となること浮び來るべし。而して其の思ひ浮べたる所を以て耶穌が在世の時になせし所と比べ見よ。必ず相符合し居るべく、却つて耶穌の實際なせし所の方が、我等の想像の神の行爲よりも、いごと高潔にして又多端なることを發見せん。之を以て知る、耶穌の行爲は即ち神的なるものなることを、耶穌があまりに人的なるため、其の爲せる所また吾人の心を驚殺するほど奇ならず、従つて之を神のご云ふが却て不適當のやうに思はるれども、實は神的事それほど人に取りて奇怪なるべき理のものに非ず、奇怪にては神人の間は頗る面白からざるべし。以上の途に由て考へなば、耶穌の行爲の神的なるをば思はずして已む能はざるなり。耶穌の教訓は神的なり。其の天の内狀を分明に示し、其の神の心事を確實に顯はし、其の愛に溢れたる、其の權威を有する、其の能力ある、皆な此れ神の色の徵實質ならずや。人々も其の教訓を聞き畢りては、耶穌が學者の如くならず權威を有する者の如く教へ給ふを駭きあへり(馬太七、二九)。耶穌も自己の言ふ所は、決して人間の教に非ず、神の中より來れることを自覺し、猶太教の古法古訓にては、斯く言へど、されど我は汝等に告げん斯々せよと教へ(馬太五、二二、全二八、全三二、全三四、全三九)。父の外に子を知る者なく子及び子の顯

はす者の外に父を知る者なし(馬太十一、二七)。神來りて吾人に教へなばまさに耶穌の教を教ふと外は思はれず。耶穌の行ひし種々なる奇跡も神的なり。其は自然を超えて普通の生活に起らぬことゆる神の力を顯はすものとして神的なるかと云ふに、或は其點よりも神的話はれ得んが、其の善良親切の徹底的なる點より見て神的なり。旨なるものあり、跛なる者あり、癩病にかゝれる者あり、聾なる者あり。不幸を感じ、孤獨を感じ、汚を感じ、又罪を感じ。人間同志の爲す所は、之を卑しめ、之を厭ひ、或は之を家郷より逐ひ、最も善くして之に微けき助を與ふる以上に出でず。然れども茲に神來らんか。之を心の底より哀れみ、之を徹底的に幸福に回すことを計るべし。耶穌の行は即ち其なり。奇跡をはじめ凡て耶穌の行爲の美はしき所をば、後人が耶穌を崇めて神とせしより、必然的に其の周圍に衣裳したる神話なりと斷ずる者あれども、若し神話ならば、更に神力の偉大なるを顯はし、痛快を極むる奇跡の思想を以て之を衣裳すべきなり。神話は大抵これなり。然るに耶穌の奇跡のみは表面より見れば些々たる事どもなり。當時の讀者の心を新にし、之を喜ばしむるほどのもの更になし。神話としてはあまりに不相當なり。パプテスマのヨハネは耶穌の爲す所の斯くの如きを見

て怪み、其の果して救主なるや否を使を遣はして問はしめたりとさへあり。されどよし之を神話としても、神話は其の中心たる人物にふさはしき空想の影なれば、耶穌の奇跡が斯くの如き種類のみとなり居れるは、即ち耶穌が一に善良親切にして、其の行爲は専ら此の種のものなりしより來れりと思ふべきなり。唯だ奇跡のみならず、耶穌の坐臥進退は實に美はしく、聖なる愛の溢れ落つるものなるを示す。南船北馬席暖まらず、食する暇も、休む暇もなきこと多く(馬可三ノ二十、全六ノ三二)、睡眠は不足して暴風怒濤の間に舟中にて熟睡する程なりき(馬太八ノ二四、馬可四ノ三八、路加八ノ二四)。獨り靜に祈りせんとして退きても、尋ね來る群衆の顔に精神上の不安あらはれ、牧者なき羊の如きを見ては、之を憐れみ、起て種々のことを教へたり(馬可三)。彼は弟子等を愛したり。其の親切と薰陶とは彼等に不磨の印象と感化を與へ、彼等は後年に至り、犇と其の靈の中に耶穌を抱き、耶穌のために千辛萬苦し、耶穌のために死にたり。彼は肉親にも善かりき。母も兄弟ヤコブも熱心なる基督信者となりしは之を證す。而して耶穌はまた人の卑しめ惡む者、厭ひ棄つる者にも親切なりき。彼は税吏や罪ある人に交はり、又之を弟子とし、十二使徒の中にまで加へたり。之がために時人の躓き非難し輕蔑し交を絶つをも意とせざり

き。自ら曰く人の子の來るは義人を招かんために非ず罪ある人を招きて悔い改めさせんためなりと(馬太九ノ十三其他、馬太十ノ八ノ十一、路加十九ノ十)。彼は當時の人民が天刑病として厭ひ、家よりさへも逐ひ出だし、之に觸るゝ者をば汚れしとして、同じく交を絶ちし癩病人を憫み、之にさはり、幾人となく之を清めたり。彼は苦しめらるれども自ら謙りて口を開かず、屠所に引かるゝ羔の如く、毛を剪る者の前に黙す羊の如くして其の口を開かざりきと言ひし預言者第二イザヤの『主の僕』の理想を充たしぬ(以賽亞五ノ三七)。彼は又神の中に在るべき贖の行をなし之を自覺し居たり。神は自ら聖にして善、人を恵めども、人の罪のため自ら勞し苦みて、人を回復する活動をなす。耶穌は自らの爲す所また之なりと自覺し、我が來るも人を役せんために非ず、却て人に役せられ、且つ多くの人に代りて生命を與へ、其の贖とならんがためなりと言へり(馬太二十ノ二八、馬可十ノ四五)。實に彼の一生は神の己れを與ふる徳の現はれたるものならずや。其他耶穌の行爲は神的なり。耶穌の行動は確に神の行動にして、之を見るときは神の行動を見るときを得べく、耶穌は神の在ること其の天父なることを教訓にて教へしのみならず、神こゝに活動すれば如何なる行爲をなすかを示し、斯くて神の内性を顯示したるなり。

以上は耶穌の人に對する態度の中に、天父の徳現はれて、耶穌が天父を體現し、之に由て人に天父を顯示したるものなるが、此の外に耶穌が客觀的に天父に對立して取りし態度は最も明白に天父を顯示す。耶穌は實に神あるらしく一生の萬端を活きたり。口に神ありと唱へても、其の生活が神あるらしく見えねば、彼は事實上無神をあらはせるなり。然るに耶穌は常に無限至高の者の前にあるらしく、謙遜に又氣宇濶大に勇敢に生活したり。然も其の神は如何にしても父ならざるべからずと見えたり。彼は實に子の如く生きぬ。柔順にして全然神に信頼せると共に、自己は最も愛せらるゝものといふ自覺明白なること十分に見えたり。父は萬物を我に賜ふ、父の外に子を知るものなく、子及び子の顯はす所の者の外に父を知るものなしとは、如何に大なる自覺ならずや(馬太十一ノ二七、路加十一ノ二三)。耶穌は公明正大、濶達伸暢、一點の僻める所曲れる所なく、人を愛し、人を信じ、常に喜び、常に神に頼りたのめる所、全く神の子の姿にして、彼に對する神は實に父ならざるべからず、神が父ならずしては耶穌の行動は在るべくも在らずと思はしむ。而して一面には子らしく順ひ、神の心のあると信する所には、何處にも行き、或は曠野にまでも退き(馬太四ノ一、馬可一ノ十二、馬太十六ノ二一―二八等)、最後の來りし時は、

父よ御心に適はゞ此の杯を我より離ち給へ、されど我心をなさんとするに非ず、御心をなさせ給へと祈り(馬太二六ノ三九等)。柔順に十字架に到れり。スコット・リジェットが其の『贖罪の精神的原理』に於て、基督は人類の神に對して有すべき孝道を全うして、神に對して人の爲さゞりし道を盡くし、斯くて神を和らげ、人を容れしめたりと論せしも茲を見てなり(Scott Ridget, Spiritual Principles of Atonement)。耶穌は飽くまで子として神に信頼し、神は天父なりてふ確信を毫末も弛めざりしなり。彼の最後は随分悲惨なりき。否其の公生涯の少くも半は極めて悲惨なりき。然も此の間子らしき態度、父を信する信仰を一點半點動かさず、路加傳に依れば、十字架の上にて父よとて祈り(二三ノ三四)、傍にて悔い改めし盜賊に向ひて、今日汝は我と共に樂園に在るべしと宣告せし如き(二三ノ三四)、壯大とも驚異ともいはん方なし。彼を見ては神は實に父なり、彼に對して明に慈愛の顔をあらはし、慰め獎まし助けつゝありしことを信せざるを得ざるなり。斯くて耶穌は其の事實を以て神を顯示せり。

行爲の萬端が神的にして、其が一つだに矛盾せず、如何なる場合にも出で來る所の行爲悉く神的なりとせば、此は其の品性が神的なる故なりとせざるを得ず。確に耶穌

の品性は神的なり。耶穌の品性を見るときは、茲に神の人格を見ずんばならず。神の人格の内性如何にあるかは、耶穌の品性を見れば即ち分明す。吾人は耶穌の品性を見て、之より以上の品性なく、之より以上を理想し得ず、神あらば其の品性は即ち是れなりと思はざるを得ざるなり。故に耶穌は三に其の品性を以て神を顯示せるなり。耶穌の品性の神的なることは、其の教訓行爲の萬端が之を示し、又其の感化の深甚極大なること之を示す。

抑も品性は實體にして、行爲教訓は其の作用其の活動其の現象なり。品性神的ならずんば行爲教訓勿論神的なり得ず。よし装ふ如きことありても、根なければ鳥の着けたる孔雀の羽の如く、一觸の下に脱離し去るなり。然るに耶穌を見るに、或は得意の時あり、或は失意きはまる時あり、或は最親の弟子に對する場合あり、或は敵の中に在る場合あり、或は宴會の席にある時あり、或は法廷に在る時あり、十字架あり、復活あり、生活には大波瀾ありて、九天の上に昇り、九地の下に陥りしことあれども、彼の行爲も教訓も終始一貫せり。勿論耶穌の内部に發達の實なかりしに非ず。又機に臨みて耶穌の感情思想の反撥もなきに非ず。然れども其の根底には常に神らしき品性よ

り發すと思はるゝ行動あり。一たびも亂れしとなし。サマリヤ人の耶穌一行を納れざりし時、弟子ヤコブ、ヨハネは大いに憤慨して、主よ我等エリヤのなせし如く天より火を喚び降し彼等を滅ぼさんとす可きかと言ひし時にも、耶穌は之を責め、汝等の心如何なるかを自ら知らざる也。人の子は人の生命を滅ぼすために來らず、唯だ之を救ふためなりとて、終に他の村に行きたり(路加九ノ五—一五六)。彼は何時も愛なり。此は福音書に明なり。十字架の上にも愛の品性は周圍の者に對して流れ出でたり。ペテロの如き人は剛膽なりしも、耶穌捕はれし時には、覺えず三たび之を知らずと言ひしが、耶穌には斯かることなく、其のピラトの前、ヘロデの前に立ち、狂せる大群衆の吼哄の中に立ちても、一點其の品性にふさはしからぬ所なく、如何なる場合にも常に神的なりき。此れ初代の基督信徒が、彼を主とし神の子として崇めたる最大原因なり。パウロの基督論の出で、約翰傳の基督論の出でし所以なり。否既に耶穌生存中より、ペテロが汝はキリスト、活ける神の子なりと絶叫せし所以のある所なり。

其の感化の大なるはまた品性の神的なるを示す。世界あつて以來、未だ耶穌ほど感化の大なりし品性はあらず。宗教家などいへば、たとひ大人物にても、直ちに禮拜

を受くるに至るものゆゑ、唯だ神的なり偉大なりとせられ、其の人格の形式のみ仰がれ、信徒より拜まれても、實際其の品性を感化し、死者を生かし、新らしき人物とするといふことは消滅するものなり。然るに耶穌は主と崇められ、永遠の神の言と仰がれ、讚美せられ、祈りをさへげられつゝ、而も其の人を化するの力は代々綿々として盡きず、其の生命は直に瀰り、之に接する者を生かしつゝあり。此は如何なる懷疑者も反對者も否定する能はざるなり。斯くの如き感化を有する品性は、之を神的と謂はずして何ぞか謂ふべき。電氣は壓力強ければ強きほど、水中遠く其の電波を及ぼす。全世界を永代に感化し、之を救ひて神に歸せしむるほどなる大波動は、其の源に無限の品性の壓力なくしてはあるべからず。神の中には此の壓力あり。神の愛は至大至強にして、全世界を回復するに餘りあり。此の愛耶穌の内に在り、此の感化のみ無限力を發揮するなり。彼を見るものは神を見る者に非ずや。約翰傳十四章九節の言こゝに於て眞なるを知る。

耶穌は教訓に於て行爲に於て品性に於て神を吾人に顯示したるものなり。

乙、神は耶穌に顯現せり。以上は耶穌の方が神を吾人に顯はし示したるものなり。然れども之と共に神の方より耶穌に於て自らを顯現せる方面あり。顯現は顯示と異り、主觀的に自己を開展し、自己の内部に在るものを實現し、以て人に己れを開示するものなり。故に耶穌の神に付ての顯示は神の客觀に立ちて、神を説明し代表し、神の意を行ひ神と合一せる品性を示して、人に神を知らしめたるものなれども、神の耶穌に於ける顯現は、神の方より耶穌の人格を起し、又耶穌の人格の内部に活動し、耶穌の品性を生じ、耶穌の世界救拯の大活動をなして、自己を顯現したるものなり。神は確に自己を顯現す。神の顯現としいへば、直ちに見えざる神が形を取りて人に顯はれ、人に託宣するといふ如き思想を抱く人多し。確に古代の顯現思想は是なり。何れの野蠻人にも、此種の信仰あり。何れの國の物語にも、此の種の傳説は充滿す。基督教の顯現の信仰また此種の思想ありしこと多きは争ふべからず。耶穌は神の顯現なりてふ信仰は、天に在る神が、此地に降り來りて、肉體を纏ひたりといふことにて、其の極まるものは初代のドケタイ派の如く、耶穌の肉體は現實に非ず、唯だ人の目に見ゆる假の姿のみといふに至りたり。今日にても基督信徒の中には同じ傾向の信仰を

有し、耶穌は神が唯だ人の貌を取りて現はれたるものと考へ、實は斯かる信仰は最も非基督教的にして古代にては、異端とせられし所に傾けるものなるを覺らず、之を正統の信仰と思惟して、斯く信せざる者を非難恐怖する者頗る多きが如し。然れども此の種の顯現は實際上少しも價值なし。神が人の貌になりたりとて唯だ其のみならば如何程の事あるや。基督が天より雲に乗り十二軍の天使を率ひ來りたりとて何の甲斐がある。神の顯現といふはさる種類のものなるべからず、神が活動して自己の内部に在るものを實現することなり、之に由て人に知らるゝことなり。抑も人格なるものは必ず自己を顯現す。吾人が物を言ふ、事を行ふ、一として自己の内部より發せぬものなく、従つて自己の顯現ならぬはなし。吾人が著作する、講演する、善をなす、惡をなす、凡ての活動は自己の内部に在るものを活動して外に現はすことならずや。善き樹は善き果を結び、惡き樹は惡き果を結ぶ。吾人の内部に愛あれば其は活動して外に出で人を愛するの思想言語行爲となり、惡あれば又惡の思想言語行爲となる。然も此の自己實現は動物の自發的動作や植物の必至的活動と異り、自己の意志を以て自己の精神に在るものを繰り出だすことなり。吾人が哲學を思想し組織する、繪をかき像を彫

る、又神を思ひ其の内性に觸るゝ、皆な吾人の内に在るもの、發現なり。文章にせよ、彫像にせよ、筆や墨や紙や、刀や槌や石やの變形には非ず、吾人の内部の現はれたるものなり。人格なれば必ず此の顯現をなさずして已む能はず。顯現なき人格は内性なき人格にて死せる人格なり。否、さる人格の初より有らん理なし。神は絶大の人格なるが故に、必然の理として、又事實として此の顯現あり。而して神の此の顯現に、間接顯現といふべきものと、直接顯現といふべきものとの二種あり。

間接顯現といふは神が直接に自己を顯現せんと意識し、之を目的として爲せる事ならず、唯だ他の目的を以て爲せるなるに、其が即ち自己を顯現することゝなれる事を云ふ。天地間の殆ど凡ての現象事物は、皆な此の間接顯現なり。神が天地萬物を創造するに當りて、何の動機に依り、何の目的を以てせしか、此は唯だ吾人の推測に委され居りて、確定すべき限のものにはあらず。然れども單に狭き意味の自己顯現を目的として此の宏大無限なる創造が行はれしにはあるまじ。狭き意味の自己顯現とは、女が自己の姿を映さんと欲して鏡に向ふが如く、文學者が自己の生涯を傳へんと欲して自叙傳を書くが如く、又は青年政客が唯だ自己の存在を他に示さんとして演壇に飛び出

づるが如く、乃至は中學生が自己の現在心に感じ居る節を其のまゝ言ひ顯はさんと志して雜誌に投書するが如く、直接に自己人格の形式又は内容を實現することを意識して活動することなり。神は之を專一に目的として天地を創造したるにはあるまじきも、兎に角神が何等かの動機に依り何等かの目的を以て天地を創造し、之を指導し、之を支配せる活動は、即ち神の内部に在るものを活現させしにて、確なる自己顯現に相違なきなり。

自然界は神の内部の顯現せるものなり。自然界を平板的に見れば、森羅萬象雜然として然も整然たり。スピノザは萬象は波の如く神は海の如し。萬象は神の大平等の中の差別相なりと考へたり。スピノザの思想する如く自然界や靈界が神其自身の體用差別なりと思ふべからざれども、自然界は創造せられたる物として、其の創造者の内部の顯現なり。一個の器械は如何にしても器械師なくしては存在せず。一個の器械は器械師乃至其の發明者の一種の自己顯現なり。宇宙は宏大なる器械なり。創造者其自身には非ざるべく、直接に創造者其自身を此中に見る能はずと雖も、確に創造者が自己の内部を持ち出だしたる活動の結果なることは明なり。即ち神の自己顯現たるなり。

又天地を時間的歴史的に見れば、天地の奇妙は更に驚くべく、天地總體は生くる者の如く、眠より醒めて、次第に首を擡げ、起き上りて、前に進み行くものゝ如し。もと極めて單様なりしもの複様となり、下等なるもの高等となり、生命なき所生命ある所となれり。生物にも極めて微細の單一細胞體のみ存在せしと思はるゝに、驚くべくも發展進化して、今や種別數へ難く、下より上までの階段限りなきに至れり。天地の初と今日とを比較せば、其の形、其の内容、實に想像も及ばざるほどの變化をなせり。此れ神の遠くより立てたる經綸に依り、又神の干涉指導推進に依るか、然らざるも神の大生命の絶えざる創造に由ること勿論にして、神の内部に單純なるものを複雑ならしめ、無生物の中より生命を出だし、下等なる生物を高等に至らす所の力存するが故、茲に至りしものにして、即ち神の内部の顯現に外ならず。特に此の經綸を立てしといふ觀念を取るときは、此の經綸を立つるといふことが、非常に高き精神の活動にして、神の思想には、未成の天地の姿が、其の理想として鮮明に畫かれ、神は此の理想の書を靈眼の前に展べて、天地を創造し之を指導せしことなれば、此は又實に高貴なる自己顯現たる也。此の觀念は目的論と稱せられ、今や之を棄つる學者もあれど、

其は多く局部着眼のためにして、目的論は然かく弱きものに非ざるなり。

自然界の上には靈あり。人類てふもの存在して、自然より超脱し、其の靈に依て活動し、自らの意志にて諸の行動をなし、自ら向上の途を選び取りつゝ、進歩す。靈界の現象は自然界の現象と共に雑多なり。吾人の日常の行動は、皆なこれ靈界の活動たり現象たり。人は自然界より生れ出でたり。人には自然界の自然所出たる本能衝動あり。自ら何等思想する所、選擇する所なくして、唯だ自然の性に從つて行動することあるなり。然れども斯くの如き行動のみをなすものは人にして尙人たるの行爲をなさざるものたり。人の行爲は自ら思ひ自ら選ぶで行ふことなり。即ち自由の行爲なり。此の行爲この世界に存在するは明なり。斯くて道徳も、學問も、哲學も、宗教も現出す。斯くの如く靈の存在するは、是れ亦明に神の内部の顯現に非ずや。神は自然界を造り、之を導きて進歩せしめ、其の頂に人を生じ、其中に靈を喚び醒ませり。人は睡より醒めたるもの、如く、自覺して自己の内部を省み、茲に我が存在を知り、又外を眺めて茲に非我を知り、有限を知り、無限を思ひて、終に其の思想は神に達す。神は自己を顯現して自然を造り人を造り、人さめてまた神を顧みる故、神の自己顯現は光の出で

て鏡に遭ひ反射する如くなりしなり。確に人の靈は神の自己顯現にして、人の靈の内部には神の指の跡印し居り、其の磨ける面には神の姿映じ居れり。然かのみならず、靈には歴史あり。然り眞の意味の歴史は靈に於て在り。人類は原初時代より向上進歩して今日に至れり。人は自ら選びて自ら向上し、幾億年にして此の大なる文明を築き上げたり。斯くの如く不思議なる靈存し、此の靈に斯くの如き内含力あり、此の靈斯くの如き作用をなし居る以上は、此れまた之を造り、之を導く所の神の内容の顯現と謂はずして何ぞか謂はん。確に靈の存在も其の歴史も、全く神の自己顯現に外ならず。人の學問も道徳も哲學も宗教も、皆な神あるが故に存在し、神の内面の現はれたるものなり。

直接顯現とは神が直接に自己を題現することを目的として爲せる活動なり。神は自然界と人類とを創造し、之を發展させたることに於て自己を顯現せり。されど此の自己顯現は神の直接目的に非ざりしなり。然れども神は自己顯現を直接目的として活動すること無かるべからず。人間も之をなせばなり。吾人は常に我が人格の内部に在るものを、他人に顯はさんとして之を顯はす。子が思の丈を親に向つて訴ふ、親が子を思

ふ切なる心を書翰にて通ずる、美術家が心中に鮮明美麗なる像を眺め入りつゝ、之を石に彫り、畫布に寫す、皆なこれ意識せる自己顯現なり。神と人との間は造物主と受造物との關係なり。父と子との關係なり。人も神より造られしといふのみにて、凡て自然の成行に委せて、何事も運命と諦め、何事も求めずして在るといふこと能はず。必ず自ら自然以上に出で、神に訴へ神に求む。神も人を造りしまゝ、其の自然の成行に委せて、人如何になるも顧みず、其の爲すに放任すといふこと能はず。神にして心あらば必ず又自然以上に出で、人に訴へ人を動かすべし。茲に於て超自然てふことあり。

超自然といへば直ちに自然の法則に反することのやうに解する者多けれど、超自然とは自然以上のことなり。此の超自然は吾人各自が既に其にして吾人各自は刻々超自然のこゝをなしつゝあり。吾人が何事か自ら爲さんと志して爲す時は、其は既に超自然なり。何となれば志といふものは全く靈の作用にして自然界のものにはあらず。吾人が肉慾に反し快樂に反したる事をも敢て義のために行ふといふは、如何にしても自然の因果にて解釋すべからず。自然以上のものゝ活動なり。即ち吾人の靈が自ら判断

し、自ら目的を立て、行ふ也。神は絶大の靈なり。茲に於て自然の成行以上に自ら目的を立て、爲さんと志して爲すこと當然なり。神は自然界と其の歴史、靈界と其の歴史に於て、若々自己を顯現しつゝありと雖も、此れ自ら専ら意識して自己を顯はさんと志してせるに非ず。唯だ活動せることが自己顯現となれるなれども、又自ら自己の内部を實現せんと志して活動す、此の超自然の顯現をなすなり。

何をか直接顯現といふ。神が人の靈に自己の現在を識らしむることなり。又神が人を愛して其の愛を感覺せしむることなり。又神が自らの感化を注ぎ自らの精神を作用させて、人の人格の中に神の内性を造ることなり。斯くて自己の像を生ずることなり。神が人の靈に自己の現在を識らしむるは眞に自己顯現にして、此は大古より常に存在せり。平凡の人は殆ど神の現在を感覺すること能はずして終れど、靈的の才能非凡にして、靈覺鋭敏、靈界の真相の鮮明に見え聞ゆる者には、神の現在は確實なる事實なり。されど之を彼の見神の經驗と同一とする勿れ。見神の經驗は現實か幻想か吾人は知らず。されど純然己が靈に於て神こゝに在し給ふと感覺せられて、此の意識抹すべからず、或は罪を悲み、或は獎勵を感ずるは即ち神が其の現在を示したるなり。神存

在し神活動する者ならば、此は固より無かるべからざることなり。又神は單に現在を示し、其の人格の形式を示すのみなるべからず、人格の内面を示さざるべからず。之をも人に正義の念を興へ、愛を吹き入れて示すなり。然れど唯だ之を觀念として示すのみならず、神眞に人を愛して、眞の愛を示すなり。此も古より大天才に於て在りたることなり。彼等は神に愛せられ居れるを見出だし、神の温き懷の中に在る自己を見出だし、神の懷の内面を知りたり。神はまた斯く客觀的に自己を示すのみならず、自らの内性の力を動かせ、其の内性を人の靈に注ぎ、人の靈の中に之を滲入せさせ、斯くて人の靈を徐々陶冶し化質し、之を神の質と同じからしめ、斯くて其の人の内面實質の中に自己を顯現す。斯くする時、神の姿其人の内に成り、其人を見れば神を見ることとなる。此れ神の直接顯現なり。

神の顯現はこゝにまで至らざるべからず。宇宙の萬物は皆な神の造りしものにして、従つて皆な神を顯はせども、初のもの劣等のものには、神の現はるゝこと甚だ弱くして、其光薄し。高等なる物となるに従つて光加はり、神の面目を思はしむ。人に至ていよいよ明なり。而して最後には神の人に現はれ得る限りのものが現はれ居るもの出づべきなり。

つべきなり。

一、耶穌の人格は神の間接顯現の至極せるもの也。神の意志は一つ又一つ行はれ、神は其の内に着々自己を顯現し行けり。自然界の裡に自己を顯現し、人類の靈に於て自己を顯現し、其の發展向上に於て自己を顯現す。而して人類の靈の發展向上を見るに、徐々人と人と相關する道の如何なるものなるかを見出だし、朦ながら愛の人類間に充ちて、之に依るとき人類社會維持と進歩の途開くるを見出し、更に徐々神を意識し、之を其の真相に近づいて觀、一代は一代より高く、一民族は一民族より高し。道徳の進化、宗教の進化、眞に正しく行はれて、人類は兎に角に目を開き來れり。自然界の中より出で、醒めて茲に至り、更に不停の發展をなす、祝福の至りと謂ふべし。而して此の道徳宗教の進化の方向は何れに在るか。其の發展の標的は何れに在るか。若し之を他に求めても吾人は決して定まりたるものを知ること能はざるなり。然るにナザレの耶穌の人格と其の生活を至れば、吾人は忽ち求めて得ざるものを茲に發見し、驚喜雀躍の感なくんばあらず。吾人は前に言へる如く耶穌に於て人性の完全を見、又人性の理想を見る。大古より人は他人に對しては如何に生活すべきかを探

り求めたり。然れども、耶穌が汝の如く隣を愛すべしと教へたる教の中、又耶穌自身
 が之を實現したる生活の中には、人の道德の燒點結ばれ、是にて古の凡ての道德思想
 も實行も完結せられ、之より將來の如何なる事情に應ずる道德も發出するならずや。
 又大古より人は神に對する道を尋ね來りたり。然れども耶穌が神は天父なりと教へし
 教の中、又耶穌自身の之を實現したる生活の中には、人の宗教の燒點結ばれ、凡ての
 律法と預言者は茲に成就し、茲より宗教の諸の形發出すべきならずや。宇宙の進化は
 人性に於て結ばれ、人性の進化は基督の人格に於て結ばる。基督の人格は三尖塔の頂
 點の如し。宇宙萬物みな此の點を望みて進化し、茲に至て其の目的を達せり。宇宙萬
 物神の顯現にして、人性は此の顯現の冠、而して耶穌基督は此の人性の完成昇極した
 るものとすれば、耶穌基督の人格は即ち神の間接顯現の絶頂に非ずや。神は其の無限
 に高き所より自己を注ぎ出だして宇宙を創造したり。故に高所より引かれたる水の常
 に上へ上へと向ひ、口を求めて噴き出ださんとする如く、萬物は常に上へ上へと目指
 し、神の性を噴き出ださんとしつゝあり。進化茲に於て起る、進化の状態を見るに、
 其の勢甚だ猛烈にして抑へんとして抑ふべからず、多くの障害ありても尙之を排して

進化せり。決して車や唧筒を以て擧げたる水の如くならず、下に充ちて常に噴出せん
 とする水の如し。源非常に高きに非ざるよりは是あるべからず。然り神のこの性は生
 物の内に睡りつゝも尙無意識の進化を起し、終に靈なる人に於て向上の意識となり、
 代々高を求めて發展し、預言者となりて噴き出で、聖者となりて噴き出で、最後に耶
 穌基督となりて噴き出でしに外ならぬなり。
 此故に耶穌の人性は即ち神性なり。耶穌の人格の神性と人性との關係に付ては、古
 より大なる議論ありたり。今尙神學者の中には斯かる様式を以て思想をなし、互に議
 論する者あらん。古代の神學論争の題となりし如き神性人性の關係は眞に難解の問題
 なり。ナザレの耶穌はマリアより生れて而して神の子なり。或は神が人となりたるも
 のなり。其の人たる性は存在するや、又は神なるが故に人たる性は存在せざるやと問
 はし、容易に答は與へられじ。然れども耶穌はマリアの子なり。又耶穌には萬事人の
 性が具はりたり。此の人の性は神の性と全然同種のものなるは十分考ふべし。何とな
 れば人は神に依て造らる。神は自己の内部を持ち出だして人を創造せり。また自己の
 内部に在る思想を働かせて人に付ての理想を立てたり。皆な神の内のものなり。人は

此の如くして生じ、此の理想の方に進み行きつゝあり。故に人性は神性の中に在るもの。人性と神性とは同一種なり。若し人性の人ならば同時に神性の人といふことを得べし。勿論神性は人に盡きざるべし。人性となれる者の以外に神性は豊富無限なるべきも、兎も角も人性は神の中に在り。否々吾人々類に見ゆる神性の凡ては殆ど夫れ人性のみ。吾人は神を人格者と知る。吾人は神の知を言ひ情を言ひ意を言ふ。吾人は神の愛を言ひ正義を言ふ。此れ皆な人性ならずや。一派の人々が基督教其他の信仰を以て神人同形観となすも其の理由は茲に在り。されど人は之より以外に出づる能はず。人の神に付て知る所は之のみなればなり。然れども吾人普通人の人性が直ちに神性を顯はせるやと言はば、其は極めて光薄く顯はせるならんも、吾人は甚だ不具的に神性を顯はし居るものと謂はざるべからず。其故如何と言ふに、吾人の人性其物が實に不具の姿にして、缺陷あり病疾あり、目もあてられぬものなれば、之が神性を顯はせりとは言ひ難し。唯だ神性の罅けたるもの、蝕したるもの、歪めるものを顯はすと謂ふべきなり。吾人は神より造られ、吾人の人性も神の自己顯現には相違なからんが、人類は幸にして又不幸なるものにて、自然物になき靈あり。其の自由あり。此の自由の

ため自己また創作を始め、善をも創作して神と合ふと共に、惡をも創作して神と離れ、神の經綸を破り、神の秩序を亂す。茲に於て神より造られたるものながら、品性行爲は、神の顯現ならぬに至る。唯だ正則の人、完全の人、理想の人は、即ち人性を圓滿に具へ、正當に發達せるものたるが故に、茲に神は顯現し居れるなり。耶穌基督の人性は即ち是なり。故に基督の人格は神性の人格なり。

吾人耶穌の人格を實際に見るに、確に神の此の顯現なることを認む。約翰傳によれば耶穌は我を見し者は父を見しなりといふ意識を有し、萬事父を己が品性や活動に於て顯示する目的にて言行したるが如きも、此れ後年棺を蓋ひて後耶穌に付て其の徒の論定まり、此の定まれる信仰の目を以て耶穌の教を觀て筆記したるものにて、耶穌が其の在世中如何は斯かる意識を有せしやは不明なり。固よりさる意識を以て示したる所も少からざるべしと雖も、然も耶穌は自ら神を顯はさんと意識せず、唯だ人を愛するよりして爲したる所、其が却つて神の顯現となれること多きが如く、神また耶穌を以て自己を顯はさんとせしに非ずして、唯だ耶穌の人格に於て世人を愛せしことが、却て神の内性の顯現となれること多きが如し。凡て人格者は斯くして自己を顯現する

ことが多きなり。品性の劣れる者は、自らを善き者として顯はさんとして、張膽明目、苦心慘憺として善き事をなす。然れども其の不用意の間、爲す所言ふ所に、直ちに其の人格の醜劣を暴露し、是等の行爲に由て自己を顯現し了る。諺に問ふに落ちずして語るに落つと言ふもの、孔子が人いづくんぞ隠さんやと言ふもの實に茲に在り。善き品性のものは之に反す。何を目的として爲すことにても、其は皆な善き品性の顯現たるなり。耶穌基督に於ける神の顯現、實に神の人格の正義と愛とを、何事にも顯現せるものなり。基督の品性と其の行動とが、神の顯現として尊き所以の一つも茲に在り。勿論自己の内性を實現することを目的として行動したる所決して價なきに非ず。徳高きものが自己の理想を充實せんとして高尚なる事を行ふ。茲に大なる價あり。神その内性を實現せんと意識的に志して爲す所豈價の卑きものならんや。然れども前にも言へる如く、唯だ自己を示すため、又自己の理想を實現せんことを意識し、此の念を以て善をなすのみならば、神はあまりに主我的にして、之を愛なりといふべからず。愛は自己てふ意識を忘れたるものなり。少くも之を忘れたる部面あり。他人を愛して其の幸福のために活動し、自己の如何を全く忘れたる所なくんばあるべからず。此の自己を

忘れて爲したる所に、却つて自己が現はれ來るなり。耶穌基督の品性と活動は、實に人類を愛するために現はれたるものなり。其の諸の現象の凡ての針の指す所は、唯だ人類のためといふ所にあり。三年の苦勞も、最後の十字架も、『多くの人に代りて生命を與へ、其の贖とならんため』といふ所を指す。決して神を人の眼に明に示さんため、又は神の内性は愛ゆゑ、神の内性の愛を實現するためといふ意識あるに非ず。唯自づから基督は其の品性により斯かる生活に出でざるを得ざりしなり。神は自づから其の性格により基督を茲に至らせざるを得ざりしなり。此の自づからなる所、却つて茲に神は自らを顯現したるなり。聖書に於ける耶穌の奇跡の記事を見るに、耶穌は病を癒やし、跛を歩ませ、啞を物言はせなどさせしも、之をなすに當りて毫も彼等の信仰もしくは服従を報酬として求めしことなし。汝我を信せば我助けんとか、我れ助くる故に汝信せよとかいふ風のごとは、殆ど之を見出だすを得ず、彼は唯だ所々を遍歴して、其等の不幸のものに遭ひ、若くは其等の者の携へ來らるゝに會ひ、之を憐み、其の不幸を除かんとして奇跡を行へるを見るのみ。茲を以て彼に恩を受けし者にて、大多數は其のまゝ去り行きて何所へか影を潜めたるなり。十人の癩病人を癒し、時に

も、歸り來りて感謝せしは唯だ一人ありしのみ(路加十七ノ十一―十九)。彼は唯だ親切を施したり。茲に然れども彼の人格顯現せられ、茲に彼の尊き所あり。我國に於ける宣教師などは此點に於て誤れると多し。彼等は多く英語を教へ割烹を教ふ。眞によし。されど彼等は之を以て傳道の方便となす。茲に至て純清なる親切に非ざるなり。其の故にや斯くして信者となりたるものは大抵力弱し。信者にならぬ者は一層質惡し。其は眞に理由あることなり。余は常に曰く、親切は純清に人を愛する心より行ふべし。人は基督教を聽かすためと思ひて行はば、たとひ傳道のためといふも既に方便なり。よろしからず。傳道は傳道として行ふべし。英語や割烹を受教する者のために絶えず救を祈ることとは最も可ならん。さすれば却つて眞の心より感應して神を信する者を出だすべきなりと。其等の宣教師や其他は須らく基督の跡を學ぶべきなり。神の愛は我は汝等を受するぞと示さんために活動し、若くは我は人類を愛する者ゆる此の場合には斯くせざるべからずと意識して、自らの内部を實現するよりも、唯だ人類を愛する心から、自らの意志を以て善なる行動を取りし所に於て、神の内部を顯現し居れる也。聖書記者等は神の内部が耶穌の品性行動に於て、自然に顯現せられたるを考へしこ

と切なり。パウロ曰く基督は我等の尙罪人たる時我等のために死に給へり、神は之に由りて其の愛を彰はし給ふと(羅馬五ノ八)。約翰傳に至りては全篇みな此の思想なり。それ『言』肉體となりて我等の間に寄れり、我等其の榮を見るに、實に父の生み給へる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充てり……未だ神を見し人あらず、唯だ生み給へる獨子即ち父の懷に在る者のみ之を彰せり(一ノ十四―十八)といふ語や、我を見し者は父を見しなり……我は父に居り父我に居ると我が告げし言を信せよ、もし信せずば我が事わざによりて信すべし(十四ノ九―十一)といふ語なども、余が此項に論じたる點をも言ひ顯はせるものとして見るべし。基督自身の人格、又其の行爲は神の顯はれたるものと信せしなり。耶穌自身また之を自覺し居たり。路加傳十五章にある牧羊者と貧しき婦の譬を見よ。牧羊者は百匹の中一匹の羊の迷ふとき、之を尋ねて曠野の中、荊棘の内までも至り、尋ね得るまで已まず。貧しき女は十枚もてる金子の内一枚を失はば、燈を點し、家の隅々まで掃除して、探し出だすまでは已まず。神は一人の罪ある者のためにも之に似たる苦心をなして、其の挽回に盡力すとの意を含めり。而して此の教訓は稅吏ザアカイの家にて食せし時、パリサイ黨の者どもの惡評せしを耳にして語れる所にて、馬太

傳九章九節以下の税吏マタイの家にて食せる時の記事と頗る相似たり。而して馬太傳の方にては耶穌はパリサイ黨に答へて、健全なる者は醫者の助を要せず、唯だ病ある者之を要す、夫れ我が來るは義人を招くために非ず、罪ある人を招きて悔い改めさせんためなりとあり。されば基督の意識には、罪ある者を招きて救はんとする運動は牧羊者の如き慈愛の天父の活動にして、而して己れは此の運動をなしつゝあるものとの自覺ありしなり。即ち知る耶穌は自己の行動に於て天父の内性その意向が實現せられつゝあるを自覺せしことを。其他馬太傳二十章一節より十六節まで、同二十一章三十三節より四十四節まで、同二十二章一節より十四節までの、天國の教訓の如きも、其の中には所謂世末觀ありて、果して基督の言を其のまゝ寫したるものによと思はるゝ節なきにあらねど、然も其の一面には神が人類、少くもイスラエル人を挽回せんとして非常に根深き運動をなしつゝある中に、自己の現出は其の結論とし冠として置かれたるものたるを自覺せることは明に見え居れり。或は最後に高き所よりエルサレムを望みて、噫エルサレムよ、預言者を殺し汝に遣はさるゝ者を石にて撃つ者よ、母鶏の雛を翼の下に集むる如く、我れ汝の赤子を集めんとせしこと幾度ぞや、然れど汝等

は好まざりきと慟哭せるときにも、此の自覺の鮮かなりしは勿論なり(馬太二三ノ三七、路加十三ノ三四)。

耶穌基督自身の人格、其の品性は、神が永遠の昔より活動したる活動の中の、最も高きものにして、従つて神の間接的自己顯現の絶頂なり。耶穌基督の行爲また神の活動を起せるものにして、又神自身の最も高き顯現なり。吾人は神の間接顯現の至れるものとして耶穌の人格を見る。

二、耶穌の人格は神の直接顯現の完全なるものなり。神は自己の内面を顯現することを直接目的とする活動をなす。神の顯現は唯だ他の目的のために活動せることの中に、自己の内部を持ち出だせるに止まらず、自ら意識して人に向つて自己の内面を開披し、又自己の内性を注ぎ出だして自己を顯はすなり。此れ顯現の最も嚴密なる意なり。レウエラチオ Revelatio といひ、アカクルプシス *apokalyptis* といふ語の意義は、被覆を除きて隠れたるものを顯はすてふことなり。神は此の顯現をなす。

神に此の顯現あるは當然のことなり。何となれば此れ人格者必然の要求なればなり。人格者は必ず自己を顯現せんことを要求す。無人の島に獨り居ても、必ず濱邊の砂に字を書き、岩窟の壁に畫を刻みて、自己を顯はさんことを欲す。人と人と相對すれば、

互に其の内部に在るものを開示せんとを切望す。人種異り言語異りても然り。此れ人間が本より社會の中に生れ、既に原初の人類より、否動物時代より、此の性格を遺傳せるにもよらんが、また一つには人格なるものが本來さる性質なりといふことを得べし。さる性質なるが故に相集る所に社會生じ、益々此の性向を養ひしものにて、若し人格が互に相反撥すべき性質のものたりしならんには、社會も生ぜざりしこと明なり。人格には此の性あり。此れ言語の起り、文字の起りたる所以なり。親は子に向つて常に自己の内部を顯はさんと欲す。故に子若し遠く遊ぶが如きことあるときは、母は其の子を思ふ己が心を細々と水莖の跡にあらはして、之を遙に子に與ふるなり。友人の間また然り。互に内部を顯はし、彼よりも顯はされ、其の共通一致を見て喜び、其の相異を見て或は傲ひ或は諫む。否世を果敢なみて死なんとする者すら、全く自己の隠れて埋没するを欲せず、己れの内心を書き遺して死ぬるなり。されば自己の顯現は人格の稟性なり、其の本來の性質なり。特に大なる人格と小なる人格と在るときは、大いなる人格は最も切に自己を顯現せんことを希望す。例へば愛ある親や、親切なる教師は、其の子其の弟子に付て常に自ら理想を畫き、此の自己の内部に在る理想を子弟

に示し、子弟を引て茲に上さんとする。凡て斯くの如き自己の直接顯現あるが故に人類の社會には進歩ありたるなり。人常に自己を顯はさんとする故に言語あり文字あり。言語文字の生せしたため、人類の靈的歴史の進歩は無限なるものとなれり。又自己の直接顯現あるが故に、大人格が小人格を導き、之を自己よりも高きものとすることも得たるなり。美術家が美術をなすは、即ち自己の顯現のためなり。我が内に溢れ活くる思想を顯はさんと欲し、丹誠を凝らして作りたるが其の作品なり。文學者の著作また自己の内に鬱勃たるものを顯はさんためなり。哲學者の大系統また自己の内に在るものを顯はさんためなり。文明は人間が自己を顯はさんと志して爲したる事業に由て飾られ又押し進めらる。されば絶大の人格者たる神に於て此の直接なる自己顯現あるは當然なり。天地間に神のみ在りて、神より以外何ものも存在せざりし時と雖も、神は人格者たれば何等か自己顯現をなしたることを推論し得べし。停滯不活動は神の本性に非ず、また後に宇宙の生りたるを見て、神の本性は停滯不活動にはあるまじく思はるればなり。神學者が天地創造も神の自己顯現のために起れりと考へしも、必ずしも無理なりとすべからず。然れども其は茲に問ふを要せず。神の經綸によりて人類この地上

に存在するに至りて後は、神は如何にしても自己の直接顯現をなすべかりしなり。神は人格者にして人類も人格者なり。此の間豈冷々として沈黙無交渉に終るべけんや。人が自らの内部を顯はして天に向ひ神に祈るが如く、否其よりも先に、其よりも切に、神は地に向つて人に自己を顯はすべきなり。特に神と人との間は、大なる人格と小なる人格、父と子との間なりとすれば、神は人について思ひ計り、鮮明なる理想を其の眼前に置き、之を人に開示し、人を導きて常に此の實現に引き上ぐることは、此れ理の當然として思ふべきことなり。

然かのみならず、神が直接に自己を顯現するは甚だ必要なり。之なくしては宗教も固よりあるべからず、また人類の文明もあるべからざるなり。抑も宗教は人の方より神を探り求むる運動なり。此はフランク・バイロン・ジュボンズも世界の諸宗教を研究しつゝ定義しあり (F. B. Jewons, An Introduction to the Study of Comparative Religion)。故に人類在れば自然に神を求め自然に宗教起るなり。然れども其のみにて宗教の完全に至らんことを期すべからず。此れ自然宗教にして極めて幼稚なり。其の高等なるものに至れば唯だ哲學となりたり、一向に人を生かすの力なし。人は神を知ること極め

て朦にして已まん。此に於て神の方よりする顯現は大いに必要あり。神は人の知識の權威の外より進み出で、自らを人に示して、茲に神を知らしめざるべからず。斯くして神の知識非常に開け従つて宗教大いに發達す。人間同志の間にも、若し甲が乙に就て考へ、乙を外より知るのみにては、たとひ綿密に視察し、其の一言一行を見落さざらんぞ勉めても、其の知識は尙不完全なり。乙より進みて胸襟を披き、腹藏を吐露して、始めて兩者の間全き理解あり、交情密なるを得るなり。特に小者が大者に對するとき、大者自己を自ら開示せず、其の理想を告ぐることもなくば、小者は幾年経ても終に大者を理解せず、其の腹中に入り行くを得ず、其の感化を受くる能はざるべし。まして神の無限なる。若し人よりのみ探り求むるならば、其の知る所は極めて狭く、狭きは可なりとしても誤れるものとして終らざるを得ず。唯だ神の方より自らを顯現し、或は人の靈的直覺に入り、或は人を感化し、其他様々の活動をなすによりて、人は神を知ることを得、又神に動かされて新たに意志を立つることを得、斯くて宗教に一大躍進を來たすなり。既に神に付て知識に一變化を起し、意志を動かさるゝに至れば、萬事は茲に新となる。道徳は新しき理想を得て、新しき方面に新しき力を以て進

み、一切の知識にも新生面開かれ、諸方面に發展の歩を進む。茲に於て文明に變化あり人類に大いなる革新起るなり。神の直接顯現は茲に於て必要なり。

此故に神は大古より直接顯現したり。宗教的才能の特に秀でたるイスラエル民族の歴史には、特に神の此の直接顯現と見るべき節多し。イスラエルの先祖アブラハムの物語は、何れの點まで史的なるや勿論定め難しと雖も、兎に角アブラハムなる人物ありて、神に接し、神と物言ひ、神と契約を結びたりと言ひ傳へらる。當時幼稚なる自然宗教のみありしカルデアに於て、アブラハムは獨り大いなる靈の現在を意識し、其の自己と子孫とに對する恵を感覺したるものなるべし。アブラハムの孫ヤコブに至りては、また最も宗教的感鋭敏にして、屢々神の現在を意識し、神との争ひを意識し、神の最も近く護れることを意識したり。降りてアモスは神の正義の徳を感じ、神のイスラエル民族を憤るを感じ、神の靈に動かされて預言したり。斯くの如く神は或は現在を意識を與へ、或は人を愛し、或は其の内性を人の直覺に示して、人の靈に向つて自己を開示したり。此の開示ありしが故にイスラエル宗教は不思議にも獨特の神知識を有し、不思議にも發達をなし、終に基督教の現はるゝにまで至れり。

神はイスラエル民族の大天才大人格ごにも、歴史的に自己を開示して、宗教に次第の發達あらしめし後、此の歴史を前驅として現はれたる耶穌基督に自己を開示せり。耶穌はイスラエル民族の歴史の後に於て、アブラハムの裔、ヤコブの裔として、其の無二の才能を以て神の前に立ち、神より其の内性の開示を受けたり。耶穌の透明なる宗教的知能に向つて、神は其の姿を圓滿に現はし、耶穌の深甚なる感覺に向つて、神は其の人格を十分に接觸したり。耶穌には神は客觀的に明白に感覺せられ、今まで人の十分に感覺する能はざりし天父の面目、耶穌の靈覺に分明なりしなり。

然れども耶穌に於ては神が其の靈覺に自らを示せしのみならず、神は更に耶穌の人格の中に入れり、神の人格は耶穌の人格となれり。かくて神の自己顯現其の絶頂に達して完成す。

何をか神が耶穌の人格の中に入りしと云ふ。一には神の思想耶穌の人格となれり。神は其の思想を實に現はして耶穌の人格を造れり。耶穌の人格が此の地上に現はれしといふが、神の直接顯現なり。吾人は自己の思想を顯はして文章を作る。一章一句吾人の苦心の所出にして、我が腸より出でたるもの、従つて我自らの露出なり。藝術家

が心血を注いで作品を起す、一刀一槌其の魂を吹き入れあり。其の生けるが如き作品に作者の人格は躍如として現はる。斯くの如き物を見るときは、其の作者自身を見ずとも、其の人格の美醜高低は直ちに知らるゝなり。耶穌の人格を見るに、其の一線一面、其の一髪の美に至るまで悉く天父の心血を注げる苦心の作なり。其の清高、其の偉大、其の慈愛、其の智慧、皆な天父の思想の實現にして、其の一の瞬きにも、其の一の咳しほきにも、天父の思想の光閃めける如し。耶穌の人格の内面の隅々隈々、其の一細胞の尖端に至るまで、皆な神の思想の凝りて成りしもの、生きて現はれたるものといふを得べし。此れ即ち神が耶穌の人格に入れるものに非ずや。耶穌は神の思想の活エムホワイ現メントなり。

神の思想の活きて現はれたるもの、此れ既に無上に尊きものなり。吾人の人格と生活は神の思想の現はれたるものたらざるは愚か、却つて有られもせぬ思想の形となれるものにして、醜みにくきこと限りなく、耶穌の人格を模範として、神の思想の活現たるに至らざるべからざるものなり。然れども唯だ神の思想の活現のみにては尙顯現は足らざるものと見えて、耶穌の人格に於て神は實に活動せり。即ち耶穌の品性は神の内性

性の活きて動けるもの、耶穌の行爲は神の行爲といふに至り、茲に全く神自らを顯現せり。耶穌に於て神が活動すとは如何なることぞ。耶穌の品性が全然神の品性となり、耶穌の意志する所全然神の意志する所と合一し、耶穌の行爲は即ち神の行爲にして、耶穌人を愛する心動くは即ち神の人を愛するに依り、神が人を愛する心動けば耶穌は乃ち人を愛する行をなすといふに至り、異體同心、其間一毛の隙なく、一織の不調和なくば、是れ即ち茲に神と耶穌との意志の合一全く行はれ居れるにて、神が耶穌の品性となり、神が耶穌の行爲となりたるもの、神が耶穌の内に活動せるもの、耶穌の品性も行爲も神が己れを其のまゝ直接に顯現したるものに非ずや。耶穌は人より生れ、人間に在りて、而して其の靈は神に合ひ、神は天地の主、人類の父として、靈界に在りて而して耶穌の内に活動せり。神と耶穌とは茲に合一し、耶穌の品性は人の品性にして而して神の品性たり、耶穌の行爲は人の行爲にして而して神の行爲たり。此れ實に莊大にして而して無限の結果を孕める事實なり。

古、サベリオスが耶穌基督は父なる神が顯現したる一の様式なり、即ち父なる神自身なり、故に十字架にかゝりしも父なる神に外ならずと唱へしは、當時非正統の説と

して非難せられただけ、餘りに思辯に走り、歴史の事實をも顧みず、人間の経験を無視し、人格の不可割てふことを忘れ、常識を逸したる説明に外ならざれども、然も暗示する所大ならずんばならず。成程耶穌の人格は何所までも耶穌にして、人より生れたる者は人の子なり。アポリナリウス等の考へたる如く、人格の中の或る點に空洞ありて、其所を神が充たすといふ如きこともあるべからず。又父なる神が唯だ肉體を具へてマリアより生れしといふことも思ふべからず。然れども神の品性神の意志は耶穌の品性耶穌の意志と全然合一して、亦二ならざるに至れるは確也。ホレース・ブシネルが我等に近き時代に在りながら、尙サベリオス説に傾き、神の父と子と聖靈といふは、劇の人物の如し、之に依りて隠れたる存在者己れを顯現す、基督は神が人間の生活の限定の下に自らを顯はせるものなりと説きしは、即ち之を思ひてなり (Horice Bushnell, God in Christ)。サベリオスやブシネルには耶穌の人格といふものは無くなれり。よしや有りても其は中核なく自我なく、神の人格に透徹せられたる空虚の形式なり。されど耶穌の人格は必ず自己の中心を有し、割つべからず、侵すべからざるものとして確に存在したるは明なるが、唯だ其の品性其の意志は神と合一し、従て其の行

爲は全然神の行爲たり、神こゝに顯現し居たるなり。

如何にして此の合一あり、従つて此の顯現あり得るか。ツイリアム・ラルフ・インデは人格は透貫すべからざるものに非すと云へり (W. R. Inge, Personal Idealism and Mysticism)。人の人格の内には神の人格透入し得と思へるなり。此は然るべくも思はるれど、何とも定め難き事なり。されど人の人格の内性は神の人格の内性に由て透化せらるゝとは経験の證する所なり。抑も人の人格といふは一個の小宇宙なり。其人の諸の慾望の全體系なり。否慾望の發動し發揚する其の根本の實體存在なり。慾望の集合總計には非ず。されど人格といふ形式の中には内實充滿す。此の内容の高下によりて其の人格の尊卑別る。此れ即ち品性なり、性格なり。然るに此の内容は決して永久に不變なるものに非ず。何時か變化し來るものなり。此れ品性の變化と稱せらるゝものにして最も不思議なることなれど、然も最も望と慰となることなり。其故如何といふに若し人の品性生れつきしまゝ固定して一寸一步も動かす易らざらば、善人は非常に幸福ならんも悪人は不幸此上なし。斯くの如くば教育の要もなく、訓誨の要もなく、將た本人の悔改の要もなし。世は悪人を見棄て、顧みず、悪人は益々其の惡を重

ぬるのみなり。さりどて悪人が善人に變化せんと志したりとて、若し自己の内部の力のみによてせんせせば、決して能くすべくもあらず。何となれば自己の内部には悪人の品性のみありて善人の品性なく、よし善人の品性の要素幾分あるにしても、人格の組織は既に定まりて動くべくもあらねばなり。然るに自己の外に浮動充溢せる善なる品性の要素あり。己れの内に何時しか入り來りて、己れの人格内に潜み、次第に其の要素を加へて、終には人格の内部の大部分となる。斯くの如きときには其の品性は透化せられしなり。其人はもはや悪人に非ずして善人なり。人格の形式、即ち何の某たることは依然として前の人と同じかるべきも、其の内實は全く異れり。ルドルフ・オイケンが常に靈的生命は人の内部に在るのみならず、外部にもあり、一の生命なり。若し内部のみに在るものならば如何で人に新生命あり得んやと論ずるものは、亦此の點を考へたるなり (L. Eucken, Hauptprobleme der Religionsphilosophie der Gegenwart 其他)。之を今の心理學にて説明せば即ち潜在意識の問題なり。吾人の人格は自己の意識せる所と、自己の意識に入らざる所とあり。此所は他人も勿論知らざるなり。自己の意識せる自己は極めて狭き小さきものなり。之を譬ふれば磯の岩の如し。岩は海面に

露はれたる所は極めて小なれども、水面下には大いなる根の隠れて山の如きものあり。人格之に似たり。吾人が自ら何をせんと欲し、又何をなしつゝありと知れる自己は此の現はれたる自己なれども、實は隠れたる所にも吾人は外よりの刺激を受け、影響を受け、自ら又常に何事かを爲しつゝあるなり。故に自己にては何等の印象も影響も感化も受けず、何も知らずと思へることが、實は自己の人格内に潜入し居りて隠れ在ることは夥しく、平素は之が全く顯はれざれど、異常の事情の下には屢顯はれて、己れを驚かし人を驚かすことあり。吾人が曾て見もし聞きもせぬことを夢に夢みる如きも其の一にて、催眠術にかゝる時などには、此の潜在せる意識が豊かに顯はれ來り、無學の者よく大學者の知識を有し、無能のもの能く不思議なる事を爲す。然し普通の普通の場合は、此等の潜在意識は潜在して了るなり。フレデリック・マイアース (F. H. Meyers) の如きは、此の潜在意識の方が第一人格即ち顯在意識の方よりも偉大なり、死後の世界に活動するは此の人格なり、現在の天才者は此の大なる人格が現世にて活動するものなりと考へたり。斯くの如き潜在意識の詳細點に至れば、學者の間尙議論區々にして、吾人また去就に迷ふと雖も、然も潜在意識といふが如きものゝ存在する